
ギマイスター亮

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギマイスター 亮

【Nコード】

N0312B

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

水上亮17歳。義理の妹三人と奇人変人の友達、知り合い、顔見知り、に囲まれて平凡だけど忙しい毎日を送っている。お笑いが50%とちよいエロが40%。そして、その他諸々が10%を占めるお騒がせ日常風コメディ。それでは、ギマイスター 亮、発進っ。

第1話：俺の朝と賑やかな連中

俺は走っていた。

ものすごい全力疾走である。陸上世界記録保持者もびつくりの記録だろう。

では、何故走っているのか？

別に怪物に追われている訳でも、悪戯して雷親父から逃げてる訳でもない。

それは後ろから、男なら一度は叶えてみたいハーレム的な数の女の子に追われているからだ。

口々に、「お兄ちゃん」「お兄様」などと叫ばれた日には、普通の男なら間違いなく嬉し涙を流して喜ぶだろう。

ちよつと野太い声で「兄貴っ」って聞えるが、それは聞えてない事にする。と言うか、消えてくれ。

俺はお前等のお兄ちゃんではないんだ。頼むから来ないでくれ。

——これ以上、妹はいらないんだよ！

「おつきろお、兄貴っ」

「ぎゃっ」

「もう一発っ」

顔面、特に鼻に痛烈な痛みを受けて飛び起きる。

あの鼻の奥に、独特の匂いと痛みで急速に覚醒していく意識に、更にもう一撃お見舞いされる。

この力の加減の知らない拳を振り上げてくる奴は、この家には一人しかないない！

「痛てえよっ、琥珀！」

「グッモ〜ニンツ、兄貴。いいお目覚めは出来た？」

痛む顔を押さえて起き上がると、俺の上に見慣れた物体が座って手を振っていた。

満面の笑みを浮かべてこちらを見ているその顔に、軽い殺意を覚えながら睨みつけてやる。

「兄貴を殴るとは……なんて、弟だ」

「あたしは、女の子だよ！」

「ぐふっ」

鳩尾に一発。握りしめた拳が容赦なく撃ち込まれていた。

「打つ」ではなくて「撃つ」とはまるでミサイルのようなパンチだからだ。

そして訂正しよう。

こいつは女の子だ、それも俺の妹。

あのでこぼこのない身体でも、女の子に見えない言葉遣いでも間違いがあってもなくても一応は、女の子だと言う事だ。おっと、こんな冷静に解説している場合ではなかった。どうやら俺は、寝ていて夢を見ていたと言う事か？

それにしても、なんて夢だったんだ。

体操着の女の子、しかも紺色ブルマ着用という夢のような格好とフンドシー丁の野郎共に『おにいちゃん』『兄貴』呼ばわりされて、追いかけれないといけないんだ。冬なのに汗だくになってるぞ。

「グッモ〜ニン、じゃねえよ。毎朝何するんだ、お前は」

「目覚し時計の代わり？　こんな可愛い目覚まし時計はいないよ？」
可愛く首を傾げてるんじゃない。こんな暴力的な目覚し時計はいらないぞ。

と言うか、自分で可愛いと言っているあたり、随分と痛い事だ。それに俺は頼んでない。

朝は比較的起きれる方だし、問題はない。だから、起こしにこななくても大丈夫だと言っているのに絶対に聞かない。

と言うか、聞こうともしないで段々とエスカレートしていつている。そのうち俺、この世とおさらばかも知れないな。

「それより、下りろよ。起きられないぞ」

「むう、分かったよ。それより、兄貴……」

渋々と俺の上から退いていく琥珀は、ため息をつきながらベットから下りて一言。

「……欲求不満は、体に毒だよ」

ポンポンと肩を叩いて、悲しそうに目を伏せて首を横にフルフル。琥珀はそのまま、俺の部屋を後にしていた。

呆然としている俺は、暫く経ってやっと言葉の意味を理解した。なんてマセガキだ。これは、朝だからしょうがない事なんだよ。男なら誰だってなるんだ！

決して、欲求不満などでは……決して、決して――

「だあー！」

あいつにこんな侮辱を受けるなんて、ショックだ。俺、生きていけないよ。

それより、女の子ならもう少し恥じらいを持て、琥珀。俺の方が恥ずかしいってどういう事だよ。

「お、おにいちゃん……どうしたの？」

部屋の入り口。開け放たれたままのドアから声が聞える。琥珀の奴、また閉めていかなかったな。

何回言ったら、ちゃんとできるんだよ。それより、あのドアの間でピコピコ動いている物体はなんだ？

「お、おにい……ちゃん？ 朝から叫んでるけど、おかしくなった？ もしかして壊れた？」

未だにピコピコ動く物体が更に小刻みに動き始めた。さらりと酷い事を言うものだ。

しかし、未確認物体だな……あれ。もしや、宇宙人か？

あれは宇宙人の頭についている触角なのか。

俺はさらわれて、改造されて宇宙の果てに売り飛ばされて、見世物小屋で一生を過ごすのか？

否、それだけは、嫌だ。

よし、宇宙平和の為にここはこいつを捕まえて、逆に見世物小屋に売ってやる！

「この宇宙人め！」

「ひにゃ！」

触覚を無造作に掴んで思いつきり引つ張ると、あら不思議。

思いのほか軽く勢いよく、俺の胸へとすっぽりと収まっていた。

なんとも小さい宇宙人だ。

「なんだ、瑠璃るりか」

「はわわ……お、おおお、おにいちゃ……」

俺の胸にすっぽりと収まっているのは、瑠璃だった。俺を見上げる顔一面、真っ赤だ。

両手を胸の前で所在無さに動かして恥らうポーズは最高である。こっぴどく恥じらいが、女の子なんだよ。

じゃなくて、俺が掴んだのは瑠璃の髪の毛のようだ。

どうやら、ツインテールに結ばれた髪の毛だけが見えていた訳だ。いや、気付いていたよ？

さすがに長年一緒に暮らしている家族ぐらい、すぐに分かるぞ。

「何か用か？ 瑠璃」

「えっと……あの、その、あの……」

俺を見ている瞳は潤んで、妙に色っぽい。さすがは、天然系。男心をくすぐる技を体得している。

恥ずかしそうに、チラチラと見るその仕草は普通の男ならイチコロだ。イチコロって古いか？

こいつは異様に恥ずかしがり屋で、人前で話するのは大の苦手という筋金入りの人見知り気質。

そんな性格だから、よくパニくっている。今もパニくっているわ

けだが……て、まずい！

「い、いいい、いちばんっ！ 瑠璃、脱ぎます！——ちやらららあゝん」

「だあ！ 待て、瑠璃っ。脱ぐなあ！」

目がグルグルと廻っているほたるは、着ている可愛い猫柄のパジャマの上着に手を掛けて、脱ぎ始めていた。

しかも今回は自分で歌ってるバージョンかよ。まずいぞ、これは最高潮にまずい。

チラリと覗く白い肌と二つの山に一瞬ドキッとした。随分と成長したな、お兄ちゃん嬉しいぞ。て、そんな事を考えている場合ではない！ 止めないと、こいつはこのまま全部脱いでしまうんだっ

た。

昔のペッタンコならまだしも、今の身体で脱がれた俺は——

「野獣と化しますね……おにい」

そうなのだ。俺は野獣と化してしまう。だから、琥珀にも欲求不満などと……！

「朝から、夜の情事とは……。おにいも、中々やりますなあ」

「うおっ！ さ……さんごっ！」

「グー出るパー勝つ……ちやお」

意味不明な事を言って手を上げている珊瑚さとうは、ほとんど無表情に俺を見つめている。

少しは笑うか軽蔑するか、表情をつくってくれよ。俺もリアクションに困るんだぞ。

「何が言いたいんだよ」

「朝の挨拶」

もしか、「グーテルモーゲン」って言いたかったのか？

しかし、何故にドイツ語？

それを分かる俺もすごいと思うぞ。さすがは、長い付き合いと言

うべきか。

「それにして……朝からお盛んな事ですね。……この鬼畜外道」
「ぐお」

精神に1000ポイントのダメージ。しかも、どこ見ながら言うてんだよっ！

畜生、どいつもこいつも俺をなんだと思っただよ。もう立ち直れないかも……。

「だあー！ お前も見えてないで止めるやつ、珊瑚っ！」

「なんで……いつもの事じゃない。今更、瑠璃の裸見たってピーはピーピーなくせに」

「意味もなく、放送禁止用語使うなっ！」

自分でピーピー言うなよ。そして、言い終わってから頬を赤くするんじゃない！

まったく、こいつの言動はいつもおかしいよ。まともな事を言っているようで、少しだけズレている。

こいつの感性を誉めるべきか、注意するべきかいつも迷ってしまふ。

「とりあえず、止めろっ」

「分かりましたよ。一番、瑠璃さん優勝」

珊瑚がそう宣言すると、瑠璃はピタリと動きを止めて、そしてガッツポーズ。そのあと、何故か手を振っている。

もしか、観客にアピール？

どういう状況で設定なんだよ。そして瑠璃は、見事に全裸一歩手前。

辛うじて、下着だけを着ている状態。毎回思うが、そのガッツポーズに何の意味があるのか教えてくれよ、瑠璃。

「え……あ、あれ？ きゃあ、お兄ちゃんのえっちっ」

「ぐはっ」

そしてお決まりの行動をして、部屋を出て行く瑠璃。

何故に、毎回ピンポイントで急所を狙ってくるのか教えてくれ。

「その内、使い物にならなくなりますね……。若いのに、大変」
「う、うるせえよ……」

珊瑚の哀れみにも似た声を受けながら、俺は悶絶していた。

俺の朝って、なんでいつもこうなんだよ……。

第1話：俺の朝と賑やかな連中（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

思いつきで書いたもので、たぶん不定期更新となると思っています。
打ち切りにならないように書いていきたいと思っていますので
よろしくお願いします。

第2話：俺と学校と変な奴等

朝は、いつもあれだ。

もう少し静かに出来ないのかと思うが、これが我が水上家の朝だと言ってしまうえば、それで通ってしまうのだからしょうがない。

逆に静かだと寂しいと思ってしまう自分の心に、ちょっとした矛盾を感じてしまう訳なのだが……。

「眠いよ……ふぁ」

「琥珀ちゃん、朝早く起き過ぎなんだよ」

「朝五時から起きて何してるのか…この若年寄」

俺を囲む三人の会話。

仲の良い姉妹の会話だが、せめて俺をどけて話してくれないか？左腕に瑠璃、右腕に琥珀が絡みつく。そして俺の首を絞めようとしている珊瑚。一人、ポジションがおかしいけど、これはいつもの事。

この見事な妹トライアングルに囲まれている俺——それぞれ俺の身体を掴んでいるので、とても歩き難い事この上ない。

そんな訳の分からない事をしながら、いつものように学校へと向かっている俺達だが、こんなに寄り添って歩く必要は普通ないだろう。

隙間なんてないぞ？ 冬だから暖かくて丁度いいが、夏にやられるとたまったものじゃない。

すでにこの光景は朝の名物で、周りに行く連中は俺達を見て、羨望と嫉妬の視線を交互に飛ばしてくる。

いい加減、俺も慣れたからお前等も慣れる。そして頑張れ、俺。世間の目は、生暖かくて厳しいぞ。

「どう思う？ お兄ちゃん」

「ん……確かに早い気がするな。そして、俺が迷惑を被る」

「別にいいでしょ、あたしが早起きしようがそんな事は。ねえ、兄貴？」

「いや、だから俺が迷惑を被ると言っているだろ？」

左右から覗き込むこうに、俺の顔を見ている瑠璃と琥珀。同じ顔に見られると慣れてない奴は混乱する。

こいつ等は、簡単に言えば双子。難しく言うと、一卵性双生児。でも双子は双子だ。

ショートカットの髪に綺麗な天使の輪をつくってクリクリとした瞳に長めのまつ毛。そして、小さくスツと伸びた鼻に同じく小さく艶の良い赤い唇をしているのが妹の琥珀。

一方、顔のパーツはまったく同じでツインテールの長い髪をしているのが姉の瑠璃。髪型が同じだとまったく見分けがつかないが、性格に関してはまったく正反対。おっとりして人見知り、恥ずかしがり屋の姉の瑠璃。元気で無鉄砲、豪快な妹の琥珀。

どうしてこうも見事に反対なのか、教えて欲しいぞ。まるで漫画やゲームの世界だ。

「珊瑚……お前、お姉ちゃんだからどうにかしろよ」

「それは無理。ボクの手を離れた可愛い妹達は、晴れて自由の身です」

首にしっかりとしがみ付いてるので、顔が後ろに向かない。

仕方がないのでそのまま話しかけるが、まったく相手にしてくれない。こいつ等の姉ちゃんなのに冷たい奴だ。

——珊瑚は、瑠璃達の姉である。

そして、俺と同級生でしかもクラスメイトだ。セミショートの髪に長いまつ毛が下向きの三白眼。小さくて可愛い鼻と薄いピンク色した唇。しかし、こいつはほとんどが無表情のポーカーフェイス。しかも独創的な頭の持ち主で不思議系。でも、その頭脳は学年でトップの秀才。

先生達の期待も高く、有名大学に進学させようと必死に説得しているらしいがどれも速攻で断られて途方にくれていると、泣きなが

ら俺に話してくれた先生がいた。しかし、生徒を居酒屋に連れて行くのはどうかと思うけどな。

「おにいは、まだ手がかかるおこちゃま。だから、ボクがしっかりと更生させてあげるよ」

「いや、更生せんでも俺はまっとうだ」

拳を握りしめて俺に見せるように、首に思いっきり抱きついてくる。

こいつの身長は150ちょっと。俺、170強。見事に首にぶら下がるおもちゃの出来上がりだ。しかし、この状態だと珊瑚のふたこぶラクダが背中に、ぽよんぽよんと当たっているのだが……これまた瑠璃に負けず劣らず成長しているもんだ。

「おにい……えっち。ボクはおにいの嗜好は調査済み。机に隠してるもんね」

「ば、ばか！俺はっ」

小声で俺に、耳打ちする珊瑚の声は妙に色っぽくて、心臓がツイストを踊り出していた。

モロにばれてる。

俺の思考と嗜好は、すでに把握済みなのかっ！微妙にダジャレが出来てる。思考と嗜好……。そんな事より、机に隠してある俺が友達から譲ってもらった、大人のバイブルまで知ってるなんて！こいつ、いつの間に調べたんだよ。

普通はベットの下が定番だが、ここはあえて机という斬新な場所に隠したと言うのに——ばれてる！

しかし、こいつは俺を「おにい」と呼ぶが——これは「おにいちゃん」の略——でも、俺とこいつは同級生だぞ？お兄ちゃんではないのだが、自分だけ仲間外れは嫌だとか言っつて、そう自分勝手に呼んでいるのだ。やっぱり、こいつの考えている事は、さっぱり分からない。

大体、こいつ等のお兄ちゃんになったのは十年前。

俺が六歳の頃だ。それまで、俺は一人っ子だった。つまり、こいつ等は血の繋がらない家族。

——義理の妹

だが今はそんな感じは一切なく、すっかり馴染んでしまっている。なんて考えていたら、俺の両脇では未だにさっきの早起きの事を言っているし、後ろからは誰に話しているのか分からない声が延々と聞えていた。これは、ある意味拷問だ。

さっさと学校に行こう。

「待っていたぞ、水上亮っ！」

あの状況のまま学校に着き、校門を入ったところで大声で俺の名前をフルネームで叫ぶうっとうしい声。

またかよ、こいつは。毎朝、俺の名前を大声で叫んで何がしたんだよ。

「今日こそは、決着をつけてやるぞっ！」

「うるせえよ、ハゲ」

「ハゲではないっ！ これは剃っているんだっ」

朝日を受けて神々しく光る頭に、周りにいる奴等は目を眩ましている。

さすがに冬は威力が落ちるが、それでもこのハゲの頭はすごい。もしかして、蓄熱式か？ フルチャージしたら、風呂でも沸くかも知れない。しかしいつもの事なので、俺はサングラス着用。これでこの攻撃からは免れる。瑠璃達も、しっかりと学習しているので、サングラスをかけている。

「で、何の用だ？ メロンマスク二世」

「誰が、メロンマスク二世だつ、変な呼び方をするなっ！」

頭に浮かび上がる青筋は、頭全体に広がってマスクメロンのように見える。

それでついたあだ名がメロンマスク二世。何故一世ではないのかという疑問は、こいつの親父が同じような頭をしているので、それで二世なのだ。こいつにはピッタリなあだ名なので、誰も変えようとはしない。どこか、リングネームみたいでかつこいいぞ、ハゲ。

「はいはい……それで、はげますようにが何の用？」

はまもり かなめ
「浜守要だっ！ 誰も『守』を『す』とは読めんだろっがっ」

自分で何を説明しているんだ、こいつは。しかし、確かに読めんだろっな。

「だから、お勉強がてら呼んでいるんだよ。はげます君」

「浜の間に、『げ』を入れるなっ！」

まったく、ああ言えばこう言う奴だ。別にお前の相手なんてしたくないんだよ、こっちは。

それを毎朝、こんな所で待ち伏せしているから仕方なく、相手してやってるだけだ。ありがたく思えよ。大体、頭以外特徴のない顔をしているんだから、紹介する方の身になってみる。頭しか、紹介のしようがないんだよ。まったく、もう少し特徴をつけて出直して来い！

「兄貴……ハゲ先輩、いつにも増して元気だね」

「ちよっと、しずくちゃん。ハゲ先輩はひどいよう。あれは、ハゲじゃなくて坊主って、言うんだよ。ハゲではないよ」

「何気に、ハゲを連発する瑠璃もすごい。でも、あのハゲは毎朝見るにはうっとうしい面ね」

三人の容赦ない言葉責めに、すでに意気消沈して撃沈しているハゲ。

泣くなら始めから出てくるなよ。

いつも毎朝、こいつらに言われてる事だろうが……。もしかしてこいつ、言葉責めフェチか？

「だらしないですわよっ、委員長っ！」

ハゲの後ろ、眩しくてまったく見えなかったが、そう言えばこいつもいたんだ。

朝から本当にご苦労様って感じだよ。ずっとハゲを後光代わりにして出てきたのは、一人の女子生徒。その風貌は、いかにも優等生そして、お決まりの黒ぶち眼鏡をかけている。三つ網、膝下スカートなど今のこの国では最早、天然記念物かも知れないぐらいの人物構成だ。

「おはようございます、水上先輩」

俺に向かつて頭を下げる女子生徒につられて、俺も頭を下げる。礼儀つてものはちゃんとしなさいといけないんだ。

そう教えられたんだよ、親父に――。

「ああ……おはよう、倫子」

「やんっ……倫子って、呼び捨て……きゃっ」

颯爽と現われてきたのに、この変わり様。身悶えてクネクネと体を動かしている姿は軟体生物。

こいつといい、あのハゲといいまともな奴はいないのか？ うちの学校の風紀委員には。

さっきの浜守は、風紀委員長でこのクネクネしてるのが、一年で副委員長をしている御佳倫子。みよしりんこ

「あっ、倫子ちゃん」

「あはよう、瑠璃さん……ついでに、琥珀さん」

「ついでって、何よっ」

同じ一年の瑠璃達の同級生で、クラスメイト。しかも、意外と仲がいいときている。

一歩間違えば喧嘩になりそうな事を言っているが、当の本人達は笑顔で話し合っている。よく分からない組み合わせだが、仲が良いのはいい事だ。

「それで、今日は何なの？」

「それがね……聞いてよ、琥珀さん。また、ハゲが暴走して……困っちゃうのよね」

肩を竦めて話す倫子だが、仮にも先輩で委員長をハゲ呼ばわりか？ 人望ないな……ハゲ。

「ハゲハゲいうなっ」

「お……やっと、復活したか。たこ將軍」

「たこ言うなあ！ 今度はたこかよっ、ハゲ言ったりメロンマスク二世言ったり、うっさいぞっ」

勢いよく立ち上がり叫んでいるハゲ。今度は、顔中真っ赤だ。まるでゆでだこ、だからたこ將軍。

ちなみに、近所に同じ名前のたこ焼き屋があったりもする。安くおいしいので、生徒達に大人気だ。

「水上、勝負だっ」

「だから、何のだよ」

「今日こそは、お前に捕らわれた愛しの——」

ハゲが話し始めたその時、待ってましたと言わんばかりにタイミングよく、チャイムが鳴り始めた。

「あ、始まつちゃうよ。行こう、琥珀ちゃん、倫子ちゃん」

「もう、またハゲのせいで遅刻寸前に、なっちゃったよ」

瑠璃と琥珀はそう言いながら、校舎へと走って行く。その後をしつかりと追っていく倫子。

本当に仲の良い事だ。残された俺に珊瑚が肩を叩き促してくるので、そのまま校舎へと向かう事にした。

「毎朝、ご苦労様って感じ……」

「それを言ったら、俺達もだ」

大体、いつも俺に勝負だと言ってくるが、勝負した覚えがない。それも全て、チャイムが鳴るからだ。

ミスターチャイムマンと俺は勝手に呼んでいるが、それも当たっていると思う。

色々とあだ名があつて羨ましい奴だ。

後ろを振り返ると未だに呆然と固まっているハゲがいるが、捨てておこつ。

それより——いつも俺に何の用なんだよ、あいつは……。

第2話：俺と学校と変な奴等（後書き）

すっかり、2話の投稿を忘れてました（汗）

1話は、微妙なところで終わってますし、自己紹介なしなのでさっぱりだと思ってます…。

この話、本当にストーリーなんてありません。

いきあたりばったりの脳内構成ですので、たまに理解不能な事が起きるかも知れませんが、そこは笑って許してください。

第3話：教室での一時とおかしな学校

教室というのは、賑やかで騒々しいもの。怒声と悲鳴、奇声と歓声が木霊する場所。

そして、教科書や椅子が飛び交ったりする場所でもある。

「今日も元気だな……あいつ等」

「そうですね。学生の本文は、遊んで遊んで、遊び尽くす事」

教室に入って、珊瑚の第一声がこれである。微妙に間違っているが、あえて否定はしない。

俺も激しくそう思うぞ。

「しかし……よつと——これは、ほつ、すごいな」

「そう……ほつ。ふつ……中々、おにいもやるね」

「お前もな……おつと」

俺と珊瑚の間を教科書達が飛んでいくので、これを綺麗に避ける。顔を見合わせて、お互いを称えている。

しかし教科書って意外と固く、当たると痛い。特に角なんて当たったら、あの世が見えてしまうかも知れない。

今行われているのが、我がクラス朝の名物『教科書合戦』空前の大ブームになっているものだ。と言うのは嘘で、要するに教科書を投げ合うはた迷惑なものだ。まったく、相変わらずの奴等だ。頼むから、自分の机でやってくれよ。今日の被害者は、誰の机だ？

「あれは、おにいの机ですね」

「なにっ」

ごく普通にそう言っている珊瑚の手には、いつの間にか教科書が握られていた。

「ほい……どんぞ」

ポンツと渡してくるので反射的に受け取って見ると、そこには俺

が長年掛けて丹精籠めて落書きした教科書があった。

俺の最高傑作っ！

「これは、俺の教科書、現国君一号っ」

「そうですね。そして今も四散していく、おにいの教科書……って、一号ってなに？」

「そんな事は今は聞くな、ぬおっ——日本史上等兵がっ」

そうこうしている内に、俺の机からは全ての教科書達が飛び出していた。誰だ、俺の机を教卓の前にやったのは。

俺の席は、窓際の一番後ろで特等席だぞ。それを、あんな安眠も出来ない地獄のような場所に、追いやるとは！

だが今は、そんな事はいい。

見るも無残に、教室中に散らばっている教科書達が俺を見て、敵を討ってくれと言っているのだ。

よし、任せておけ。お前達の敵は俺がとるっ！

「逃げないでよ、お兄ちゃんっ！ 大人しく捕まりなさいっ」

「うるせえ、逃げなきゃ俺が死ぬだろうがっ！」

未だに騒ぎながら、俺の机の中の物を投げあう二人。今、残っているのはノート達だ。

あいつ等は身体が薄くて弱いんだ。そんな奴等を投げるなんて、許せない。かわいそう過ぎるだろうが！

「一辺死んで来いって言うってんだから、いいのよっ！ お兄ちゃんっ」

「俺が嫌なんだよっ。まだいっぱいした事があるんだっ！ あんな事やあんな事や、こんな事をあんな事してっ」

「気色悪いわよっ」

周りはずでに机ごと非難しており、ギャラリーモードにチェンジしている。

売り子してるのは、どこのどいつだ？

ダフ屋までいるのかよ、今日は。しかし、そんな事は今はどうでもいい。今は俺の机を回収しなくてはならない。

なぜなら、授業中に寝れないだろ？ あのと至福の時を俺の手に取り戻せっ！

「だあ！ お前等いい加減にしろよっ」

俺の声に教室中の視線が、一斉にこちらに向く。よくも教科書達を、亡き者にしてくれたな。

この無念、晴らさずにおくべきかつ！

「おにい……論点がずれてます」

「うつさい、今は言うな。と言うか、心を読むなっ」

隣から冷ややかなツツコミが入ってくるが、今は言うんじゃない。これから教科書達の弔い合戦だ！

「あつ——珊瑚ちゃん、亮先輩おはようございますっ」

「さんごっち、おはよあ。そしてそこにいるのはっ！」

「うい、おはよ、みっちー……そして、ボンクラ兄」

「ああ、おはよう。美鶴^{みづる}、功治^{こうじ}……じゃないわあ！ お前等

冷静な朝の挨拶なんてしてるんじゃないっ！

にこやかに手を振る女の子——こいつは、佐々木美鶴^{ささきみづる}。

目の前にいる変な男の妹だ。

綺麗な艶のあるセミロングの髪と、丸くちよつと目尻が垂れている瞳に、上向きにカールしたまつ毛。小振りな鼻にピンク色のプリツとした唇。可愛い部類に入るが、意外と喧嘩っ早い性格で、琥珀と仲が良い。

あいつと組んだ美鶴は最強タッグ——どんな奴でも敵わないと思うぞ。そして、顔に縦線がびっしり入って、シヨックを隠し切れないこの男。小声で「ひどいよ……さんごっち」とか言ってる。気持ち悪いぞ、お前。いや、こんなに冷静に観察している場合ではなくて、こいつ等……俺の机に何て事を！

「こらっ、美鶴、功治っ！ 人様の机に何してんだよ、教科書さん達に謝れっ」

「だから、おにい……頭痛い人になってる。かわいそうな人に成り下がってるよ」

「うつさいわあ、これは俺の問題だ」

冷たすぎるツツコミにもめげず声を張り上げる俺に、周りからは冷ややかな視線がビシバシと降り注ぐ。

まずい、本当に頭が痛い人になっっているようだ。しかし、ここまできて引く事など出来るかっ！

「引き際を間違えた愚かなおにい」

「うつさいっ、それ以上言うなあ」

それから無表情に笑うなっ、気色悪いから。ニヒル過ぎるぞ。笑うなら声を出せ、声をつ！

「おお……我が友、イモウトスキー亮っ！」

「そっという呼び方するんじゃないやねえ！ 功治っ」

「愚負っ……そして、挫苦……」

お腹を押さえながら倒れこんでいく功治。意味分らない事を言ってるんじゃないよ。

こいつは、俺の一応友達なつこうじの佐々木功治。そして美鶴みかくの兄だが、こいつらも俺と同じで義理なんだ。だから俺と功治が仲がいいとかではなく、幼稚園の頃から一緒のただの腐れ縁。

それがなければ、こんな奴が友達だとは思いたくないが、それが事実なんじゃない。

ショートウルフでアッシュブラウンの染めた髪。切れ上がった目尻をした瞳と男にしては格好いい。それに筋の通った鼻と凛々しい口元に女子達はクラクラとするというのに、こいつの場合は性格が最悪なんだ。

幼稚園の頃は、まとな奴だったのに……。

「ありやゝ、お兄ちゃんだらしないなあ。ま、いつか……これで少しは懲りるかなあ」

「それで、今朝はどうしたんですか？」

「今日は、私の下着の色が気にいらないとかなんとか言っつて、自分の持つてるのを穿かせようとするの」

「それはキモイ。さすが、ボンクラ兄……やる事が変態の極みです

ね」

酷い言われようだな、功治。だが、自業自得だと思っぞ。そんな事をしていれば、いずれ捕まるぞ？

俺は絶対に面会には行かないからな。友達とは思われたくない。と言っか、妹相手に何してんだよ……お前。

「俺は自分の信念を貫こうと……俺は義妹が……そして、白が好き

——」

「それが気色悪いのよっ」

「げふっ」

倒れこんでいる功治に問答無用の踵落とし。相変わらず、手加減なしの一撃だ。しかし、そんなに足を上げると可愛いピンクのフリフリが見えてるぞ？ それに見る、周りには御定番のカメラ小僧共が、うじゃうじゃと集まっているではないか。

こいつ等、学校に何持つてきているんだよ。

それにしても、高そうな一眼レフだな、あれ。大きな望遠レンズをつけて、何撮るつもりだ。

「さて、この惨状をどうしたらいいんだ？」

「とりあえず、拾う事だよ……おにい」

「そうだな、珊瑚そっち頼む」

「了解っす……あ、えっちな本発見」

そう言って掴みあげているひかるの手には保健体育の教科書。それはえっちな本とは言わない。

そして全てを拾い終わって、ふと見れば——そこには、無残に山積みされた哀れなカメラ小僧達の上に立ち、勝利のポーズをとっている美鶴がいた。だから、見えてるって……。

「おらあ、席に着けえ。そして、このゴミを片付けろ」

そんな状況の中、呑気な声を出して教室に入ってきたの担任の聖先生。

おもむろ

徐に蹴っているのは、床に転がる功治。ゴミとは酷いものだ。

「邪魔な奴だ。まったく、なんでいつもこいつは寝転んでいるんだ

……」

「ぐえっ」

そう言いながら、功治を踏みつけていく先生。それはあまりに酷いのでは？

しかし、これも自業自得だしな。それにしても不精ヒゲに首からタオルをかけて、三本ラインのジャージに雪駄という今時の先生とは思えない格好をしているが、それでも”先生”という肩書きを持っている立派かどうかは分からないが、先生だという事だ。

しかし待てよ？ 確か、聖先生って――。

「水上……減点50」

「何がっ！」

「私をバカにしただろ？ これでも、勘だけで生きてる人間は強いんだよ」

勘だけで生きている人間――で、すごい事言ってるよ。この先生は一応、生物の分類上哺乳類人科の女だよな？

しかし、あの長い髪も半年以上も洗ってないような、艶無さはどうだ？ 結婚適齢期という言葉を知らんのか？ もしかして、それがシヨックで不精ヒゲが……。

「これは、ヒゲではない。朝、机にアゴついて寝ていたら、下に敷いて紙のマジックが付いたのよ」

「なんて、紛らわしい」

それが二十代の女性がする事かよ。それより顔を洗ってこいよ、先生。

そんな俺の心の声は届かないらしく、教卓の前に立つ先生はやる気なさげに出席をとっている。出来れば頭かきながらするのは、やめて欲しい。

なんだか、女性に対する理想というものが崩れ去っていく瞬間を垣間見た気がする。

「今日は、現国の杉本先生と理科の杉山先生、それと日本史の杉寺先生が一身上の理由で欠席です」

教室内の声が一齐にストップする。最早、ツツコミどころが多すぎて誰も突っ込めない状態だ。

今更ながら、なんで「杉」が付く先生が多いのかとか、一身上の理由ってなんだ？ とか――。

「それは知らんよ、水上。という事で、午前中は全て自習だ」

やっぱり、俺の考えている事が筒抜けになっている。それにしても午前中って、あと一つ授業があるはずだが、

「は……？ 聖先生の授業があるでしょ？」

「私は今から実家に帰ってお見合いがある。……大変なんだぞ？ これでもモテモテだ」

その言葉に、再度フリーズ。

嬉しそうに頬を赤くする聖先生に驚きすぎて、誰からも言葉なんて出てこない。

この先生からそんな言葉が出てくるなんて、驚き以外に何があるって言うんだよ！

「おうっ、浅川が倒れたぞっ」

「衛生兵、出動だっ！ うおっ、こっちで清水が泡噴いてるぞっ」

「急げっ、敵は強敵だ！ 心してかれっ」

バタバタと忙しく教室内を走り回る衛生兵。もとい、保健委員が右往左往。

戦場と化した教室内で、静かに声を上げている一人の女。

「……お前等、全員覚えてろよ」

そう言う前に授業しないでお見合いに行くあんたはどうなんだよ

⋮
o

第4話：ギマイスター亮誕生？

——私立王国高校。

この町に存在する一風変わった高校。県立なのに私立を名乗り、名前は王国と書いて『キングダム』

生徒はそんなに多くないが、朝のハゲみたいな奇人変人が集まるおかしな学校なのである。

俺は家から近いと言う、よくゲームの主人公の使う手段でここに決めたが、こいつ等にはここ以外に色々あったはずだ。隣町には女子高や有名進学校もある。特に珊瑚は多くの進学校から誘いがあつたがそれを全て断つて、この学校に入った変わり者。本人に聞いても教えてはくれないが、ここには中学時代からの友達も多いのでそれで選んだのかも知れない。

「それで、なんでお前等がいる？」

こいつ等と言ったのは、ここに居てはおかしな連中がいるからだ。

「あたし達も午前中は自習なんだよ、兄貴。」

平然と俺の横に座る琥珀。

そこは、違う奴の席だが？ と、よく見ればこちらを見て手を振っていた。

口パクで「お兄様、よろしく」って、何をよろしくするんだよ。

お前によく言われる筋合いはないぞ、クラスメイトA。

「そうなの。それで、琥珀ちゃんがお兄ちゃんの所に行くって言うから……」

俺の後ろに隠れるように立っている瑠璃。だが、俺は座っているので、隠れきれてない。おどおどした様子が、ハイエナにエサをあげているようだ。こちらを見る男子の視線が危なく痛い。変な妄想するなよ。した瞬間に殺^やるぞ——。

「なんか……先生がいっぱい休みらしいから自習だつて、担任が言

つてた」

「私達の担任の先生も今から用事があるって、さつき帰っちゃったの」

なんて学校だよ。先生がそんな事でいいのか？ まったく授業やる気もする気がない。しかも廊下には溢れかえる生徒の群れ。まさか、どの学年も自習という事なんだろうか？ この学校、いつか廃校になるぞ。

「おうっ、イモウトスキー亮っ」

「うっさいっ」

「おっと、お前に用はない」

颯爽と現われて、俺のパンチを軽々と交していく功治に少しむかつく。いや、少しどころかなりむかつく。

その人を馬鹿にした顔に浮かべた爽やかなスマイルほど、むかつくものはない。

「ねえねえ、瑠璃ちゃん」

「え、あ、はい……」

「いや、あのね。そんなに怖がらなくても……」

頂垂れる功治に、何故か無性に嬉しくなる。未だに瑠璃に懷かれてないとみた。

すでに出会って10年近く経つが瑠璃が懷いた男は、俺以外いないのだ。嬉しいが将来が心配だよ。

「あの……ね。瑠璃ちゃんは何色が好きかなあ？」

「え、えっと……その、わ、わたしはし、しろが……」

しどろもどろに応える瑠璃に、見る間に顔を上気させていく功治

「よっしやあ！」

「ひゃっ」

俺の後ろに隠れるようにして震えていた瑠璃は、あまりの事にしやがみ込んでしまった。

見えなくても、その様子はよく分かる。こいつの人見知りは、筋金入りの鉄筋コンクリート並。

「おい、功治——瑠璃を脅すなよ。怖がつてるだろうが」

「脅してはないぞ？ 俺は好きな色を、聞いただけだ」

そう言いながら、制服のあちらこちらに手を入れて、何かを探すような仕草をしている。

何してんだ？

まさか、こいつ持って来てるのか？ 朝の騒動の原因を——。

「白が好きな瑠璃ちゃんに、是非コレをつ！ 真っ白はんふぐふお」

「そんなもん出すなあ！」

俺の右手はこの時——音速を超えた。目にも止まらぬ速さで打ち抜かれたパンチは、功治の顔を捉えていた。

まったくこいつは、なんて物を出そうとしているんだ。そんな物出したら、また瑠璃がパニックになってしまっただろうが。

「おにい、容赦ない。でも……しょうがないね、このボンクラ兄は」
「気にするな。こいつは、変態だ」

珊瑚の哀れみの言葉も消えて、呆れ返っていた。こいつに哀れみなんて必要ない。

倒れてる功治は、「真っ白……真っ白を俺に」とうわ言のように呟いている。怖いって、それ。

美形キアラのくせに、壊れすぎだ。

「ところで、おにいは何色が好き？」

「俺か？ 俺はピンク——はっ」
時すでに遅し。

口角がニヤリと上がる珊瑚は、どこから出したのか手帳に書き込んで微笑んでいる。

状況が掴めていない瑠璃と琥珀は、何だか分からないと言った顔で俺達のやり取りをみていた。

「ねえねえ、何の話してるのよ。二人共、内緒話はいけないんだぞ」

「琥珀、それはね……」

「だあ、言っんじゃねえ！ 珊瑚」

妖しげな笑みを浮かべて耳打ちをしている珊瑚と、見る間に顔が

赤くなつていく瑠璃と強張つていく琥珀。

二人共、そんな目で俺を見るな！ いいじゃないか、好きな色くらい言つたつてよ。好きな色を言つたまでだ。

それ以外は断じてない！ でも、ピンク以外も好きだぞ？

「そうなんだ……お兄ちゃんは、ピンクなんだあ。じゃあ、明日はピンクで……」

「あたしは、持つてないな。青が好きだから青が多いしね。でも、今度買つてみようかなあ」

「ボクは、なんでもござれ……。形も色々……。TとOは持つてる。YとVは今、収集中」

三人共、お願いだからそんな話を大声でしないでくれ。周りには、ハイエナさん達が聞き耳たてて構えてるんだぞ。

顔を真つ赤にして小さくガツポーズを作っている瑠璃と、あまり興味なさげだがしつかり頬が赤い琥珀。そして、何を言っているのかさっぱり珊瑚。それを聞いて密かに盛り上がっている周りの男子共は怖い。なんなんだ、この連中は！ 俺の周りにはまともな奴はいないのか。

「まとめると、おにいにはピンク好きの巨乳好き。そして、妹が大好き」

「何を言っているんだつ、珊瑚っ！」

「ほんとなの？ お姉ちゃん。私の事……。その、あの……。えっと、はわわっ」

「それ、あたしも初耳だよ。知らなかったなあ、兄貴が制服フェチつて」

とんでもない事を言っている珊瑚を止めようとしたが、あつちで暴走し始めた瑠璃が、服に手を掛け始めているのでそれを止めようとするが、今度は琥珀が間違えた情報を流している。

これでは俺が変態ではないかつ！ 見る、周りから集まるこの冷やかな視線の数々。俺が一体何したつていうんだよ。

お願いだから、誤解を招くような事は、言わないでくれよ。

「ぐっ……やるな、イモウトスキー亮。よもや、ここまで義妹達の心を掴ん——」

「うるさいぞ、功治。それ以上言ったら、二度と太陽が拝めない身体にするぞ」

「いえ、それは勘弁してください。このとおりです」

低頭に床に土下座する功治。

床に頭擦りつけて、ものすごく低いぞ。お前には、プライドというものがないのか？

そんな功治は徐に頭を上げて、俺の手を取り、

「イモウトスキー……いや、ギマイスター亮っ」

涙を流しながら、俺を見ていた。それより、なんだよ——ギマイスターって？

それに気持ち悪いって、その顔。

「たった一言で、義妹達の心を掴むその話術、掌握術っ、感服しましたぞっ！」

「お前、何者だよ。そして、何キャラだ？ それ」

「私は、今からあなたの弟子です。よろしく願います。マイスターっ！」

《よろしくおねがいますっ！》

俺の話など、まったく聞いていない。すでに頭が逝っているようだ。

頭を下げる功治と声を合わせるように、教室内の男子共が土下座をしていた。なんだ、この光景はっ！

何が起こっているんだ。俺は夢を見ているのか？ これは白昼夢

か？ デイドリームか！

「ギマイスター亮、何とぞ我等を弟子にっ」

「何言ってんだよ、功治」

「その話術と掌握術、是非わたしに伝授してください。さすれば、我が妹も意のままに……ぐふふ」

俺の手を握ったまま、不気味に笑う功治の声に、同じように周り

から気色の悪い笑い声が大合唱していた。

ここは蛙の学校かつ！　と言うか、このクラスに女子は——いた。教室の隅でこちらを見て、白い目を向けている。

待てっ！　俺は違うだろ。

俺は何もしてないぞ？　だから、なんで俺をそんな目で見てるんだっ！

「ギマイスター……なんか、かつこいいよ。おにい」

「うん……なんだか、分からないけどかつこいいね。お兄ちゃん」

「なんかの戦隊ヒーローみたいだね、兄貴」

まったく状況を理解していない我が妹達の無責任な言葉に涙しながら、目の前の光景に目をやる。

「ギマイスター万歳っ！　救世主降臨っ！」

アホな連中が万歳三唱しながら、クラス中を駆け回っていた。いつの間にか、他のクラスの奴等まで加わって、大騒ぎになっている。

何かなんだか分からないままにどんどん話が進んでいって、俺は『ギマイスター』という称号を手に入れてしまった。

だから、俺の周りにまともな奴はいないのか！

第4話：ギマイスター亮誕生？（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

それにしても何なんでしょうね、この小説…。

妹、まだ活躍してないし…周りの奇人ばかり目立っている。

第5話：お騒がせ校長就任！

さて、先ほどの短い時間で俺は『ギマイスター』という、訳の分からない称号を手に入れてしまった。

そして、黒板の前で力説している自称、ギマイスター参謀の功治が目を輝かせて、チョークを走らせている。

「いいか、ここギマイスター総本山『義妹星』は、お兄ちゃん達の救いとなる場所だ！」

《おお！》

「俺達、お兄ちゃん達に今こそ光を！」

《光をつ！》

以下、延々と続いている功治とクラスメイト他のやり取りだが、俺にはまったく興味がない。

どうして、こうも馬鹿の集まりなんだ、このクラスは。そして、何故妹もない奴等まで参加しているのだ？

お前等は何をしようとしているんだ。出来れば、犯罪だけは犯すなよ？ お願いだから、やめてくれ。

それより、クラスの女子が誰もいなのは何故だ？ いるのは俺の妹集団と、あのバカの妹がいるだけが……いつの間にここに来たん
だ？ 美鶴。

「もう……お兄ちゃんったら、また変な事してる」

「そう思うなら止めて来い、美鶴」

「それは無理ですよ、亮先輩。一度暴走したら止まりませんよ」

眉間を押さえて頭を振る美鶴は、哀れむような視線を向けて俺を見ている。

そんな目で俺を見るなよ。俺だって昔から付き合いだから知っているって……。

「確かにそうだが、俺が一番迷惑を受ける」

「……そうですね。では、ちょっと止めてみます」

腕まくりをして立ち上がっていく美鶴に、

「頑張れ、美鶴。お前の腕にかかっているぞ」

「もうっ、やだなあ。そんなにおだても何も出ませんよっ、亮先輩
っ！」

バシバシと俺の肩を叩いて、功治の方へと歩いて行く美鶴の後姿は頼もしい。しかし、もう少し手加減しろよ。

肩の骨が粉碎骨折するかと思ったぞ。

とても上機嫌な美鶴は鼻歌を歌いながら功治の襟を掴み——以下、自主規制。

「すごいね……あれ。さすがのあたしも、あそこまで出来ないよ」

「はわわっ、ひゃ……うわあ、そんな事まで……」

「義妹にやられる愚かな兄」

さすがの琥珀も引いている。口では言えない事を行っている美鶴の姿を見ると、けしかけておいてなんだが、功治がかわいそうな気がする。瑠璃は、指の隙間からチラリと見ては顔を覆ったの繰り返しで、珊瑚は淡々と状況を見て冷静に分析をしている。

三者三様の行動に我が妹達の性格が表れているな。

「終わりましたよ、亮先輩」

そうこうしている内に、終わったようでも美鶴は敬礼しながら帰ってきた。その手に功治をぶら下げて……。

後ろには、山積みになされた我がクラスメイトとその他大勢。

「何をするんだ……マイスター亮。俺は、全国の義妹を持つ兄の為に……」

半死半生の功治から、よわよわしい声が聞える。どこに目が付いているのか分からないくらいに顔が變形して、ちょっとかわいそうだな。

「少しだけ——と言ってもミジンコ並だが——に同情してやるよ。それにしても、もう少し理性的に行動できるのか？」

「お前が勝手にするのはいいが、俺を巻き込むな」

「そうだよ、お兄ちゃん。亮先輩に迷惑かけたらダメだよ」

「このボンクラ兄に、何を言っても無駄」

俺に続いて美鶴が功治に釘を刺して、珊瑚がトドメを刺す。凄まじい必殺コンボだな。

それを聞いて身体が震えている功治だが、もしかして会心して泣いているのか？ いや、そんな愁傷な奴じゃないから、これは何かありそうだな。

「こうなれば、俺だけでもギマイスターを目指す！ 俺が義妹を持つお兄ちゃん達を正しき道に導く！」

ガバツと起き上がり、拳を握りしめて高らかにあげているバカ功治。

絶対に、俺達を巻き込むだろ？ だから美鶴に止めに行ってもらったのに、これでは意味がない。

「ぐはははっ、やっと見つけたぞ。水上亮っ」

「こんな時に面倒な奴が、また出たよ……」

どこから現われたのか、教卓の上でポーズを決めている浜守。

朝のフリーズからようやく解凍したようで、動きは軽やか。それにしても、室内なのに眩しい。

さすが蓄熱式、ボイラーいらずで冬には最高だ。しかも後ろには、こちらに手を振る倫子の姿も見えてとれる。

口パクで「存分にヤツてください」とハゲを指差す。結構、物騒な事を言う奴だね。

しかし、倫子も大変だよな……こんな馬鹿に振り回されて。

「ハゲ言うなあ！ ——とっつ！ がっ」

「馬鹿ハゲですね。あれは……」

珊瑚の冷やかな声に、呆れてものが言えない面々。さすがの功治もハゲの奇行に固まっていた。

相当頭に血が上っているのか、教卓の上から思いつきりジャンプ

して、蛍光灯に頭をぶつけて悶絶している。

こいつ、真正銘の馬鹿だ。しかも、直に素肌だから痛さは倍増だろう。次々と赤い髪の毛が生えているぞ。

「何しに來たんだ？ あいつは……」

「気にしないでいいんじゃないの？ ハゲの考えは分からないよ」

「だから琥珀ちゃん、ハゲハゲ言ったらかわいそうだよ」

琥珀と瑠璃が朝と同じ会話をしている中、うずくまって頭を押さええている浜守。

毎回登場して何がしたいのか、さっぱり分からない奴だな。

「さあ、勝負だっ！ 水上亮っ」

大声をあげて立ち上がった浜守だが、頭が真っ赤。

「……人間スプリングラー」

「あははっ、お姉ちゃんそれ最高っ」

ボソリと呟く珊瑚はハゲを指差して、それに馬鹿笑いしてお腹をおさえている琥珀は、苦しそうに目元を拭っている。

「真っ赤……あう、ううゝん」

「きゃあ！ ——瑠璃ちゃん、しっかりしてえ」

「ぐえっ」

浜守の頭を見て血の気が引いたのか、目を廻している瑠璃を抱きとめている美鶴は大慌て。

瑠璃は子供の頃から血を見るのが苦手な奴だから仕方ないかも知れないが、四人共なんとも素敵に別々の反応をしている事だ。

最後の「ぐえっ」は、功治が何故は美鶴に一撃喰らわされた断末魔で、たった今、天に召されていったよ。惜しい奴を亡くした……南無。

「俺は死んでねえよっ」

「じゃあ、一辺見て来いよ。地獄と天国どっちがいい？」

「真っ白の下着が大好きで俺に忠誠を誓う可愛い義妹が百人以上いる天国」
パラダイス

淀みなくすっぱりと言い切る功治の口元に光る白い歯と、清清し

いまだに憎たらしい笑顔を最後に一撃で落とす。

邪魔だから今は寝てろ。人が多すぎて状況を伝える俺が大変なんだよ。しかし、どうして俺の周りにはハゲだの、妹好きだの、騒ぎを起こすのが大好きな連中ばかりなのか、教えて欲しいぞ。

「で、結局何の用だ？」

「お前の魔の手から、さ、さささ、さんごさんを救い出す為だっ」
叫んでいる浜守は珊瑚を見つめたまま動かない。そして、なんだか分からないが動くに動けない俺。

時間が止まったように、固まっているみんな。なんか面白いぞ、これ。って、冗談かましている場合ではなかった。

ピタリと止まった俺達の前で、顔中が真っ赤に染まる浜守。ゆでだこを通り越して、完熟トマトだ。

「お、おおお、おまえの……さ、さささ、さんさん……じゃなくて……」

しかし、こいつ今なんて言った？ 珊瑚を救い出す？ なんだ、それ？

それとどもり過ぎて何を言っているのか、さっぱり分からないぞ。相手が相手に状況が状況なだけに、誰からも言葉が話せないでいる。辛いぞ、この沈黙。耐えられないぞ、この静寂。誰か、喋ってくれ。と言つかハゲ！

この状況をつくったお前が喋れ。そこで倫子の出したカンペ読んでいる場合ではないぞ。

「ボク……ハゲ嫌い」

そんな誰も喋れないこの静まり返った中で、ポツリと聞えるめちやくちや冷たい、きつぱりとした声。

声の方を見ると、プイッと首を横に向けて、顔を逸らしている珊瑚。それを見た途端、真っ赤から真っ青にモードチェンジしていく浜守の顔。見事に簡潔かつキツパリと切り捨てる珊瑚を見ながら、

浜守は今にも泣きそうな顔をして呆然と立ちすくしている。

「あの……えっと、さんごさ……」

「ボク、嫌い。それ以外ないの」

「う……うつう、うわぁ〜ん」

簡潔に即答で答える珊瑚は、ハゲを一刀両断にしていた。

力なく座り込んだ浜守は呆然としていたが、次第に目に大粒の涙を溜めて号泣し始めた。その顔は涙でグシャグシャで大変な事になって、ちよつと惨めな気もするがこれもまた現実だ。

「うつ……ぐすっ」

亡霊のように立ち上がり、トボトボと出て行くハゲの後姿は哀愁が漂っている。

悲しいだろうが、それが現実だ。潔く受け止める——そして強く生きるよ。でも、その前に保健室に行け。頭、すごい事になってるぞ。

「結局、なんだったんだよ……」

呆れている俺の鼻にふわりと香ってくる匂い。そして俺の耳元で「ボクは、おにいがいればいい。それ以外はいい……」

珊瑚は頬を少し染めて、俺の耳元で小声になって囁いていた。

耳にかかる吐息とその色っぽい声に、柄にもなく心臓が跳ねてしまった。そして、離れて行く珊瑚の顔が微笑んでいる事に、再度びっくり。こんな柔かい笑顔も作れるんだ。長い付き合いだが俺が知らない事が、まだまだありそうだな。

「と言うのは冗談だけど、ね。ボクに好きって言われたら嬉しい？」

おにい」

「は？ え……」

悪戯っ子のような事を俺に聞いてくる珊瑚の顔は、いつもの無表情に戻っていた。

さっき見たのが嘘のような変わりようだ。俺、もしかして遊ばれてる？ 妹に弄ばれてる？

なんだか分からないが、滅茶苦茶ショックだぞ。男としての威厳

はいずこに――。

『あろはおえゝ、あろはおえゝ、ほうほう……せいや！ はっ』

そんな事を考えていると突然、校内放送を告げるアロハなリズムのチャイムが鳴り始めた。

なんか間違いが多い学校だな。こんなにツツコミどころが多かったのか？

「なんだ？ 緊急警報かつ！ 召集つ、我が兵を招集せよっ！」

「そんな訳なんですよ、お兄ちゃんっ！ 変な事言わないの」

アホみたいに事を言って一人大騒ぎの功治を、叩いて黙らせようとしている美鶴が拳を振り上げるが軽々と避けている。

嫌味たつぷりな顔をして避ける功治に、ムキになっていく美鶴の拳が何度も襲うが、

「へへへ……当たるかよお」

「むつきいゝ、ムカツクっ！」

全部避けてる顔がものすごくブサイク。男前、120%ダウンだな。

「なんで、何も言わないんだろうね？」

「怖いよお……お兄ちゃん」

不思議そうに教室のスピーカーを眺めている琥珀は小首を傾げて、怖そうに俺の腕にしがみついていた瑠璃は震えている。確かに何も言わないが、ガサゴソと音がしているので向こうには誰がいるんだろう。暫くしてマイクを叩く音に続いて、声が聞え始めた。

『ああ、もすもすマイクテスト……マイクテスト。ヘロー、生徒諸君っ！ 校長のモッサ・ム……ちよつと、これ原稿違うつ』

また何やら向こうでやっている音と怒っている声が入ってくるが、「校長のモッサ・ム」ってなんだよ？ すごく気になる。

妙に若い女の人の声で、喧嘩しているのが聞こえるけど何を言い争っているんだよ。

大体、疑問が一つ。うちの学校に校長なんていたんだ？ 俺、一回も会った事ないし、見た事もないぞ。そういえば全校集会は、いつも教頭が冷や汗拭きながら挨拶してたな……。

『ごほんっ、失礼……。新しく赴任して来た校長の櫻井桃子だよん。ピッチピチの二十歳だよ！』

語尾に全てハートマークや音符の記号がつきそうなくらい弾んだ若々しい声が、教室内、いや学校中に響いている。

「二十歳っ！ しかも新任の校長かよ……」

『うん、そうだよお。こっちには、君達の会話は全て筒抜けさっ、

水上亮ちゃん……ふふふ』

「うおっ！」

なんで俺の名前が出てくるのか、教えて欲しいぞ。それになんで会話が筒抜けなんだよ。って、ちよつと待て？

今——亮ちゃんって呼んだか？ この人。しかも櫻井桃子って……俺を”亮ちゃん”って呼ぶのはもしかして——。

「こ、こわいよお。お、おおお、おにいちゃん……な、ななな、なまえバレてるよ」

「瑠璃、落ち着いてよ。大丈夫だから」

俺の腕にしがみつく瑠璃の震えは最高潮。このまま行けば、パニくって服を脱ぎ出してしまう。

必死に瑠璃を宥めようとしている琥珀も、少し怖そうに俺の制服を掴んで離さない。

「……この声。おにい、もしかして——」

「たぶん、俺もそうだと思う。俺を『亮ちゃん』なんて呼ぶのは、この世に一人っ！ もしかなくて、この声は……」

俺の中で危険信号が激しく点滅中だ。今すぐ逃げたいっ！ この場から脱兎の如く——。

『久しぶりに帰って来たよお！ 亮ちゃん、みんなあ。桃子姉さんだよお』

教室の入り口で聞こえる声と、スピーカーから通して聞こえる声がタブっていた。

俺の平穏な人生、終わったかも……。

第5話：お騒がせ校長就任！（後書き）

ノリと勢いだけで書いてます。

そして、むちゃくちゃです。設定もあつてないようなもの。

そして、お笑い要素より段々とお色気要素が強くなりはじめたと思
っている今日この頃…。

第6話：絶景パラダイス♪

今は秋も終わりに近い冬の入り口。

そろそろ鍋のおいしい季節です。そして俺はおでんの大根が大好きです。

そんな季節なのに、目の前には季節感を全て崩す人がいる。

「亮ちゃん……寒い。それにしても久しぶりだねえ、みんなも元気そうで何よりだよ」

「だったら、服着ろよ。……桃姉さん」

両腕を抱きしめて震えている、アホが一人。顔が引きつって、今にも凍死してしまいそうで怖い。

それにしても何考えているんだ……この人は。

誰もが思わぬ人物の登場に誰もが、口をあんぐりと開けている。ハゲの衝撃告白以上にインパクトがあり、身動き一つとる奴がいない。

今日は、もしかしてフリーズの日か？ いや、そんな日はないからって誰か突っ込んでよ。

「アホって言わないでよあ。私はアホじゃないもん……バカだもん」
「うわあ……バカを認めたよ。ところで、なんで冬にアロハシャツを着ているんだよ」

目の前のお人は、アロハシャツに短パンと言う夏真っ盛りの格好をして、ウクレレを持っている。まさしくハワイアンな格好で季節感まったく無視のこの人は、相変わらずといったところか。

腰まで伸びる黒髪にハイビスカスの花飾りをつけて、少し垂れ目の瞳は、優しい印象を与えてくれる。無駄のないスラッとした鼻とピンク色の艶のあるグロスが光る色っぽい唇。数年間会わないだけで女性はずっと多くの別人になると言うが、ここまで化けているはずかいと思う。昔の面影は微かにあるけど、大人の女性になって、ち

よつとドキドキしている。

「亮ちゃん、目がえつち……。どこみてるのよお」

流し目で俺を見ている桃姉さんは、妙に色っぽい表情をしている。どこつて、それはあなたの胸です。

揺れている立派な二つのマウンテンを堪能してますって、口が避けてもいえません！

「え、あ……いや。そ、そそそ、それで、なんで桃姉さんがここにいる？」

「誤魔化したね……。おにい」

「い、いやっ！ べ、べべべ、べつに……」

俺を睨む珊瑚の顔が、いつにも増して怖い。無表情なうちに秘めた怒りをビシバシと感じます。

周りからも冬の冷氣より冷たい視線を投げかけられて、凍死寸前です。誰か、誰か俺に温もりをくれ！

「それで、一体なんでここにいるのっ」

「亮ちゃん、怖いよあ……。怒っちゃやだあ」

涙目で指を咥えて俺を見上げるのは止めてくれよ。そんな顔されたら、なんでも許してしまいそうになるから――。

芝居だと分かっていても、騙されてしまう男の悲しい性というやつだろうな。

「あ、いえ……。すみません。出来れば教えてください」

「いいよお。私はあゝ、ここの校長……。だと思っよう？」

何故、疑問に疑問で返す？ 可愛く困った表情をして首傾げられても困るんですけどね。ちょっと可愛いかもと思った自分が嫌だ。と言っつか、この学校はそんな簡単に校長になれるシステムがあるのか？

「で、本当になんているの？ だって、海外に引っ越したでしょ？」

俺は不思議でたまらなかった。桃姉さんは俺が9歳の頃に、家族で海外に引っ越していったのだ。理由なんて知らなくて、親に聞いても教えてもらえなかった。当時は寂しくて泣いた日もあったが、

今では懐かしい思い出の一つになったと言っのに……。

その人が突然現われたら、驚く以外にないだろ。

「あ、それなら先週帰ってきた。こっちで仕事が決まったからね。父さんの会社が……」

「は……？」

ごく普通にそう言われましても、まったく分かりません。それより気になる単語を発見。

「桃姉さん、質問」

「なんですか、亮ちゃん」

いつの間にか、全員席について桃姉さんが黒板の前に立っている。スーツと指し棒を持っているあたり新任の先生みたいで、ちょっと格好いい。でも、さっきのアロハシャツはどこにいったんだ？ しかし、スーツのスカートが短い。動く度にチラリと覗くスカートの生地とは違う色のものに俺の心臓はドキドキマックス！

「桃姉さんの親父さんって、確か普通のサラリーマンだったはずだけど……」

「そうね。数年前までは、普通の冴えないダメダメサラリーマンの典型を地で行く人だったわ」

酷い言われ様だな。そこまで実の親をけなせるとは、天晴れというか怖いもの知らずというか。

黒板には、桃姉さんの字で『三分で分かる我が家の歴史変・怠惰から除いて立派になろう生活』と書かれていた。

「編」が「変」なのは桃姉さんのちよつとしたユーモアと受け取っておこう。

そのまま読むと「変態だから覗いて立派になろう生活」とかわいそうな文章が出来上がってしまうから。

「数年前に、お父さんがアフリカの奥地で——」

「す、すすす、すいませんっ、し、ししし、しつもんんです」

「はい。影の薄い義妹好きで尚且つ、変態悪趣味を持つ功治君」

「くふっ……、なんか酷い言われようだ」

大丈夫なんだろうかと思うぐらいの狼狽っぷりで、呂律が廻つてない功治。冷や汗が滝のように流れて異様に身体が震えているが、本当に大丈夫か？ こいつ。しかし何か忘れているような気がするんだが、なんだったかな？

それより泣くな、功治！ この人は、こう言う人だろう？ 思い出せ、あの凄かった日々を。そこから生き延びて見た、あの朝日のとてもきれいだった事を！

「亮……俺、やっぱりダメかも……。桃子さんを見るとトラウマが槍持って……笑顔で胸を抉る」

「おいっ、しっかりしろ！ 功治っ。壊れるのは、早いぞっ」
涙が滝のように流れ落ちている功治が、遠い目でどこかを見ている。帰って来い、功治っ！ 旅立つのは早すぎるぞ。

俺を一人にするな、と言うかしないで下さい。この人を相手するのは疲れるんだぞ。

「お兄ちゃんのバカ……。恥ずかしいよ」

「あら、美鶴ちゃん。そんな事言ったら、功治君が可哀相よ？ こんなんでも、必死に生きてるんだからね」

「はう……。俺、もう生きるの嫌になつてきた……」

美鶴、そんなに顔を赤くし俯くなよ。肉親の恥は辛いと思うが、健気に生きる。それと、傷心の功治にトドメをさしてどうする？

桃姉さん。ピクピクと机に突つ伏して、引きつっているではないか。

「あの、桃子姉さん……」

「んっ……。あらあ、瑠璃ちゃん？ 何かしらん」

「ひゃうっ」

「すべすべねえ……。いいわあ、若いつて。モチモチのプニプニ……むにゅむにゅのぽよおくん」

『弄ばれる義妹、誘惑の美人教師』なんて、チープなVシネのタイトルを連想した俺は痛い子だろうか？

「琥珀ちゃんも一緒にい」

「あ、ちょ、桃姉ちゃんっ！そこは……。ダメだって、やんっ」

「ふふふ……ええがな、ええがな。ほお、むにゅむにゅのぷりぷり」

瑠璃に続き、琥珀まで餌食になっている。昔からこの性格は変わってないと言う事か。

擬音を変換して実況したいが、俺の頭では今ピンク色な事が悶々と繰り広げられているので、間違った事を教えてしまいそうなので自粛します。

「それでは、ボクが……。桃ちゃんの柔らかな指先が、瑠璃の身体を這いまわり、やがて——」

「それじゃ、俺と一緒にだろうがっ！」

「おにい……やっぱり、えっち」

だから、どこを見ながら言っているんだよ！　って言うか、みんなしてそこを見るな！

お願いだから、白い目で見ないで。俺には決してそんな事を——少しは思っていました。本当にごめんなさい。

「さて、十分堪能したから話を続けるねえ」

「なんて切り替えの早さだ」

「人間、過去を引き摺^ずっては生きていけないんだよ、亮ちゃん。じゃ、話すね。父さん出世して社長になったの」

簡潔にこれでもかと情報をカットした内容に、さっぱり理解できない。とりあえず、この話はもういいか。だって先に進みそうにないし、話を聞いても分かりそうにない。

「それで私がこの学校の校長に家族会議のくじ引きで決まったの」

「家族会議？　くじ引き？」

「そうだよお、ちよつと裏で小細工しているけどねえ」

楽しそうに微笑んでいる笑顔は昔のままだが、なぜか悪魔の笑みに見えてしまう。

怖いぞ、ものすごく危険信号を発している。この笑みを浮かべている時は、絶対にいい事なんてないんだ。

さらりとすごい事を言っているが”小細工”までして、なんで校

長なんてなつたんだよ、桃姉さんは。それにくじ引きで決める家族会議ってなんだよ。

「さて、亮ちゃん達に会ったし……仕事の続きをしますかねえ」

「仕事……？」

「そうよお、今日からこの学校は生まれ変わるのよっ！」

胸の前で拳を握っている桃姉さんが動く度に、重そうな胸が揺れていた。とりあえず、ここにいる誰よりも大きい。

本当に成長したんだな……身体だけは。精神的には、まったく昔のままだけどね。

「そうそう、話は変わるけど亮ちゃん。さっき、面白そうな話をしたよね？」

俺を見る目が怪しげに光る。まずい——この目は、おもちゃを手に入れた時の子供が嬉しくて喜んでる目だ。そして、桃姉さんのおもちゃは、ずばり俺達。つまり、俺達で遊ぶという事だ。

「な、なにも言っていないよ。俺達は何も言っていない、断じて決して何も言っていないぞよっ」

「そんな事ないもんっ。ちゃんと高性能広範囲集音マイクで隠し撮りしたのには、入ってたもんねえ」

「そんなもん、どこにあるんだよ！　って、盗聴なんかするなあ」

「マイクはここよんっ。それに、盗聴ではなくて隠し撮りよ……亮ちゃんの密着24時」

そう言っただけ俺の首に手を廻して膝の間に足を入れてくる桃姉さんは、頬を上気させて優しく笑みを浮かべていた。

それより、この状況と体勢は非常にまずくないでしょうか？　スカートがずり上がって、チラチラと赤いデルタゾーンが見えている状況は、健全な高校生としては限界というものがあります。それに、桃姉さんの笑顔はパンチが効いている。

その笑顔はダイナマイトより爆発的で、俺の妄想も爆発で放送禁

止スレスレです。

「あ……あの、も、ももも、ももねえ、さ……」

「隠しマイクはここ……」

指差しているのは、俺の——って、下ネタかつ！ 待て、それはさすがにやばいって！

昼間からそんな事をしていては、学生の本分をまっとうできない。いや、別に勉強はしないけど、でも、だから、さすがにそれはやばいって、桃姉さん！ みんな見てるんだから！ ゆっくりと腕が伸びてきて、そして、

「ダメっ！」

声が響いていた。

不思議そうにそちらを向く桃姉さんと驚いて固まっている俺は首だけを向けて見ると、みんなが立っていた。

瑠璃はこちらを真っ赤な顔で見、オロオロして泣きそうである。無表情だが薄っすらと顔が赤い珊瑚も俺を睨んでいる。

何故、俺を睨む？ そして、琥珀と美鶴は俺よりも桃姉さんを睨みつけている。その目は怖いって。熊でも虎でも何でも射殺せそうだ。

「あら、どうしたのお？ みんな。そんな怖い顔して……」

それに火に油注ぐような呑気な声をあげている桃姉さん。なんで、この緊張感に気付かないんだよ。

「何しようとしているの……桃ちゃん」

「んっ？ 何って……隠しマイクを取ろうとしているだけよ？」

「ど、どこを触ろうとしてるんですか。ボクだって、まだ……」

少しだけ顔を赤くしている珊瑚が、桃姉さんを睨んでいた。いつもの無表情とは違う、少し怖い感じがする。

こいつも怒る事があるのか？ それにしても、「まだ」ってなんだよ……まだって。

「だからマイクを取るんだって……。亮ちゃん、ちよつとどいてねえ。えいっ」

「え、へっ——うわおっ！」

俺を後ろに思いつき突き飛ばして、座っている椅子を引き上げる桃姉さんの胸が揺れている。うむ、絶景……。

スローモーションのように後ろに倒れていく俺。そして、後頭部強打。痛烈に星が瞬く。

簡潔に纏めているのは、要は痛いから考えるのが面倒。後ろ半分が頭から腰までジンジンして痛覚が麻痺したようだ。

何するんだよ、桃姉さんは。

「えっと……あ、あつた。ほら、これよ」

桃姉さんが持っているのは、小型の機械。それがマイクなのか俺には分からない。

「これがね、小型マイク。とってもクリアに音が入る優れものなのよあ」

いい加減起き上がらないといけないけど、中々の絶景に起き上がれない。

俺、後ろ向きに倒れた。視線、上向きにして良好。そして、斜め前にある桃姉さんの生足があつて、そこから魅惑のデルタゾーンが堪能できる。

絶景百選のうちの一つだね、これは。

「今度、みんなにも貸してあげるねえ。それよりも亮ちゃん……」

「え、あ……はい」

「いつまで覗いているのかなあ……えっち」

バレてます。完璧にバレてます。ほのかに赤い桃姉さんの顔が、いつの間に目の前にあつた。そうすると、今度は胸が目の前にきてる訳ですよ。これまた絶景。ツインマウンテンは高いです。登頂までは時間が掛かりそうですよ、隊長！ 今から登山に出発したい気分です！

「おにい、えっち」

「兄貴、何やってんだよっ」

「お兄ちゃん……その、あの……不潔です。でも、わ、わたしでよければ……」

「亮先輩がそんな人だなんて……。これじゃ、お兄ちゃんと一緒だよっ」

気付くと、俺の周りに十本の足があった。パラダイス？ 絶景パラダイス？ 白、水色、ピンクに赤と黒！ って、そんな呑気な事を考えている場合ではなかった！ 俺大ピンチ、ものすごく特大の大ピンチ！

「覚悟……いい？ おにい」

低く響いていく珊瑚の声と、怒りのオーラ渦巻く三人の目。そして、この状況ですら笑顔で俺を見ている桃姉さん。

地獄行きの最終が間も無く出発です、乗り遅れにご注意ください——そんな声が聞こえた気がした。

「逝ってよし。出発進行」

珊瑚の冷たい一言で、俺のパラダイスは終わった……。

第6話：絶景パラダイス♪（後書き）

どうも、いつも読んでいただきありがとうございます。

今回は、なんとピンクな展開ばかりになってしまっただけ申し訳ありません。

脳内構成の結果がこれですから、私の頭はピンク色という事ですね

（笑）

それにしてもこの小説、書き始めて間もないのに、毎回すごい数の方に読んでいただき嬉しい限りです。

なんとも励みになります。これからも頑張っていきますのでよろしくお願いします。

第7話：ボンクラ功治称号ゲットだぞっ？

少しの間、地獄旅行を堪能してした亮了。

意外と鬼もいい奴が多くて、話が分かる奴等ばかりだった。中には涙流しながら肩を叩いてくれる奴もいて俺ももらい泣き。そうやって、色々と愚痴を聞いてもらっていたら「帰っていいよ」って閻魔さんが言うので不肖ながら帰ってきました！　って、冗談です。

「ふう……酷い目にあった」

「自業自得だよ、おにい」

いつもの調子で茶化してくる珊瑚をあしらって周りを見ると、いつの間にやらいつもの教室に戻っていた。

さっきのは夢かと思うぐらいの変わりようで、さすがご都合主義だ。

「うつせよ。それより、桃姉さんは？」

「帰ったよ。みんなもそれぞれのクラスに戻っていった」

「そっか、それでこれは一体なんだ？」

カリカリと響くシャーペンを走らせる音しか響かない異様な空間に、息苦しさを感じながら机の上を見てみると一枚の紙が置かれていた。

「なんだ？　……何々、『第一回これであなとも義理義理マイスター試験』って、なんだこりゃ？」

「テレビ番組で似たようなタイトルがあるけど、一切関係ありません」

「何を言っている？　珊瑚」

「とりあえず、ツツコミ対策。おにいには気にしない」

素っ頓狂な声をあげた俺に、一斉に集まる視線。そのどれもが血走り、殺気に満ちていた。

なんなんだよ、この雰囲気は？　いつものクラスの連中ではない

ぞ。こんな風に真剣に何かをする奴等ではないはずなのに。

それが一心不乱に没頭しているとは怖い。そして、不気味。

「この試験に合格すると、義理の妹もしくは弟。ならびに兄、姉がもらえるらしいよ」

説明する珊瑚も珍しく顔が引きつっているように見えるが、もしかしてこの訳の分からない試験は桃姉さん？ いや、それ以外考えられない。

珊瑚がこれだけ取り乱しているのだから、きっとそうだろう。

「おにい、試験免除って言ってたよ。桃ちゃんが、不気味な笑顔でこれを渡してって……」

「は……？ 俺ないの？ まあ、別にしたくもないけど」

「桃ちゃんの笑顔は、嫌な予感がビンビン、バンバン、ポンポン」
「分かん擬音が多すぎだ」

珊瑚が俺に渡してきたのは封筒だった。シンプルにこの学校の名前が書かれた封筒の封を破り開けてみると、一枚の紙が入っていた。そこには桃姉さんの字らしい可愛い丸っこい字が綴られていた。

「なっ……なんだ、こりゃっ！」

再度俺が大きな声をあげたものだから、今度は教科書がいつぱい飛んできた。だから、そんな物投げてくるな！

今、こっちはそれどころじゃないんだ。これは由々しき問題だぞ。こんな横暴が許されていいのか。

「どしたの……おにい」

俺の顔にくっ付けて、引きつる眉がピクピクと動いている珊瑚の顔がいた。滅茶苦茶怖いって、その顔。

とても人様に見せられる顔ではございませぬぞ、珊瑚殿！

「ボク達がいるから、いらないよね？ おにい……いらないって言え。言えったら、言え」

「分かったから、大人しくしろ。……ったく、何考えているんだよ。」

あの人は」

何故か必死にそう聞いてくる珊瑚は俺の首を掴み、脅迫紛いの事を言つてのける。それにしても、あの人の暴走ぶりは健在という事か。今度は何をする気なんだよ。

この紙に書かれていたの以下の通り。

義理義理マスター試験——簡単に言うと学校のみで通用する義理の兄弟、姉妹を作ってしまったおうというものののだ。

この試験用紙と書かれたアンケート用紙に正確に答えると、自分にあつた人を紹介してくれるというシステム。なんか、出会い系のサイトとかにありそうなう胡散臭いシステムだ。そんな胡散臭いものをそれぞれの思惑を抱き、こんなに必死にやっているんだな……こいつ等。男子も女子も目が血走つて、怖いってもんじゃない。口々にぶつぶつと、「。。。先輩をお兄様に」「。。。ちゃんは俺だけの妹だつ」とか。頼むから、静かにやれよ。お経みたいで怖いって。だけど、さすがに裏に何かありそうな予感がビンビンする。

さすがは桃姉さんが考えた事だ。昔からとんでもない事をする人だつたけど、あの頃はまだ小学生で可愛いものだった。少しは成長して今は立派な大人になったと信じよう。変な事もしないと思いたい。

さっきの事は忘れてやるからお願いだよ。だけど、言動と行動は昔のままだったからものすごく心配だ。

「そだね。何が、ボク達の義姉になるだよ……。くそくらえだ」

「こら、女の子がそんな言葉を使うな。ダメだぞ？」

「あつ……」

頭を軽く叩いたのに、なぜ頬を染めて俺を見る？　そして、嬉しそうに叩かれた場所を撫でている？

その行動は、俺には理解出来ないぞ。

「いちやいちゃしてるところすまんが……」

「してねえよ！　って……なんだ？　クラスメイトZ」

「Zとはなんだよ。俺は、渡辺って名前があるぞ」

突然現われたのは、自称渡辺と名乗るクラスメイトZ。こいつの顔は泣きそうなのか笑うのかはつきりしない顔だ。だって目がへの字で口がUの字だから見ていると、思わず笑ってしまいそうになる。

「むう……邪魔」

珊瑚は何やら不機嫌そうに、クラスメイトZを見て恨みの言葉を呟いている。

怖いぞ、そしてこいつは何を怒っているんだ？

「お前……櫻井桃子校長を知っているのか？」

「は？ 知っているが……それがなんだ？」

俺がそう言った瞬間、高速で移動してくる物体がいつぱい。気付けば、クラス中の男子が俺の周りを囲んでいた。

なんでそんな殺気だった顔をして、俺を見る？ なんで泣いている？ 俺が一体何をした！ と言うか、何でそんなに必死なんだよ！ アンケート用紙を握りしめて俺を睨むなよ。

「お前、桃子様のなんなんだよ！ 彼氏が、下僕か、それとも言葉では言えないような仲なのか！」

「そうだつ、桃子様の周りをウロウロするなあ」

「お前には妹達があんなにいっぱいいるではないかつ」

大ブーイングの嵐が起こってなんだか、言っている事はよく分からない。

クラスメイトAとZが喚んでいるが、何を怒っているのか教えて欲しいぞ。俺が知り合いだとまずいのか？

それになんてこいつ等が桃姉さんと俺の関係を知ってたんだ？ さつきまで気絶していたではないか。まさか、桃姉さんすでに何かやらかしたのではないだろうな。

「とにかく、これ以上お前のいいようにはさせないぞ！ 羨ましいハーレムなんか作られせるかつ」

「そうだつ、義妹の次は可愛いお姉さんだなんて、羨ましいゲームの主人公気取ってんじゃねえ」

「俺達にも少しは分ける！ いえ——分けてください、お兄様っ！」
「貴様だけでもてるのは、やっぱり我慢ならん！ 俺達にも愛の手を
っ」

口々に勝手な事を口走っている我がクラスメイト達が、俺の周りで一斉に号泣し始めた。

うつとうしいぞ、こいつ等。ものすごく俺の神経を逆撫でしていることに、気付いてないのか？

「ギマイスター！ 亮！ お前は、最早ギマイスターに在らずっ」

颯爽と格好をつけて現われたのは、すでに馬鹿キャラが定着しているあいつ。

「この騒動はお前が原因かつ！ 功治っ」

「そうとも、俺がみんなに言いふらしたのだっ。『亮は義妹の次は、綺麗なお姉さんを狙っている』とっ！」

「変な事吹き込んでんじゃねえ！」

「ふべらっ」

高速を超え、音速を超えた俺のパンチ。全てを貫く剛拳を受けてみろっ！

「もっ……う、受けてるぞ」

「おっと、そうだった。すまん、それで、君は何をみんなに吹き込んでいるのかな？」

にこやかな笑顔を浮かべている俺を見て、みなさん顔が引きつって強張っている。

珊瑚曰く、俺の笑顔は魔王の微笑みらしい。要するに怖いって事だ。失礼な奴だよ。こんなジェントルマンをつかまえて、悪魔だと魔王だとか。俺は平和主義の優しい高校生だよ？ ただ、邪魔な奴には容赦なく粛清するのが、俺の心情だ。

「え……いや、その……あの、す、すみません！ ほんの出来心なんです。家には、お腹を空かせた子供がっ」

「俺は刑事じゃねえよっ」

「じゃあ、カツ井は出ないのか！　せめて、親子丼か玉子丼が食べたいっ」

「ここは、取調室じゃねえ！」

襟首掴んで持ち上げる功治の顔は、惨めに泣きつ面になっていた
ので、とりあえず離してやる。

こんな功治は久しぶりに見たぞ。一年の頃、女の子に『かつこい
いけど、なんかキモイ』って言われた時以来だな。

「変な事覚えてるんじゃない！　だって、桃子さんが突然現われる
し……俺なんか、どうしていいか分からないし」

すっかりいじけて床に”の”の字を書いている功治は、ブツブツ
と何やら呟いて不気味を通り越して怖い。

この色男は黙っていれば本当に格好いいし、普通に恋愛するば多
分もてまくるはずなのに、普通とは無縁の存在だな。

まったく、どうしてこんな変な奴になったのか……。いつからだ
ったかな、こいつが壊れたのは？

「そうか……思い出した。お前、確か昔……桃姉さんに——」

「わあ、ちよと待て！　お願い、それ以上は言わないで！　亮ちゃ
んお願い、堪忍してえ」

「亮ちゃん呼ぶなあ、気色悪いっ」

泣きながらすがり付いてくるこいつの顔を見て思い出したぞ。

確か子供の頃、こいつは桃姉さんに全裸にされた拳句、逆さに木
から吊るされた過去を持つ男。あまりにかわいそうで俺がこっそり
下ろしてやったら、泣きながら今のようになりしがみ付いてきたんだ。

その時の顔は一生忘れられないだろう。それから、こいつは家族
以外の女の子を信用しなくなってしまい、見向きもしなくなった。

だから、あまりに功治の将来が心配で俺が何度か、女の子を紹介し
たが全て『かつこいいいけど、なんかキモイ』でふられたのである。

それから更に女性不信になり、ついには義妹の美鶴しか相手が出来
なくなっただという悲しい過去を持っているのだ。ある意味、桃姉さ

んの被害の産物がだと思う。

「それで、俺にどうしろと？」

「いえ、出来れば桃子さんを大人しくさせて欲しいなあと思ってまして……」

「……俺は猛獣使いかよ」

「いや、こいつらに桃子さんを頼もうと思うのだが、心許無いのでお前にも保険代わりに……」

無理難題を吹っかけてくる功治の懇願する目は、ものすごく切羽詰まっている。

話を要約すると、こいつは桃姉さんが苦手。そこでクラスメイトを巻き込んで桃姉さんを狙わせる。そうすれば、自分に被害が及ばないと考えたようだ。余程、桃姉さんが苦手なんだろう。

「お、お願いだ。俺を助ければ、お前も被害は少ないんだぞ？」

こんなに震えていても可哀相とはこれっぽちも思わないが、俺に迷惑がかかるのだけは勘弁だ。

すでに、これだけの迷惑が掛かっているのにも関わらず、こいつは更に俺に迷惑をかけるだろう。

俺の今までの経験上ほぼ100%の確率だ。

ここは、少しでも協力するべきか？ そうすれば俺への被害も減らせる事になるのは本当だ。しかし、この周りの連中はどの面も妖しい妄想を繰り広げて、妖しい笑みを浮かべているだけ。あまりに頼りないな、この連中は。

「すつかり、壊れて気持ち悪い……ボンクラ兄とその仲間」

「それを言うな、珊瑚。こいつ等も色々と大変なんだぞ？」

「そうだぞ、俺達も大変なんだからもう少し気を使えよお、さんごっち」

哀れみをこめて見つめる珊瑚の視線に気付いた功治が、喚き散らかしているがうるさいだけだ。

それより、もう試験は終わったのか？ すつかり、騒ぎが大きくなつてなんだか分らない事になっているが……。

「それがキモイ。グマイスター、ボンクラ兄」

「グ……グマイスター？」

珊瑚が功治に冷やかな視線を向けているが、言っている意味がさっぱり分らないぞ？

「愚かな兄とその仲間の代表。ここにいる男共のボス……愚兄マイスター。略して、グマイスターボンクラ功治」

「略して長くなって気が……。しかも、酷い言われようだ」

さすがの俺も同情を覚える。俺を囲んでいる野郎共は、胸を押さえてうずくまってしまった。

相当、珊瑚の言葉が痛かったとみた。皆、色んな過去を持っているだな。口々に己の愚かな事を言い合って、涙流して慰め合っている。気色悪いし、不気味だぞ。だから、お前等何したいんだよ。頼むから俺の前から消えてくれ。

うつとうしいから、お願いだ。特に功治——お前が一番、ウザイ。

「俺って、一体……」

泣きつ面に蜂状態の功治を見ていたら、授業の終わりを告げるチャイムが鳴り始めた……。

第7話：ボンクラ功治称号ゲットだぞっ？（後書き）

おかげさまで読者数が700人を突破しましたっ！

驚きのスピードです。まだ、連載開始してからそんなに経っていないのに、すごい事です。

まさか、こんなに読んでいただけとは思ってませんでした。

これからも頑張っていくしますので、よろしくお願いします。

第8話：自分の命は、自分で守ろう（前書き）

すいません、今回は異様に長いです。

途中で切るとおかしいので繋げてます。

第8話：自分の命は、自分で守ろう

さて、なぜか午前中で学校が終わってしまっている。理由は簡単。桃姉さんが「私帰るから、学校も終わり」って言ったから。なんと桃姉さんらしい理由だ。

「それで、どこ行くんだ？」

「駅前のミラロに行こう」

琥珀は楽しそうに先を走りながらそう言っ、俺達を手招きしている。

何をあんなにはしゃいでいるのか。そんなに学校が早く終わったのが嬉しいのかね？

まったく、お子様だな…… あいつも。

「カラオケか？」

「うんにゃ…… ボーリングやっぱ」

「…… 分かん」

珊瑚に聞いたのが間違いだった。

意味不明が事を言っ、ボウルを投げるポーズをしているがどう見ても、それはどうしようすくだ。

何故、両手が一緒に動く？ そして、どこから手ぬぐいを出して頭に被ったんだよ。

「私は、一階の本屋さんに行こうかなあ」

「なんか、新刊出てたっけ？」

「うっん……。料理の本が欲しいんだよ、お兄ちゃん」

「なっ！ そ、そうか……」

驚いている俺を不思議そうに見ていたが、「楽しみにしていてね、お兄ちゃん」と最後通告を残して、パタパタと小走りに琥珀の元へと駆け寄っていった。

「これは、まずいですぞ…… おにい」

「ああ……。俺も激しくそう思うぞ、珊瑚」

大真面目に俺を見ている珊瑚。頼むから、まずはその手ぬぐいをとってくれ。

「早く来てよお！ 兄貴、お姉ちゃんっ」

頷きあう俺達に、琥珀が大声で叫んでいる。それに適当に返事をして考える。

こう言う場合、おっとり系の女の子って言うのは、料理が得意で家庭的というのが定石だ。ゲームや漫画である王道パターンなのが、瑠璃にはそれが通用しない。裁縫や掃除、洗濯に関してはすでにプロ顔負けの腕前でいつも助かっているのだが、料理に関してはことごとく失敗している。その腕前は、違う意味で神の域に達しているような逸脱ぶり。

「まずいぞ……。非常にまずい状況だぞ」

「そうだね。阻止しないと、おにいが今度こそ……。あの世行き決定」
「縁起でもない事を言うなよ」

「でも——そう言っても食べるんだから、おにいは優しいよ」

口調は茶化しているが、目は優しく笑ってるような珊瑚。こいつもお姉ちゃんしているって事か。しかし、インスタントラーメンですら、まともに作れた試しがない瑠璃だ。

珊瑚と琥珀が、何故瑠璃の作るカップラーメンは大爆発するのか、醤油味のラーメンがとんこつ味になるのか、不思議がっていたが、それは俺が知りたい事である。なので、誰も瑠璃をキッチンに入らせようとしない。だけど、本人は作る気満々で楽しそうにしているので止める事は出来ず、しかも必ず俺が試食係に任命される。

そして毎回トイレにお世話になっているのは瑠璃には内緒。だって、本当の事を知ったらかわいそうだろう？ 本人はおいしいものを作って喜ばせようとしているだけだ。その気持ちは、ちゃんと受け取ってやりたいがやっぱり、命の方が大事。しかし、また急に料理本なんて買おうと言い出したんだ？ あいつは。

暫くは料理は作らないで研究すると、つい最近言っていたばかり

ではないか――。

「では、作戦を……おにい、お耳を拝借」

「ん……？　何か、いい案でひゃ」

当然の事に、力が抜けて倒れそうになった。

目だけ動かせば、少し楽しそうな珊瑚の顔がすぐ横にあり、珊瑚が笑う度に吐息が耳をくすぐっている。

お前、それをする為に俺を屈ませたのかよ。

「ふふ……大成功」

「遊ぶなっ」

「冗談っちゃ……では、本題」

「っちゃ……って、お前どこの人だよ」

まったく、俺の耳に息を吹きかけて遊ぶなよ、珊瑚。背中がまだゾワゾワしてるぞ。

もう一度俺に耳打ちする珊瑚が言ったのは、とんでもない提案だった。

着いたのは、駅前にある複合娯楽施設『ミラロ』

先をどんと歩いて行く琥珀と瑠璃。どうやら、先に上に行つて遊ぶようだ。これはチャンス。

俺と珊瑚は頷きあつて、作戦を実行に移した。

作戦は、非常に簡単。瑠璃に料理本を、買わせなければいいだけの話である。

まずは上で珊瑚が瑠璃の相手をする。その間に俺が一階の本屋に行き、料理本を全て隠してしまうのだ。

最初は全て買い占めると言い出したが、それは予算的に不可能なのでこちらに変更した。しかし、これは店員に見つかりと怒られるし、下手をすると万引きと間違えられそうでリスクが大きいが俺の

命とは変えられない。だって、もう二度とトイレとお友達は嫌なのだ！ 一日中トイレに籠っているのは、結構しんどいぞ？

先を歩いて行く瑠璃は、別段不信がっている様子はない。ここで、もう一つ重要な任務がある。

それは琥珀に事情を説明して瑠璃を疲れさせる役目を担ってもらふ事だ。琥珀も瑠璃の料理の腕は承知しているので、すぐに了解するはず。

「……琥珀」

「何？」

先を歩く琥珀を呼び寄せ、事情を説明すると段々と顔色が変わり始めた。

「それはまた……」

「だから、協力しろ。お前もまだあの世行きは嫌だろ？」

「だね。……でも、兄貴。そんな事言っても、結局いつも食べてるくせに」

「うつせえよ……」

にやりと笑って俺を小突いてくる琥珀は、親指を立てて了解していた。

まったく、お前も一言多いんだよ。でも、全て準備は整った。それでは、これより作戦開始！

一階の本屋は、意外と広くかなりの量の本を置いているこの町で、一番大きな本屋である。

現在出ている本なら全て手に入ると言われているぐらいの量を常時置いているので、初めてくると探すのに一苦労してしまう。そして、問題の料理本コーナーは本屋のなぜか一番奥。普通なら18禁コーナーがありそうなのだが、この本屋では18禁コーナーは店のど真ん中にあるのだ。

しかも、レジの前。立ち読みするのはかなりの度胸が必要。

何故なら、この店員さんは皆さん美人なのだ！ それも女子高生から人妻まで、色々取り揃えて——おっと、失礼。話が逸れてしまっている。でも、かなりの美人揃いですぞ……お兄さん方。

さて問題の料理本コーナーの前にやってきたが、相変わらずの量だ。

和洋中全ての料理本を網羅して、かなりのゲテモノ料理からジャングルの秘境料理まで解説した本など、なんでも置いている。

これを全て隠すのは至難の業だ。しかし、ここでめげていては俺の明日はない！

「では……まずは——ん？」

早速、取り掛かろうとした俺の耳に不気味な声が聞こえてきた。

なんだ、エイリアンか？ 宇宙人の襲来か！

しかし今ここで作戦失敗は即ち『死』を意味する。誰であろうと邪魔する奴は、始末する。俺の輝かしい未来の為に犠牲になってもらう。

声の方へ忍び足で近づき、確認すると功治だった。何してんだ？

あいつは。

「ぐふふ……」

またも不気味な笑い声が店内に響いている。店員もお客も皆、功治を見て訝しげな視線を向けていた。

俺、他人。あいつとは他人だ。

何やってるんだよ、本当に。大体、18歳以下は見ちゃダメよコーナーに堂々と制服でいるあたり、痛いぞ。しかも、読んでる本が『我が家の妹自慢・おにいちゃんダメ』って、思いつきり危ない本じゃないか。目はすでにイっているし、こう言う時は無視に限る。下手に絡まれて、俺まで同類と思われたら嫌だから。

「あいつ、きつと人生を失敗するタイプだ……」

危うく、作戦失敗するかと思っただぞ。しかも、あんな奴に邪魔さ

れるとは……。仕方ない——気を取り直して再度挑戦。

今度こそ、確実に行かなければいけない。その為にはまずは店内での敵の動向を知る必要がある。

「敵は……現在、ボンクラ功治とそれと……あれは、ハゲ？」

店内を見回っていると、明らかに拳動不審な男が本を取ろうかどうか迷って、手を出したり引つ込めたりしている。

頭に包帯をグルグル巻いているが、隙間からもれる光にすぐに識別出来てしまう。しかし、あいつは何をしているんだ？

もう少し、近くで確認。邪魔なら排除する。

「えっと……これは、違う。……これも、これも」

小声でブツブツ言っているが、ハゲが立っているのは恋愛マニユアル関係の本が並ぶ場所。

手には『あなたの魅力を引き出す100の秘訣』『今すぐモテる男の恋愛マニユアル』と二冊を持って思案顔だった。

もしかして、こいつ本気で珊瑚の事が？　なんだか複雑だな。応援する気持ちはない事はないが、こいつに「お兄さん」と呼ばれるのは勘弁してほしいので却下。こんな奴に珊瑚はやれない。まして瑠璃や琥珀もやれない。あいつ等は俺の大事な家族だ。俺が認めた奴しか渡せないぞ。そんな奴がいればの話だが――。

「お……これは」

そう言って持っていた本を置き、一冊の本を手にとったハゲ。

チラリと見えた本は『漢と漢の生きる道・愛と憎しみの昼下がり編』フンドシー丁の男が船の上で仁王立ちしていた。

それは路線が違うぞ、ハゲ！　そっち方面に行くんじゃない！　たかが一回ふられたからって、すぐにそっちに行っていたらダメだ。帰って来い、こっちの世界に帰って来るんだ！

「よし……」

だからそれをレジを持って行くな、と言ってるだろうが！　見ろ、店員のお姉さんが変な目でお前を見てるぞ。

ああ……とうとう買っちゃったよ。お姉さんも引きつった笑顔で

挨拶してるし。

なんか、疲れた。こいつ等、俺の精神疲労を狙っているのか？

店内には、強敵が二人。しかし、料理本のコーナーからは離れているので、邪魔にはならないだろう。

よし、今から作戦開始だ。瑠璃の作れそうな料理が載っている本を片っ端から上の棚に押し込んでいく。そうすれば、背の低い瑠璃には取る事は出来ないだろう。低いといっても珊瑚よりは数センチ高い。俺から見ればどんぐりの背比べなのだが、珊瑚に言わせると「妹より低いのはいや」と言っていた。毎日牛乳を飲んで身長を測っている健気な奴である。その栄養は身長より微妙に胸にいつていると思うのは俺だけか？ 最近の成長は目に見えてすごいものがあるぞ。

「えつと、これは……っ！」

順調に作業を続けていた俺はこの時、作業に没頭するあまり周りを確認する事を、忘れていた。何たる失態っ！

不意に肩を叩かれて驚き、声が出そうになった。しかし、ここで声をあげては変な人になってしまう。いや、十分変な人なのは自覚してるけど――。誰だ、俺の肩を叩くのは？ やっぱり店員か？

これだけの事をしているのでバレたか？

まずいぞ、なんて言い訳しよう。「ちょっと遊んでました」「パズルやってます」「触らないで、爆発しますっ」

ダメだ、どれもインパクトに欠ける。インパクトを求める必要はないが、なぜかそれを求めてしまう性格が恨めしい。

「もしもし……？」

しかも呼ばれている。俺呼ばれている。よし、頭の中で冷静にチャートを作ってみよう。

俺、呼ばれて振り返る。そこに店員。しかも、マッチョ。笑顔で事務室に連行。鍵掛けられる。マッチョ脱ぐ。俺、悲鳴。

――嫌過ぎる！ なんだ、この連想ゲームは！ ここは振り返っ

てはいけない。

逃げるのだ。逃げなければ、表を堂々と大手を振って歩けない身体になってしまう！

「くす……何してるの？ 亮ちゃん」

そう言つて、俺の頬に何度も突き刺さる指の感触とおかしそうに笑う声。

おかしい、俺の連想ゲームではマッチョのヒゲ親父がタンクトップでポーズとつてる姿が見えるのに、声はもの凄く女の子だ。

キャピキャピのギャルではないが、若い女性の声。しかも、亮ちやんって呼んでるし…… 亮ちゃん！

「え……あ、ああ！」

「ふふ、引つ掛かったあ…… 亮ちゃん」

クスクスと笑う笑顔に俺の心臓は、サンバのリズムをエイトビートで刻みはじめた。

この人の笑顔は本当に俺の心を揺さぶり動かす。昔からこの笑顔に何度見惚れた事か。

「ふふふ……何、してるの？」

「なんでもいいだろ…… 桃姉さん」

「ああ、随分と冷たいんだあ…… ひどい、私は遊びだったのね」

おかしそうに笑う桃姉さんは、俺の頬を指で突きながらまた笑顔をつくつて楽しそうにしていた。

とんでもない事を笑顔で言わないでくれよ。もし人が聞いたら大変な事になるだろ？

「ん……。亮ちゃん、お料理するんだねえ。すごい」

「え…… あっ」

「すごいなあ」

俺の後ろにある本棚を「すごいなあ、へえ」と、前屈みになつて料理本を眺めている。

「亮ちゃんは、どんなのが作れるの？」

「え…… あ、きよ、巨乳」

「ん？」

屈んでいる桃姉さんの顔は不思議そうに俺を見ているけど、優しく微笑んでいる。

「い、いえっ！」

「でも、すごいなあ。お料理作れる男の人って憧れるなあ」

俺の目はどうしても姉さんの胸にいつてしまふ。思わず口走ってしまったが、立派なものが二つもあるのだ。

今はさっきみたいなアロハではなく、前がボタンになっている薄いピンクのシャツに着替えて、その上にコートを羽織っている。でも、冬になるうかと言うのにそんな格好では寒くないのかと、思ってしまう。ボタンが上から二つほど開いて白い柔肌が覗いて、谷間がチラチラ。これは、男にとって至福の一時で眼福。砂漠の中にある幻のオアシスに辿り着いた気分だ。

「おにい……何を血迷ってるの」

「お、お兄ちゃん、目がえっちだよお」

「兄貴、最低」

「うおっ」

どこからか聞こえる声に、驚きあたりを見渡すがどこにも人影がない。いるのは、桃姉さんだけ。

につこりと微笑む姉さんは、相変わらず胸元が開いて見えている。なんて、絶景。

「うり」

「おごっ」

気合の入った掛け声が聞こえた瞬間、俺の足に激痛が走る。それも、小指にピンポイント。

あのタンスにぶつけた時のような言いようもない激痛に、下を向くと思いつきり膨れっ面のフグが三匹がいた。

「フグ、違う。ボクは、フグじゃない」

「酷いよ、お兄ちゃん」

「兄貴は、狼だ。餓えた狼だ」

明らかに怒っている珊瑚は、俺の足をグリグリと未だに踏み続けて、涙目の瑠璃は俺を見上げて口を”へ”の字に曲げて、胸の前で手を握りしめている。そして、琥珀は俺をただ痛い奴を見るような目を向けている。

なんでこいつ等がここにいるんだ？ まだ上にいるはずの時間だ。それが何故、三人揃ってここにいるんだよ。

「本当に仲がいいねえ」

三人の一斉攻撃に怯んでいると、俺の隣でクスクスと笑う声。のんびり聞こえる桃姉さんの声に我に返って、状況を理解しようとした。

こいつ等はどこから沸いて出てきたんだ。まったく至福の一時を邪魔してくれるとは、許せんぞ。俺の眼福を返せ！

「そうかな。昔と変わりは……いてっ、ない、いてっ……と」

「うり……。仲良し、こよし」

「いてえよ、何度も足を踏むなっ、珊瑚っ！」

睨みつける俺に、無言で見つめ返す珊瑚との息詰まる攻防戦。今、俺と珊瑚の軍勢は互角。

「仲良しだよね……おにい」

「言ってる事と、やっている事が」

「何か？ うり」

「うがっ」

仲良し言いながら、俺の足を踏む珊瑚はどうよ？ しかも、かなりピンポイントに同じに箇所を痛打しているので、ものすごく痛い。このままいけば、いつまでも終わりそうにない。どうやって切り抜けるが考える——俺。

「あたしも参加するっ、おりゃ」

「お前に踏まれたら、骨が碎けるわぁ！」

「何を！ あたしは化け物かつ」

その攻防戦に加勢してきた琥珀軍は、珊瑚の方へと援軍を申し出た。まずい、これでは形勢が傾く。

俺の敗北が濃厚だ。って、一体何をしているんだ？ 俺達は。

「あら……やっぱり、仲がいいわね。羨ましいなあ、私も仲間に入れてえ」

「何を……って、ちよつ、桃姉さんっ」

楽しそうに俺の背中に抱きついてきて足元を見ている桃姉さんは、この状況を楽しんでいた。

「うう、あんなにくっ付いて……。おにいのばか」

「お姉ちゃん、やっつけるんだよ！ 兄貴を更生させるんだっ」

だが実際には何をするのか分からない恐怖が、俺の背中を一筋の滴となつて落ちていく。

睨みつける珊瑚の恨みの言葉を身体に受けて、更に背中を流れる滝汗。ものすごく大変な事になってます。

「えっと、亮ちゃんの足を踏めばいいのかな？」

ニコリと笑みを浮かべて俺に聞いてくる桃姉さんに危なく「お願いします」って言いそうになってしまった。

危うく、この笑顔に騙されそうになった。でも、少しぐらいなら桃姉さんに……。って、そんな事を言ったら俺の人生が終わってしまう。

この人は手加減という言葉を前世に置いてきた人。ニコニコと笑う瞳の奥にキラリと光った野獣の本能。だから、功治はあんなに壊れてしまったんだ。

「すけべ」

「変態っ」

「女王様とお呼び、おほほほっ」

「うがっ、痛いってっ！ ちよつ、桃姉さん一人違ってるよっ」

それと、この状況がもつと分からない。女の子三人に囲まれて足踏まれてる俺って何？

そう言えば、何か忘れているような気がするけど、なんだろう。

「じゃあ、私この本を買ってくるね。ちよつと待ってねえ、お兄ち

やん
」

そんな攻防戦を崩したのは、
呑気な瑠璃の声だった……。

第8話：自分の命は、自分で守ろう（後書き）

長いのに最後まで読んでいただきありがとうございます。

段々、意味が分からない方向へと突っ走り始めました。

しかし、まだ一日も終わってないんですね（笑）

あと2話で一日目は終わる予定ですので、どうぞお付き合いください。

第9話：天国と地獄、どっちが好き？

家に帰って反省会。

俺、最低。桃姉さんの胸に惑わされて作戦を失敗するとは――。
まさかの伏兵に俺は敗れたのだ。これからはお色気に対して免疫をつけないと、また同じ事の繰り返しだろう。

しかし俺にそんな事ができるのか？ 全然、自信はない……。

「おにいのせいで、失敗。……すけべにい」
「うっ」

リビングのソファに座る俺に、痛い言葉が突き刺さる。

Ｌ字型に置かれたソファに俺は座っているが、六人掛けの大きなタイプでとても広い。なのに何故、俺の隣に窮屈そうに座っているのか教えてくれ、珊瑚。決して俺達以外、六人以上が座っている訳ではない。

リビングにいるのは俺と珊瑚の二人だけ。琥珀は自分の部屋で漫画を読んで大爆笑いる声がここまで聞こえている。そして瑠璃は、ただいまキッチンで奮闘中。

——きゃあ、お鍋がボンってっ！ うにゃ、野菜が変形したあ。
そんな声がキッチンから聞こえてる。すでに始まっている、瑠璃の摩訶不思議クッキング。

どうしたら鍋がボンってなるのか、野菜が変形するのか教えて欲しい。

——えっと、これとこれを入れて……きゃっ、青色になったよ？
なんで？

何を入れたんだっ、瑠璃。何を入れたら青色になるのか教えてくれ。そんなものは聞いた事がないぞ。

「なんて、デンジャラなものを。おにい……」

「そんな哀れみたっぷりの目で俺を見るなよお」

テーブルの上に置かれた珈琲を一口。だいぶ温くなってきたが、まだ飲める。

これは珊瑚が入れてくれたので大丈夫。

瑠璃が入れたのなら珈琲がそばつゆに、コーラが醤油に変化する魔法の手を持つているのだ。
マジックハンド

「まさか、桃姉さんがいるとは思わなかった」

「おにい、スケベ面だった。ほら……」

「うおっ！ いつの間に写真なんてっ」

珊瑚が持っていたのは、俺が桃姉さんの胸元を凝視している恥ずかしい写真。いつの間に撮ったんだよ！

これは、シャレになりません！ こんなものが世に出回ったら、俺の評判はがた落ち。功治と同レベルになってしまう。

「こんなスケベな顔……ボクも見た事ないの」

「何を言ってるんだ、お前は？」

「おにい、ボクには興奮しない？ ちらり」

「ぶっ！」

口に含んだ珈琲は思いつきり、珊瑚の顔に着弾していた。何て事を聞いて来るんだ、こいつは！

何を血迷ったか、胸元を開いて胸の谷間を強調している珊瑚は薄っすらと顔が赤い。

なんて嬉しい……いや、破廉恥な事をしているんだ。

「どう……？」

「うっ」

上目遣いのほんのり赤い頬と潤んだ瞳に見つめられたら、普通の男ならここで狼になってレッツゴーパライスイス一直線。

なんだろうけど、仮にも俺と珊瑚は兄妹だ。そんな事……そんな事するはず——ないぞ？ て、なんで俺は疑問系なんだよ！

「それにしても……おにい、酷い」

「あ、す、すまんっ」

今更ながら、珊瑚の顔は珈琲で黒かった。俺ブラックしか飲まな

いからね。と、そんな事考えてる場合でない。

髪の毛までも濡れの珊瑚は、俺を恨めしそうに見ているのだが、ちよつと嬉しそうなのは気のせいだろうか？

「タオル、タオル……」

「それなら、ここにある——はい」

「お、サンキュ……ん？」

珊瑚は俺にタオルを渡してくれた。なんかおかしくないか？ 持っているなら自分で拭けよ。

何故、自分で拭かない？ いや、俺が悪いのだから別に拭くのは仕方ないだろう。しかし、何故に目を瞑ってこちらを向いている？

「早く……おにい」

「うっ」

エロい。妙にエロいぞ、この状況。珈琲だと分かっているのに、なんでこんなにエロティックなのだ！

俺の心拍数がマックス超えてるぞ。まさか、妹相手に興奮してるのか？ 俺ってそんなに見境のない生き物なのか。否、そんな事あったまるか。俺は普通だ。普通なんだよ——。

「はうっ……」

「へ、へんな声出すな」

震える手にタオルを持ち、ゆっくりと珊瑚の顔に触れる。柔らかい肌の感触が、タオル越しに伝わってくる。

「だって、おにい……手つきがえっち」

「なっ、だった自分で拭けよっ」

上目使いの上気した頬で俺を見つめる珊瑚。そんな顔されたら俺はケダモノになっちゃうぞ……。

「何、いちゃいちゃしてるの！ 兄貴」

「うっ」

突然聞こえた声と同時に、俺の側頭部に衝撃が走り抜け身体が水平にテイクオフしていた。

中々、変わった景色だな。

全てのものが横向きに見える。あれ、違つか——俺が横向いてい
るから横に見えるんだ。

「何をするんだ、琥珀っ」

「兄貴がお姉ちゃんを襲っているから成敗した」

「してねえよっ！」

まさか、リビングの床にキスするとは思わなかったぞ。しかも首
が変な方向に曲がって、未だに景色が横向きだ。

「何て事をしてくれんだよ、お前は」

「だって、兄貴がお姉ちゃんを押し倒して、服脱がせようとしてる
から」

「してないだろうが！ 見ろ、珊瑚を——って、脱いでんじゃねえ
よっ、珊瑚」

琥珀の勘違いもすごいが、珊瑚も何をしようとしている？ なぜ、
自ら服を脱ぐ。

見ろ……琥珀様が俺を睨んでらっしやるではないか。

とても言葉では表現出来ないくらいの形相で睨んでますよ。口か
ら覗く歯が異様に尖って見えるのはなぜ？

「やっぱり脱いでるじゃんっ」

「こいつが勝手に脱いでんだよ！ 俺は何もしてないぞっ」

「おにい……口の中が苦い。ベトベトするものが、服の中にも……」
確かに珈琲はベトベトするし、ブラックは苦いだろう。しかし、

今ここでその発言は大いにまずいぞ……珊瑚。

「な！ ……なあにしたんだ、兄貴！」

「ま、待て！ まだ何もして……じゃなくてっ」

「する気だったのかっ」

勘違い大魔神さんが、こちらを見て我を忘れて大暴れを始めてし
まった。最早、手遅れのようなのだ。

俺も余計な一言をつい言ってしまったって、馬鹿だな。そう思ってい
たら、不意に琥珀は俯いて、

「……なんで、いつもお姉ちゃんと瑠璃ばかりなの」

「は……？」

小さく聞こえてきた声に今までの勢いはなく、どこか寂しげな表情をして目を剃らしていた。

「隙ありっ！」

「うわっ、卑怯だぞっ！」

愁傷な表情をしていると思ったら、途端に口角をあげて俺に拳を振り上げてくる。

なんて奴だ——兄を騙すとは！

そんなあくどい事をどこで覚えたんだ。誰か、俺を助けてくれ！
でないと、あの世行きになってしまう。

「お兄ちゃん、ちよつとお」

天の助け——俺を呼ぶこの声はまさしく天の助け。地獄の中の仏とは、まさにこの事。

「おうっ、今すぐ行くぞ！ 瑠璃」

そして、俺は文字通り地獄を味わった——。

「おう……うつぷっ」

「お、おにいちゃん……しっかりして」

泣きそうな顔の瑠璃が俺の目の前にいる。なんで、こいつはこんな顔をしているんだ？

そして、俺はなんでこんな所で寝てるんだろう。

「だ、だいじょうぶ……？」

「お、おう。大丈夫だ」

どうやら俺は、ソファの上に寝転がされているようだ。しかし頭の下にある柔らかい感触はなんだ？

ソファってこんなに柔らかかったかな。一番の疑問は瑠璃の顔が

異様に近い事だが――。

「えっと、これは……」

「ひゃ！ んっ……やん、お、おにいちゃん」

頭の下にあるものを触れてみると、程よい弾力と温もりを持っていた。これってもしかして……。

「そんなと、こ……さわっちゃ、だ……め」

「うわっ、すまんっ！」

真っ赤になった瑠璃の顔が恥ずかしそうに俺を見て、荒い息を吐いていた。

俺、どこ触ったんだ！ 誰か教えて。そうしないと、俺今日寝れそうにないから。

「だ、だだだ、だい、じょうぶ……だから」

俺を見ている瑠璃が、首をゆっくりと振っていた。俺は瑠璃に膝枕をされていたようだ。その柔らかい感触が未だに頭に残っている。甘い瑠璃の香りらしきものが鼻の奥に残り、いらぬ妄想を次々と掻き立てる。

「そ、それじゃ、お兄ちゃん。お茶入れるから、そこに座っててっ」
咄嗟に立ち上がり、矢継ぎ早にそう言ってキッチンへと駆けて行く瑠璃の後ろ姿を見て、

「る、るるる、るりっ……そ、その格好はっ」

「え……あ、きゃっ！ いや、見ちゃダメっ！」

慌てて押さえているが、しっかりはつきりと見てしまった。何故に裸エプロン三步手前の格好をしているんだ。しかも、上はきちんと着ているの下はなんで下着一枚だけなんだ？ 新手のプレイか！ 我が家はいつからいかがわしいお店になったのだ。

「え、えええ、えっと……さっき、お兄ちゃんが倒れた時に、一緒にお鍋が落ちて」

「なっ、お前火傷しなかったのかっ！」

近づこうと一歩前に出た足を引き止める。今の格好の瑠璃に近くと絶対にパニくってしまうだろう。

そうになると、もっと酷い事になる。裸エプロンなんて比較にならない全裸ダンスを見る事になって、今度は俺が大変な事になってしまふ事は必至――。

「や、ややや、火傷はしなかったから……大丈夫、だから」

俺の考えている事が分かるのか、俯いたまま喋る瑠璃は手早くお茶の用意をしているが、どうにも手元がおぼつかない。

対面式のキッチンなので動きは手にとるように分かるが、顔はトマトも真っ青の完熟ぶり。

「きゃっ」

「る、るり――ひやお！」

そう思っていた矢先に、瑠璃の短い悲鳴と同時に冷たいものが俺の顔に直撃した。

「な、なんだあ！」

「……お、おにいちやあん」

キッチンから聞こえる瑠璃の泣きそうに助けを求める声に駆け出し、キッチン中で見たのは一瞬、夢かと思ってしまふ光景だった。

「あうう……水道がボンってなって、バンって……うう、びしょ濡れだよお」

キッチンのシンクには、ほぼ必ずと言っていいほど水道が付いているものだ。

それは水源地より水を運んできて家庭に潤いをもたらすもの。しかし、今の我が家の水道はご機嫌斜めらしい。

何故か吹き上げてキッチン全体を潤している。しかも、何故か瑠璃ばかりが集中放水されてるのは分らないが……。

座り込んで涙を浮かべている瑠璃は、見事に全身びしょ濡れ。

「おにいちやあん……冷たいよお」

俺を見上げている瞳も涙に濡れて、髪の毛から滴る水滴。エプロンも濡れて、足なんて下着だけなので妙に色っぽい線を浮かび上が

らせて、しかも危険なラインまでずり上がっている。上半身もエプロンや服が濡れて身体のラインを露わにして、限りなく裸に近い状態だった。

ある意味、裸より数倍こっちの方がエッチだぞ。って、そんな事を考えてる場合じゃなかった。

「だ、大丈夫か？ 瑠璃。ここは俺に任せて、お風呂行って来いっ」「え、あ……お、おにいちやん」

瑠璃が何かを言っているが、それに耳を貸さずに俺は水道と格闘を開始した。

どうにかしてこの水道を止めなくては、キッチンが使いものにならなくなってしまう。

それに、このままにしているのは親に怒られるのは俺だから……長男の辛いところだよ。

「瑠璃——わっぷ！ 早く吹いて来いって！」

「で、でも……」

「俺は大丈夫だから！」

水道が暴れ狂うように周囲を更に濡らしていく中、動こうとしない瑠璃に少しだけ強い口調で言っと、ビクっとして立ち上がった。いた。

いつまでもそこにいても濡れるだけで、第一風邪を引いたらどうするつもりなんだ。

「じゃ、行って——ひにやつ！」

「る、ぶっ！」

変な声をあげて倒れている瑠璃。

立ち上がろうとして足を出したが、水に足をとられて前のめりに転んでいた。しかも、こちらにおしりが向いているので、とても大変な事になって——俺も大変な事になりそうだ！

「ううーん、え……あ、きゃあ！ す、すけすけなのにい」

起き上がって慌てている瑠璃は、ちらりと俺の顔を見て顔中を真っ赤にして泣きながら走って行った。

リビングを出て盛大に転ぶ音がして、ぐずっている声が聞こえるが俺が泣きたいぞ？

「い、妹に……ぐお」

瑠璃よ……余計な事を口走って行くな。俺も大変な事になってしまったではないか！

激しく自分の見境無さに自己嫌悪に陥ってしまったよ。今日は、なんて誘惑の多い日なんだ。

俺って、こんなにスケベなキャラだったかな……。

落ち込みながら格闘している水道は、瑠璃がいなくなった途端にピタリと止まっていた。

試しに水を出しても問題なく、しかも壊れていた形跡がない。もしかして、これは新たな瑠璃の技なのか？

「なんだったんだよ」

謎が深まった夜の出来事だった……。

第9話：天国と地獄、どっちが大好き？（後書き）

毎回、多くの方に読んでいただきありがとうございます。
まったく、予想外の読者数に驚きの毎日です。

お笑いと言っておきながら、気付けばエロネタのオンパレード（汗）
とりあえず、次の話でやっと一日目が終わり。

その次からは、もう少しまともになるように頑張りますが、真面目
になるとは限りません（笑）

たぶん、エロネタは出てくるでしょう…。

第10話：一日の終わりとまた始まる一日

すっかり夜も更けて、時間は十一時を廻っていた。

あれから風呂に入り、身体を温めて今は部屋で寛いでいる。俺の部屋は元々は物置部屋だったのを改造して作られたので、少し他の部屋よりは狭い。しかし角部屋なので日当たりは良好。春は気持ちいいが、夏は地獄だ。

「おう……」

ベットの上で寝転び天上を眺めると、シミが笑顔で微笑んでいる訳はなく、綺麗なものである。

そんなものが微笑んでいたら、さすがに祈祷師を呼んで御祓いをしてもらう。

さつきから何度寝返りをうっているだろうか――。

何もする事がないので早めに寝ようとは思っているのだが、目を瞑ると今日あった事が次々と瞼の裏でロードショー中。

色や形、質感まではつきりと浮かび上がって、さつきから悶えて気が変になりそうだよ。

「ああ……俺って、最低だあ」

枕に顔を伏せて、ふと頭をよぎったのは瑠璃の柔らかい腿の感触。手にも蘇ってくる温もりに俺の心臓がマックスに踊り出していた。

「……更に自己嫌悪。俺、こんなに見境ないのか」

今夜は眠れないかも知れない。

そう覚悟した俺の部屋に訪問者が来たようだ。控えめにノックするのはたぶん、瑠璃だ。

琥珀はノックも無しにいきなり入ってくるし、珊瑚は気分が変わるがもう少しはつきりとノックをする。

これだけ静かに聞こえるのは、瑠璃の特徴という事だ。

「……お、おにいちゃん」

これまた控えめな声がドアの向こうから聞こえてくる。しかし、こんな時間になんの用だ？

まさか、夜這い？ あの大人しい瑠璃が夜這いなんてありえないが、もう身体は大人だ。て、俺は何を考えてんだよ。

「起きて……る、かな？」

「う、ああ」

俺の声に息を飲む音が微かに聞こえたが、次に意を決したのか「入る、ね」と言っ、静かにドアを開けてきた。

「どうした？ 瑠璃」

俺はベットに座っているが、いくら呼んでも瑠璃は入り口から一歩も動かず立ち尽くしたまま。

なるべく平常心を心がけて話しているが、目の前をさっきのすけすけビジョンが飛び回ってうつとうしい。それに瑠璃の顔が、少し上気しているのか赤く目も潤んでいた。

「あ、あああ、あのね……」

どもりながら、必死に言葉を探している瑠璃の姿に俺は、自然と笑みがこぼれてしまう。

……昔から変わらない仕草。

考え事をする時に、両頬に手をあててあたりを見渡す癖。これを初めて見たのは、俺が一番最初に瑠璃の声を聞いた時だ。

懐かしい思い出に浸っていると、瑠璃からポツリと言葉がもれていった。

「ご、ごめんね……お兄ちゃん」

「は？」

立ったまま俯き、俺の顔を見ないようにして小さく呟いて黙ってしまった。

握りしめた小さな手が、少し震えている。

「迷惑ばかり……」

「なに、言っ、てんだ？」

瑠璃の様子に俺はいつの間にか、冷静さを取り戻していた。

すっかりと落ち着きを無くしている瑠璃は手を握ったり開いたり、下を向いた視線は床の木目を数えるように忙しなく動いて怯えているようにも見える。もしかして俺に怒られるとでも思っているのか？

「本当に……」

「もういいよ」

驚いて俺を見る瑠璃の顔は、青ざめて体は震えている。立ち上がって近づく俺を見つめる瞳。

親に怒られる子供のよう、ただ恐怖だけが支配する目をしている。

「あ、別に怒っている訳じゃないぞ？ そんなに気にしなくていいって意味だからな」

頭に手を置いて優しく撫でる。髪の毛はまだ少し濡れているのか、しつとりと手に絡む。ちゃんと乾かさないと風邪を引くと言うのに、こいつはどうせ別な事を考えていて忘れていたのだろう。

「心配すぎだ。俺はなんとも思っていないから、瑠璃もそんなに気にするな」

「お、にい……ちゃ」

それ以上は言葉にならないようで、ボロボロと大粒の涙を流して瑠璃は泣き始めた。

声はあげる事もなく、ただ泣きじゃくる。本当に子供のようだ。だけど、こいつはそれだけ純粹で優しい性格なんだ。

それが分かっているから俺もこいつを泣かせるような事をしたくない。今日はちょっと失敗したが、次からは気をつけよう。

もう泣かせたくはないから。泣いてるところを見たくないから――

「泣くなよ。折角の可愛い顔が、台無しだぞ」

「も、もう……。お、おにいちゃんの、ばか」

目を拭いながら微笑んでいる瑠璃は、これ以上ないくらいに可愛かった。天使の微笑みというのはこれを指すのではないか、と思

うぐらいに綺麗で、そして優しい気持ちを俺に与えてくれる。やばい、今まで忘れていたものを思い出してしまった。

すけすけビジョンがまた飛び回ってるし、目の前には本人がいる。とにかく落ち着け、俺。

「ば、ばかで結構だ。早く髪乾かせよ、風邪引くぞ」

「……うん。今度は失敗しないようにちゃんと、頑張るからっ」

微笑みながら部屋を出て行く瑠璃は可愛かったが、言っている事は子悪魔に聞こえた……。

パラダイス。

不意に目覚めた俺は、そう思ってた。

とてもカラフルな夢。ピンクが舞い踊り、青に赤が乱れ飛ぶ。白と黒も出てきて危うく、夢の中で過ちを犯すところだった。

寝ぼけ眼で枕元に置かれた時計を見ると、短針は五時^{まようじ}を指して長針が重なるうとしていた。

静かな家の中、まだみんな寝ているのだろう。夏ならすでに明るい時間で早朝に散歩する人などがいるのだが、寒くなったこの時期にはそんな人は少ない。布団を掛け直して、もう一度寝ようとする、どこから不思議な声が聞こえてきた。

——お、おにい……ちゃん。

小さい声。蚊のなくような声という表現があるが、まさにそれに等しい声が聞こえている。

なんだ？俺まだ夢見てるのか？それにしても、随分とリアルな声だ。

——寝てるよね、おに、い……ちゃん。

俺をお兄ちゃんと呼ぶのは一人だけだ。まさか、これは夜這いの夢か？ それはいけないぞ、瑠璃。

そんな過ちをおかして、お兄ちゃんはお前をどうしたらいいんだよ。あれ……俺、すでに過ちを犯しす事を前提に話している？

——おにい、ちゃ……ん。もっと、あたし、素直に……。

小さく聞こえる声。確認するような、それでいて恥ずかしそうな声に夢だが違和感を覚えた。

微妙だが違う。

いつも聞いている瑠璃の声ではない。では、誰だ？ この家に俺を「お兄ちゃん」と呼ぶのは瑠璃だけ。

琥珀は「兄貴」で珊瑚は「おにい」だ。でも、聞こえているのは瑠璃の声ではない。誰かに似ているが誰だったかな？

そう思っていると、布団の中で動く身体が俺にすつと寄り添ってくる。胸の前に置かれた手の温もりが優しく身体中に広がっていく。

なんてリアルな夢だ。温もりまであるとは、最新鋭の夢か？

——お兄ちゃん……。あたし、嫌な女なのかなあ。

そうやっている仕草は、いつもの様子とはだいぶ違う女の子としての部分を垣間見た気がする。

俺の夢に出てきているのは——琥珀。

目を閉じて俺に寄り添う姿は、健気な女の子だ。しかし、なぜこいつが？ そして、なんで俺を「お兄ちゃん」と呼んでいるんだ？ どうにも変わった夢だ。やっぱり最新鋭の夢だ。絶対にありえない事を言っているのだから。

——もっと、素直になりたいのに……できないよ。

小さな声で囁く琥珀は、俺に聞かせるように話している。なんとも琥珀らしくない姿に、ドキドキしてしまう。

乙女だ。この夢の琥珀は乙女になっている。なんて本人に言ったら殺されるな。

——おにいちゃんは、どんな人が……好きなのかな。

俺の胸元に置いていた手を頬まで持つてきて、優しく撫であげて

いる。柔らかい手の感触に、ふわりと意識が軽くなっていく。

——でも、負けないよ。あたしは……。

微かに触れる温もりに、意識が段々と遠退いていった。

「とうっ」

どこからか、気合の入った掛け声が聞こえてくる。誰だよ、俺が寝ているところでうるさい奴だな。

「起きろっ、兄貴っ！」

「ぐふっ」

腹部に突き刺さる痛みに覚醒していく意識だが、あまりの衝撃に永遠の眠りにつきそうになった。

「殺す気かよ！ お前は」

「大丈夫、兄貴はそれぐらいでは死なないように設計されてるから俺は、ロボットかよっ」

俺を見下ろす琥珀の目は楽しそうに笑っている。いつもの小憎たらしい笑みを浮かべて——。

夢で見た琥珀とは随分と印象が違う。やっぱり、あれは夢でしかなかったと言う事が。

「まったく……。夢の中なら、もう少し可愛げがあったっていうのに」

「え……？ え、ええ！」

呆れるほどに動揺している琥珀は、顔を一瞬に真っ赤にして俺を見ているが妖しく挙動不審。

「ん？ 何驚いてんだよ。俺が見た夢にお前が出てきて、「おにいちゃん」って擦り寄って来たんだ。恐ろしかった……」

「起き…っ、何言ってるのよ。夢の話でしょ！一緒にしないでよ、肖像権侵害！」

今度は表情を一辺させて怒り始めた琥珀だが、かなり焦っている様子。何を言いたいんだよ、こいつは。

そんなに変な事を俺は言っているのか？だって、夢の話だろ。誰がどんな夢見たって不思議はないはず。

それに夢にまで肖像権を持ち出されても、無理ってもんだ。

「でもなあ……最後に何かされたんだが——まったく、思いだせないんだなあ」

「っ！お、おおお、思い出さなくていいっ！」

「おぶっ」

真っ赤な顔をして俺に飛び掛ってきた琥珀から間髪避けるが、すでに第二撃が迫っている。

「うお！——だから、なんでお前が怒ってるんだよ」

「変な夢見てるからよ！馬鹿兄貴っ」

振り回す腕を避けながら部屋中を走り廻る琥珀。朝から何やってるんだよ、俺達は。

「だから何だっと言うんだよっ」

「忘れる、兄貴！一辺記憶を無くして、生まれ変わってあたしの…か、かかか、れだあ！」

支離滅裂な事を叫びながら俺を追い駆けて来る琥珀のせいで、部屋の中が滅茶苦茶になっている。

俺の漫画やCDがあちらこちらに散乱して、見事なプラスチックの破裂音や紙の破ける音を響かせていた。

「変態兄貴っ！大人しく、一辺死んで来いっ」

だから、一体なんなんだよっ！

第10話：一日の終わりとまた始まる一日（後書き）

やっと、一日が終わりました。

長い…。なんでこんなに長い事になるでしょう（汗）

次からは、もう少し短めにいきたいと思います。

それでは、次の話で会いましょう（笑）

第11話：変わった学校だって思うよ

朝の琥珀の襲撃事件から無事に生還して、現在登校中の亮です。
俺、誰に近況報告してんだ？ まあ、そんな事は気にする必要もないか。

さて、事件です。いえ、決して我が三姉妹が何かしたとか、俺が犯罪を犯した訳ではない。
なんだか幻が見えます。

「なあ、珊瑚。あれ何に見える？」

「学校。それ以外ないと思われそうですよ」

そんな言い切られても俺が困る。確かに俺達の前には、いつもの学び舎がある。でも、少し違うんだよな。

「次、瑠璃。……瑠璃？ って、うおっ」

「うわあ、すごい……あれって、何？ なになになに、はうゝ。ぴちぴちぽっぽ、ひゃほほほ」

「壊れてる……。あまりの事に瑠璃が壊れてる」

衝撃が強すぎたか瑠璃はおかしくなっ、危ない事を口走っている。衛生兵っ、もしくは白魔道士！

誰でもいいから、これを治してくれ。あまりにもかわいそうで見てられない。

「ええ……最後、琥珀」

「なんであたしはいつも最後なのよ、まったく。あれって、桃姉ちゃんの仕業でしょ」

「……やっぱりそうか」

「そうじゃなきゃ、誰がするのよ。あんな悪趣味な事」

ごもつともなご意見ありがとう、琥珀。やっぱり桃姉さんの仕業か。そうだろうね、誰が校門に看板付けるんだよ。

しかも、ご丁寧に電飾まで施して、これではテーマパークの看板

と変わりないぞ。

『桃極楽王国学校へ、いらっしやいませえ』』

どこか、妖しげな店を連想させるネーミングだ。アーチ状に作られた看板が校門の両側に固定されてキラキラと輝いていた。経費の無駄使いだと言う事に気付いているのか？　そして、何気に学校の名前を変えている。いいのか？　こんな事して。教育委員会に怒られても知らないからな。

「桃尻極楽王国？　……なんだ、これは」

「なんか、すごい事になってますね……これ」

「どこから現われた、功治。おはよう、美鶴」

につこり笑顔の美鶴は今日も元気なようだ。感心しきりに看板を眺めている美鶴と、妖しげな顔で看板を見つめる功治。

さつき、桃尻って言ったのか？　このボンクラは。どうやったらそう読むのか教えて欲しい。

「おはようございますっ、亮先輩」

「おう、おはよう。我が友、ギマイスター亮」

「ああ、ギマイスターボンクラ功治」

「ぐっ……。そんな事言うなよお、亮ちゃあん」

「気色悪いわぁ！」

泣きついてくる功治を引き剥がしてから、もう一度看板を眺めてみるが、そこに存在するのは大きな桃。

何故か、立体的で角度によっては本当にお尻に見えるから不思議だ。色がほんのりピンク色なので、妙に生々しくてエッチだ。

どういう趣味で作ったのか知りたいよ、桃姉さん。周りに行く生徒、特に一年の男子なんて顔中真っ赤で前屈みだぞ？

「桃尻だなぁ……。これって桃子さんのか？」

「そんな事、俺に聞くなよ」

「昔、見てたくせに……。はぁはぁ言いながら……このっ、す、け、べ、亮ちやうがっ」

「はぁはぁなんて言っつてねえよ！　それは子供の時の話で、お前も

いただろうがっ」

アホ面している功治を殴り飛ばして、周りを見ると何故かみんなからガンを飛ばされていた。だから、お前等も一緒にいただろうって。

子供の頃の話は今更むし返されても、どう反応していいか分からないだろ。

「と、ところで、あれはなんだあ？」

「話題転換しやがったな。あれは気にしない方がいいぞ、功治。どうせいつもの事だろう」

「だって……皆して、俺を睨むんだもん。しかし、何か様子が変わだぞ？ うごっ、いてっ！ みんなして蹴るなよっ」

話が繋がってないようで、微妙に繋がっている会話。俺と同じように、功治もみんなに睨まれていた。

違うところと言えば、蹴りを喰らっているところか。たこ殴りつて言葉があるが、アレの足蹴りヴァージョンだと思ってもらえば、分かり易いだろう。八本の足が次々と蹴っているさまは、なんとも爽快。頑張れ功治、骨は拾って捨てるぞ。

「しかし、相変わらず眩しい」

前方から眩しい物体がこちらに向かって接近してくる。あんなに離れているのに、その存在感を存分にアピールするあのハゲはすごい。

いつものようにサングラスを着用して様子を見る。しかし、昨日あれだけ怪我してもう治ったのか？ 更に光具合がパワーアップしているような気がする。それよりもこの変な効果音はなんだ……？

「チャチャラッチャ」。チャラララ……チャチャラッチャ、チャララ、へいっ」

何故か、マーチを口ずさんでいるハゲ。それもかなりの大声で、しかも拡声器まで使ってうるさい事だ。

そして、この響いてくる地響きはなんだ？ 一定のリズムで響くこの音。って、何に乗ってんだよ！

「ハゲ、うつとうしい。おにい、やっつけて」

「無理を言うな。あれをやっつけるのは、無理があるぞ」

「お、おお、お兄ちゃん……な、なんか怖いよ」

「さすがにやばくない？ 兄貴」

瑠璃はすっかりハゲのテンションについていけずに、怯えて俺にしがみ付いている。

さすがの琥珀もアレには驚いて逃げ腰だ。俺も少しびびったが、本物がこんな所にあるはずがない。

珊瑚はこの際無視だ。アレには生身では対抗できないぞ。

「すつげなあ、本物か？」

「そんな訳ないでしょ、お兄ちゃん。まったく、どうせハリボテが何かに決まってるわよ」

酷く冷静な佐々木兄妹。いつ復活したんだ？ 功治。なんともことう言う時は頼りになると言うか、肝が据わっていると言うか。

とにかく、美鶴の言う通りかも知れないが、実物を確認するまでは迂闊な事は出来ない。

「はっははははっ、ごほごほ！ 水上亮、よく来たなっ」

「学校だからな。それより、なんだそれ？」

「これか？ これは校長が貸してくれた自家用戦車だっ」

「戦車に自家用があるかつ！」

爽やかに光る頭が眩しいぞ、ハゲ。しかしなんてものを桃姉さんは貸しているんだよ。

こんなものに日本で乗っていたら、道交法違反で捕まるぞ。

「心配するな、これは人力だ。ほれ、頑張れ倫子君……もっと、スピードを」

「人力！ ……しかも、倫子がこいでいるのかっ」

「そうだ、驚いたかつ！」

戦車の上で馬鹿笑いしているハゲは、俺を見下ろして満足げに頷

いている。なんてムカツク顔。

あのハゲにあんな顔されると無性に腹が立つのはどうしてだろう。

「だが、最低だな……お前」

「なにがだつ！ 負け惜しみか、水上亮っ」

「倫子一人にそんな事させるなんて。お前……男として最低だぞ」

「うっ」

全員で冷たい視線を投げかける。しかも、無言の圧力付きで――。

特に珊瑚の視線は、絶対零度並にきつい。

普段が無表情だけに、バラが凍って勝手に粉々に砕け散ってしまふ感じがする視線だ。

「ハゲ……最低。自意識過剰の変態野郎」

バツチリ効果こうかてきめん顕面。崩れ落ちるハゲにトドメを刺していた。

さすがにその言葉は、俺も言われたらへこむ。

「ねえねえ……おにい」

そばにパタパタと寄って来て、俺を見上げている珊瑚の視線は何を意味するんだ？ そして、頬が微妙に赤いのはどうしてだろう。

「ボク、えらい？ えらい？」

「ああ、えらいぞ。しかし、最後のはちょっと余計だ」

「あう……」

ポンポンと頭を叩くと嬉しそうに俯いて更に顔を赤くしている。

こいつは何を考えているのかさっぱりだな。

まるつきり子供と化している。

戦車から倫子を助け出すと、すでにバテバテになっており荒い息を吐いていた。よく見ればこの戦車、外装が本物だ。

中は自転車一台だけのシンプルな作りだが、外は重厚感溢れる鉄製。

かなり重いはずだが、これを倫子一人で動かしていたのか？ なんて体力だよ。

「さて、行くとするか。あんまりのんびりしていると、遅刻するからな」

毎朝ここで時間をとって、いつも遅刻スレスレの俺達だ。今日こそはゆつくりと登校したい。

早めにハゲがくたばってくれたので時間が余っているが、ここで気を抜くと危ないのだが、

「俺、やっぱり胸より尻の方がいいかも……。どっちも捨てがたいんだけどなあ、どっちがいいと思う？」 亮

「この戦車、どうしようか？ 美鶴、乗ってみる？」

「面白そうね。一緒に乗ろうよ、琥珀」

「え、えっと……。だ、だめだよ。そんな事したら、怒られちゃうよ」 お前等、学校に何しに来てんだよ。しかも誰も俺の話を全然聞いてないぞ。

やっぱり今日も平和な一日じゃないんだろうか？ 静かに泣きながら俯くと、珊瑚に頭を撫でられてしまった。

「みんな聞いてないね……。おにい」

「そうだな……」

つま先立ちになって一生懸命、頭を撫でる珊瑚の足がプルプル震えているのが、妙に可愛かった。

朝からやっぱり疲れるんだ、俺……。

第12話：やっぱり変わった学校だ

戦車まで出てくる学校ってどうよ……？ しかも、一步入った教室も凄まじい事になっていた。

俺の見間違いかと周りを見たら、同じように啞然としている功治と何故か少し嬉しそうな珊瑚がいた。

「おにい、見て。にゃんこ」

「おう……にゃんこだな。しかし、これ……なんだよ？」

まさしく、犬猫動物園。

ほとんどの種類の犬と猫が揃えられているようで、鳴き声がオーケストラになって教室内はとても賑やか。

なんでこんな状態なのかは分からないが、我がクラスメイト達は順応性が相変わらず高いようだ。

皆、馴染んでいるなあ……。

「にゃ……うにゅにゅ」

「何してんだよ、珊瑚？」

「にゃんこのさんぽ。いちに、さんぽ」

頭の上に縞斑の子猫を乗せて遊んでいる珊瑚は、嬉しそうに自分の席へと歩いて行っていた。

……あれは子牛か？

なんであんなに上機嫌なのか知らないけど、あれほど感情を表に出す珊瑚も珍しい。

「さんごっちは、猫が好きなのか？」

「……知らん。と言うか、あいつが動物と戯れているのを始めてみたぞ」

「なるほど。では、これはレア映像ですなあ……うぶう」

「そうだな。って、うおっ」

顔にべったりと何かを張り付かせたままの功治が、もがいていた。

「いや、俺もびつくりだ。しかし、こいつ結構可愛いぞ？ 爪が食い込んで少し痛いけど……」

「……そうか」

どうやったら、そんな芸当ができるのか教えてくれよ。しかし、モモンガがムササビかは知らんが、よく功治の顔に止まったものだ。こっちの方がレア映像だと思うぞ。

「ん……？ は？」

何かもそもそする感触に下を向くと、俺の足首に纏わりつく物体。白く丸っこいフワフワした物体を持ち上げると小さな声で「おみやる」と鳴いていた。

「おみやる」ってなんだよ？ まるっきり、未確認物体だな……これ。

「なんだ……？ 物体Xか？」

モコモコし過ぎて顔すら見えない丸い物体は、未だに「おみやる」と鳴いている。

試しに下ろしてみるとすぐに俺の足元に来て擦り寄ってくる。少し離れてみると丸い物体は歩いているのか、転がっているのか分からないが、俺の後をついてくる。その姿は愛くるしいが、もしかして——俺って親と勘違いされてる？

「きゃあ、かわいいっ」

「ねえねえ、亮君。この子どこにいたの？」

「うわあ、ふわふわだよあ」

「すごく白くて綺麗だね」

バタバタと走り寄ってきた女子達は、目を輝かせてその物体を抱いていた。

すっかり人気者になっている白い物体は、ちやほやされるのが好きなのか楽しそうに鳴いていた。

なんだか知らないが、俺には関係ない。さっさと席に着こう。

「まだ、やってたのか？」

「おにい、にゃんこは可愛いにゃ」

頭の上に乗っている子猫を撫でながら楽しそうな珊瑚を見ていると、俺の足元にさっきの感触が戻ってくる。

まさかと思い、下を見るとやっぱりそこには白い物体がいた。

「またお前かよ……。一体なんだ、お前は？」

持ち上げると嬉しそうに「おみやる」と鳴くこいつを机の上に下ろしてみると、ちょこまかと机を走り回り始めた。

「おにい、それなに？」

「知らん。俺に懷いてきたんだよ」

「かわいい……。ふわふわにゃ」

珊瑚は興味津々と言う顔で白い物体を突いているが、こいつも嬉しそうな鳴き声を上げている。

こいつ、もしかして女好きなのか？

「ところで名前は？」

「……は？ そんなもんあるかよ」

「ダメ。ちゃんと名前つけてあげないと、かわいそうだよ」

「にやって、お前なあ。こいつに名前つけてどうする？ 飼うのか？」

珊瑚、なんだか猫化してないか？ 頭に乗った子猫を撫でているが、それが妙に可愛いと思ってしまった。

珍しい光景を見ているだけだと思うが、珊瑚の違う一面を見た気がしたりもする。

「しかし、こいつ等は——」

その珊瑚の変化を嗅ぎつけたハイエナどもが廻りに近寄ってきては荒い息をついて、こちらの様子を妖しげな目で見ていた。

何故そこでカメラを構えている？ お前のポジションでは珊瑚の足しか映らないだろ。

お前等、そんな危ない目で珊瑚を見ていたらヤルぞ？ 一瞬で地獄を見せてやるぞ。

「早く、決めてあげるにゅ」

「お前のキャラが分からん……」

「気にするにや。さて、その白いフワフワの丸い猫もどきの名前は――」

「って、お前が決めるのかよ」

どこからか響くドラムロールに教室中が静まり返る。なんだ、この状況は！

いつの間にか俺は教卓の前に作られたステージに立たされて、蝶ネクタイをした功治がマイクを持って構えていた。

なんだよ、このスポットライトは――。

「ようこそ、いらっしやいまれるろ！ 『愛の告白・みんなの前でフラれまSHOW』のお時間がやってきましたっ」

《いえい！ フラれろ、フラれろ》

なんでクラスメイトの男子に睨まれて大合唱で、「フラれろ」コールをされているんだ？

なんだって俺がふられる事を前提に話が進んでいるのか分からないが、それ以前にこの状況は一体なんだって言うんだ。

そんな俺に、「ご都合主義はほんとこい」と言う神様の声が聞こえてくる。……やばい、幻聴が聞こえる。

「……ごめんなさい」

「おっと、水上亮さんフラれたぞ！ これはどうした事か。どこがいけなかったんですか？ 珊瑚さん」

「えっと……。ボクには……でも、嫌いと言う訳でも」

モジモジと赤い顔をして話している珊瑚にマイクを向けている功治が、大袈裟に頷いたり驚いたりしている。

その度にテレビショッピングでお馴染みのおばちゃん連中のような合いの手が入ってくる。

ここはお昼の情報番組か――あの超人色黒タレントが出てくるのかよ！

「なんなんだよ、これはっ！」

「受け狙い？」

「俺はノリと勢いだけの男だ。こんな事では揺らがないぜっ」

意味もなく齒を光らせている功治とまったく何も考えてない珊瑚のポケポケコンビが、事も無げに言っているが、

「だから名前を決めているんじゃない、なかったのか？」

「それは、おにいの仕事」

「だったら、こんな事するなあ」

まったく、このノリはついていけない。

大体、いつの間に教室の前に立っていて――で、またいつの間にか自分の席に戻ってるし！ だから、この展開はなんなんだよ。

「ああ……騒いでるところすまんが、すでにすっかりびっくり万国ビックリショー的に授業は始まっているぞ」

ドアを開けて入って来たのは、いつもの聖先生だった。相変わらずのテンションでやる気なしだ。

三本ラインのジャージといつものタオルを首にかけてまったくの親父スタイル。昨日、お見合いに行った人とは思えない格好だ。

……こりゃ、失敗したな。

「水上、減点50点」

「だから、なんでだよっ！」

「お前、また私の悪口言っただろ？」

この人は、なんて勘がいいんだよ。

俺を睨んでいる目が全てを物語っている気がするが、余計な事を言つと減点されるから、口が裂けても失敗したんだとは言えない。

そして、きつと相手の人に「貴女とは……ちよつと」なんて言われたなんて口が裂けても言えない。

「なんで知ってるのよっ！ お前か、昨日私のお見合いを邪魔したのはっ」

「してないですって！」

「お前なんか、減点500万点だあ」

泣き喚きながら教室を出て行った聖先生の後姿は、なんとも哀愁

がありすぎて言葉に出来なかった。

「ああ……泣いちゃった」

俺のせいかな？ 俺のせいなのかよ！ そんな顔で俺を見るなよ、
功治。

そして、何故に皆して俺を見ているんだ？ 俺は何もしてないぞ。
本当に何もしてないじゃないか。

静まり返った教室に犬や猫の鳴き声が響いていく中――。

「今日も自習……」

目の前で子猫を撫でながら、呑気な珊瑚の声が聞こえた……。

第12話：やっぱり変わった学校だ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

さて、思いつきの脳内構成なので、どうやって終わらせようか必死に考えてます。

そのうち、山場もなくないつの間にか終わってるかも知れませんが（笑）

第13話：名前を決めまSHOW

そして本当に自習になっていた。

未だに”杉”先生三人衆は戻ってきていないらしい。一体「一身上の理由」ってなんだよ？

そしてこの学校は授業をする気があるのか？ 俺達は卒業出来るのか？ それ以前に進級出来るのか？

色々と疑問がありすぎて心配だ……。

「そして、またお前等がいるんだな」

「うん。だって、教室にいても暇だしねえ」

我がもの顔で椅子に座る琥珀と遠くから手を振っているこの席の持ち主。

なにかデジャ・ヴウを感じるのは気のせいかな？

「ま、また……自習なんだよ。ど、どうなってるのかな……」

「要するに暇なんですよ。亮先輩っ」

そして瑠璃はいつものように俺の後ろ。違うのは今日は美鶴も一緒に来ているのと言う事ぐらいか。

「ところで兄貴。その、へんちくりんなのは……何？」

「ん、こいつか？ 知らん」

「……知らんって。うわぁ……ふわふわだぁ」

白い物体は、突付いている琥珀の指に纏わりつくようにしてじやれている。

なんとも可愛らしい光景だが、琥珀がやると狩りをしているようだな。食われるなよ、白い物体。

「食べないわよ！ あたしを何だと思っているのよ」

「……雑食」

「うらっ、一辺死んでこいやっ！」

「あ、あぶねえなっ！」

鉄拳がこめかみを掠めて、風圧で髪の毛が数本千切れていた。なんてハードパンチャーだよ。

大体、兄を何だと思っているんだ。もう少し敬え。そして平伏せ。最後に言葉使いをどうにかしろ。

「わぁ……かわいい。ふかふかの真っ白だぁ」

「ほんとだねえ。どこに顔があるのかな？」

瑠璃と美鶴が白い物体を持って、上から下から見ているがどこに顔があるのか分からないようだ。

その前に、どこか上なのかも分からない。丸くてふわふわしている毛に覆われているので、どうやって歩いているのかもさっぱり分からない。しかし、白い物体とは言い難いものだ。名前を決めるか？ でも、名前を決めると言う事はこいつを飼うのと同じ語だ。

俺にこいつを飼えるのか心配だぞ。と言うか、こいつは動物なんだろうか？

「なぁ……亮」

「なんだ、て……まだくっ付けてるのかよ、功治」

のっそりと現われた功治の顔には、未だにモモンガかムササビか分からないものが張り付いていた。

すっきり、気に入られているようだな。

「いや、離れてくれないんだよ。困っているんだ、我が友よ」

「そうか、美鶴。琥珀も、手伝ってやれ」

「ええー、めんどい」

「私もこんなお兄ちゃんの為に動くのは嫌です」

即答で返されても俺が困る。琥珀は分かるが美鶴は一応兄貴だろ。少しは情というものがないのか？

しかしブツブツいいながらも美鶴は立ち上がって、功治の顔を掴んでいる。こめかみをグリグリするのは違うと思うが、やっぱり優しいところはあるようだ。

「ぎゃぁ！ い、いたい、痛いつ、み……みつる！ も、もう少し、優しくしてっ」

「ああもうつ。うるさいわね、少し静かにしてよ！ 爪が食い込んで離れないよっ」

「い、いだだだ！ りよ、りょうく、ヘルプミーツ！」

功治の悲鳴が聞こえているが、無視だ。頑張れ、美鶴。もっとやれ。とりあえず任せて、応援してるぞ。

「ところで、おにい……名前は決まった？」

「いや、まだ。しかし、こいつは一体何なんだ？」

「猫ちゃん。おみやるって鳴いてるし」

「……いや。そもそも、こんな猫見た事も聞いた事もないぞ」

白い物体は珊瑚の掌で遊あそんでいる。そして隣の琥珀の掌に飛び移って、続いて瑠璃の掌に遊んでいる。

飛ぶ事——飛ぶと言うより、跳ねるの方が近い——は出来るみたのだが、こいつは本当に何の動物なんだよ？

「名前、ワタゲのいたり」

「ええ、あたしはゴンザレス・ボンゴレアがいい」

「え、えっと……。わ、わたしは、まりもみたいだから、マモちゃん」

三人は次々と勝手につけた名前を発表しているが、珊瑚のワタゲのいたりってなんだよ。

”若気のいたり”って事か？ そんな過ちを犯しました的な名前につけるなよ。

琥珀のは却下だ。何がゴンザレスだ……プロレスラーかよ。瑠璃は、一番まともそうだがどうにも捻りがない。

普通過ぎて面白味に欠けている。もっと、なんて言うかインパクトが欲しいところだ。

「おにい、何かないの？」

「俺か……。そうだな、つけるとするなら「シロマロ」かな？」

「しろまる？ また変な名前をつけて……兄貴」

お前が言っな、琥珀。別に変な名前ではなく、立派に意味はある。白くてふわふわしてマシユマロみたいで「おみやる」って鳴き声

が「おじやる」って聞こえるから、「シロマロ」にしたんだ。

ちなみに漢字で書くと「白麻呂」。お前のゴンザレスよりは数百倍もマシだと思うぞ。

「シロマロ……うりうり」

「あはっ……。なんか喜んでるね。お姉ちゃん」

「そうみたい。この子は、気にいったみたい」

すでに勝手に名前を呼んでいる珊瑚と瑠璃。その手の中で嬉しそうに動き回る白い物体。

どうやら、この名前が気に入ったようで、喜びを表しているのだろう。まったく表情がないので分からないけど。

「じゃ、君の名前はシロマロ」

「そう言えば、こいつ……雄か？ 雌か？ そもそも、何の生き物だ？」

俺の言葉に皆が固まる。なんでそんなに固まるんだよ？ 俺、変な事言ってないだろう？

「今更、そんな事聞いてどうするの？」

「なんでだよ、琥珀」

「そんなもの、ご都合主義には関係ない事だよ」

「その一言で片付けるなよ……まったく」

つまりは追求すると言う事が。こいつの正体はなんだろうな？

「痛かったぞお……亮」

「お前は保健室へ行つて来い」

顔中引つかき傷だらけの功治は、泣きながら教室を出て行った。

「……なんだかね」

美鶴が手に持っていたモモンガかムササビか分からないものを離すと、嬉しそうに教室を旋回して飛び出して行った。

数秒後、廊下で聞いた事のある声が悲鳴を上げていたが無視。美鶴も呆れてため息を吐きながら椅子に座っている。

「余程、気に入られたようだな」

「みたいです。はあ……」

教室の中は未だに動物園状態ですごい事になっているが、この学校は一体どこへ向かおうとしているのだろうか。

桃姉さんの気分次第って事もあるのか？ やっぱり、すごく心配だ。

時間はいつの間にか、お昼まであと10分。

「お昼だす。御飯食べるにや」

「お前はいい加減、その頭の猫を下ろせよ」

珊瑚の頭には子猫が欠伸をしながら乗っていた。

すっかり珊瑚に懐いてくつろぎモードに突入している子猫は、目を細めて船をこいでいる。猫の寝ている姿って、どうしてこんなにも可愛いのだろうか。

そんな子猫を見ながら瑠璃は楽しそうに微笑んで身体を屈めたり伸ばしたりしてるので、すっかりスカートが乱れている。

なので瑠璃の後ろには、いつの間にもやらハイエナが群がっている。

「琥珀、美鶴……GO」

とりあえず琥珀と美鶴と放したから、そのうち静まるだろう。

「いいにや。クシマロも気に入ってるから、ほっとく」

「……クシマロ？」

「シロマロに對抗。ボクのは黒の縞斑があるから、クロシマブチ……それを略して、クシマロ」

別に名前を對抗しなくてもいいと思うが、珊瑚はすっかり気に入っている様子。

それにクシマロも気に入っているのか何も言わない。って言うか、こいつさっきから一回も鳴いてないぞ？

「そう言えば、こいつは鳴かないのか？」

「物静かな猫なんだよ。うりうり、にゃ」

珊瑚が子猫の頭を撫でると、眠そうに欠伸をしながら「もあゝ」
つて——「もあゝ」つてなんだよ！

「今のは、あくびだにゃ。さっきは、ちゃんと「みやおつす」つて
鳴いた」

「それもおかしいだろっ」

「だって、鳴いたもん。片手上げて「みやおつす」つて」

そんな俯き加減に「ボク嘘ついてないもん」視線を向けられても、
信じられないぞ？

「みやおつす」つてなんだよ。そんな鳴き声は聞いた事がないぞ。
「にゃお」か「みやお」なら分かる。

欠伸の「もあゝ」に至っては、すでに牛だ。

「そんな事より、お昼食ベにいく。シロマロ……こっち」

「え、おい……」

珊瑚がトップブリーダー並の声で指示をすると、俺の身体をする
すると登って頭の上にちょこんと乗っているシロマロ。

俺の髪の毛に丸いボンボンが生えたみたいだ。周りにいる連中は
俺を見て爆笑してやがる。

女子は何やら「可愛い」だの「面白い」だの言いながら、携帯を
構えて俺を撮ってるし——恥ずかしいからやめて、お願い！

「すっかりお気に入りだねえ。シロマロはお兄ちゃんが好きなんだ
ねえ」

「こいつに好かれてもねえ」

瑠璃にまで辱められてしまった。頭の上では「おみやる」つて鳴
いてるシロマロが、もそもそと動いてくすぐつたい。

「でも、可愛いよ？ お兄ちゃん」

「お前まで俺を辱めるのか」

なんで妹に可愛いなんて、言われなくてはいけないんだ。俺はかつ
こよくてダンディな男を目指しているんだ。

そんな事を言われて嬉しくなんかないぞ。でもモテるなら、ちょっとくらいは……。

「お腹すいたよお、兄貴っ」

「お昼、おごってくださいねえ。亮先輩っ」

すっかり忘れていたが、琥珀と美鶴はハイエナ退治が終わって寛いでいた。

山のように積まれた我がクラスメイトの男子達。いい加減に学習しようって頭を持ってないのか？

周りには、白い目をした女子しかいなんだから、お前等の印象を悪くしてるだけだって。

「じゃあ、行くか」

さて、今日は何を食べますかね……。

第14話：お昼は何を食べようか？

食堂は超満員――。

とりあえず、見渡す限り人だらけで座れそうないところがない。さすがに少し教室で無駄話がすぎたように出遅れてしまった。こうなると、誰かが終わるまで待つしかないか。

「どこも空いてないか……」

「……だね。先に食券だけでも買っておこうかな」

「あ、私も行くよお」

さっさと走っていつてしまった琥珀は、食券販売機の前で仁王立ちになっている。

その後ろで考え込んでいる美鶴も同じように仁王立ち。あの二人はなんであんなに堂々として威厳があるんだ？

「ボクは、きつねうどんがいいよ。おにい」

「……それは俺に買って来いと？」

珊瑚が無言で頷くと、頭の上で寝ているクシマロも一緒に動いている。

変な光景だと思うが、これが見慣れると意外と和めたりするのだから、不思議で仕方ない。

「それじゃ、私を買ってくるよ。お姉ちゃん」

「ならボクも行く。おにい、席をとっておいてにや」

そのままトコトコと歩いて行く瑠璃と珊瑚。販売機の前に四人並んで何やら雑談中。

結局、俺は何をしたらいいんだ？　と言うか、俺の御飯は誰が買ってくれるんだよ……。

席を取ってくれと言われても、どこにも空いてる席がない。さっきと同じ状況に、さすがの俺もため息しか出てこない。これ

で五人分の席を取るのは大変だぞ。

それに俺達は意外と目立つんだよね。あの四人って今更言つのもなんだが、男子達には結構な人気がある。

「ううゝむ、困ったぞ」

何が困ったかと言うと――席が無いのは今更なんだが、もっと困った事が出来た。

何故か、食券販売機の前に人だけが出来ていて賑わっていた。たぶん、あの四人が何かをしているんだろうと思うが、どうしたもののか。

助けに行くと俺が思いつきり睨まれるのは分かっているが、行かないと後から珊瑚に散々と文句を言われるから堪ったものじゃない。

「……ん？」

暫く熟考していると、不意に俺の肩を掴んでくる感触に振り返ると、そこには満面の笑みを浮かべた女子生徒と頬に刺さる指があった。

前にも同じような経験をした気がする。相手は違うけど……昨日だ。その後に大変な目にあっただけだな。

「何してるんのかなあ、亮くん」

「え、え……」

可愛く首を傾げているけど、とても顔が近いんですけど……。

「もっ……。ちよつとは反応してよお」

「あ、えつと……こんにちわ。鈴美先輩」

ぷつと頬を膨らませて俺を睨んでいるのは、鈴美先輩。フルネームをいちのみやすみ一之宮鈴美。

少しカールした毛先を持つ長い髪と、優しく丸みのある瞳。鼻と唇はその雰囲気合った優しさを醸し出す作りをしていて、スタイルも抜群。特に胸に関しては、桃姉さんとタメを張るくらいの大きさだ。くびれたウエストに大き過ぎないおしりも、その身体を美しく可憐に見せてヴィーナスを彷彿とさせるプロポーズをしている。

「亮くん、ちゃんと部活にこないとダメだよ? ……めっ」

「は、はい。最近、ちよつと忙しかったもので」

おっとりした口調と優しい笑みで俺の鼻頭を突いている鈴美先輩だが、周りからの視線がとても痛いです。

この先輩は、学校のマドンナ的存在の人。

それも半端なモテ方じゃなく、一日に数十人を一度にフツた事がある伝説を持っている人で、しかも告白した男子に「なんで私を呼んだの? あの手紙って何?」って聞いた事がある逸話すら持っている。

「そうなんだあ。それじゃ、しょうがないね」

気付けば、食堂にいる男子全員がこちらを見て睨んでいる。

中には俺を射殺せるぐらいの視線を向けている奴までいるが、俺は別に何もしてないだろが!

ただ、俺は鈴美先輩と話しているだけだつて。それにこの先輩に普通の行動を求めるのは大変な事なんだぞ。

この和み系天然パワーは瑠璃以上の戦闘力を持っているんだよ。

「ところで、亮くん……」

「な、なんですか?」

「その頭に乗っているのは……なあに?」

怖々と、俺の頭に手を差し出しては引っ込めている鈴美先輩は、ちよつと可愛かった。

頭からシロマロを下ろして鈴美先輩の掌に乗せてあげると、途端に砕けたような表情になり、

「かわいい、ふわふわだよあ。ねえねえ、亮くん……この子、どうしたの?」

「え、あ……朝、教室に行ったら動物園になってましたから、その中にいたみたいです」

「そう言えば、いっぱい犬や猫がいたねえ。なんでだろうねえ」

やっぱり、他の学年のクラスもあの状況だったんだ。これは間違はなく桃姉さんの仕業だろう。

それ以外は、考えるのも面倒なだけだが……。

「ふわふわのもこもこだよお」

嬉しそうに撫で廻している鈴美先輩の掌で、これまた嬉しそうに転げまわっているシロマロ。

鈴美先輩は簡単に言つと、可愛いものに目がない。と言うか、かなり盲目的になる傾向がある。そして、我が家族にも被害者がいたりするんだな。しかし、何故……お前はほんのりとピンク色に染まっているんだ？ このスケベ物体が。

「おにい、何気に何してる……うり」

「うごっ」

いきなり膝の裏を蹴られて、そのまま転んでしまった。

膝から崩れ落ちたので、皿が割れるかと思ったよ。そして、蹴る前に聞こえた声は”奴”だ。

何をするんだと叫ぼうと後ろを向くと、膨れっ面のフグが二匹と鋭い目の虎が二頭——なんだか、前に見た風景だが今日は一人多いぞ。

「スケベ面してた。まったく、目を離すとすぐにこれ。大体——へにや、す、すすす」

「お、おおお、おにいちゃん……も、もしよかったら、わわたしが……あの、その」

何やらブツブツ言っていた珊瑚だったが、口をあんぐりと開けて目を見開いたまま固まってしまった。

……見事なフリーズ技だな、珊瑚。

こいつがこの表情をするのは非常にレアであるが、天敵がいるのだから仕方ないか。

もう一匹のフグ——瑠璃は上目遣いに俺を見て、妖しげな事を呟いては顔を真っ赤にして俯いている。

俺に一体、何をしようとしているんだよ。

「あんなにデレデレしちゃってさあ」

「私のお兄ちゃんと同じですね」

虎コンビは、その目で俺を殺すのかと思うほどの殺気の籠った視線で睨みつけてくる。

その目はとても女の子がする目じゃない。と言う前に、人間の目でもない気がするがそんな事言ったら間違いなく連続コンボである世行きだ。

「あらあ、珊瑚ちゃん」

「うにい、す……すずみちゃん」

驚いて反応が遅れた珊瑚を抱き締めて、身体中を撫で回している鈴美先輩。

胸にすっぽりと収まっている珊瑚の顔は少し苦しそうだが、俺的にはちよつと羨ましい光景ではある。

「いつ見ても可愛いわねえ。珊瑚ちゃんは……」

「はう……。お、おにい、たすけて」

まるで猫を可愛がるように撫でまわす鈴美先輩の手は、いつの間にか制服の中まで入り込んでいた。

めくれ上がる制服の裾から覗く白い肌にちよつとドキツとしたが、何をしているのかさっぱり分からない。

しかし鈴美先輩は大変に大満足な顔をして、逆に珊瑚は逃げたくてたまらないような顔をしていた。

この世界で唯一、珊瑚が苦手とする人——それが、この鈴美先輩なのだ。でも、この光景はなんとも淫靡で魅惑的な世界を思わせる。

「逃げちゃダメよお、もつとお……」

「あう。そ、そこはダメなの……す、すずみちゃん」

すっかり、酔っ払ったような表情の鈴美先輩。この人にとって、

珊瑚はマタビなのかも知れない。

あのおっとり和み系が、今では妖艶で色気たっぷりの危ない人になって上がっている。そして、それを見ている男子共は前屈みでこちらを顔を赤くして見ている訳だ。お前等……どこでも発情してるんじゃないよ。

「亮くうん……珊瑚ちゃん、ちようだい」

「あの、珊瑚は物じゃないんで……。ちょっと、あげれません」

鈴美先輩の胸でもがき苦しんでいる珊瑚を摘み上げて助けると、恨めしそうに俺を見る先輩。

そんな顔をしないでくださいよ。俺だって意地悪している訳ではないんですよ？ 珊瑚はこれでも大事な家族なんです。

「ああ……。亮くんのいけずう」

「たすかったにいい。でも、おにい……。助けるの遅い」

途端に周りからはブーイングの嵐。座布団が飛んで色んなものが散乱している。

ここは、寄席の会場かつ！

「邪魔するなあ！ 役立たず兄貴っ」

「そうだ、俺達にも見る権利はあるんだぞっ」

「いつもお前ばかり、いい思いしやがって羨ましいぞっ」

エキストラが台詞を喋るな！ 先輩も後輩も関係ないぞ。あまりに増えると、こっちも大変なんだよ。

色々と処理する身にもなれって言うんだ。ただでさえ自由奔放な奴等ばかりで、俺がどれだけ苦労していると思っているんだ。

「どけ、邪魔だぞ！ ギマイスキー」

「珊瑚ちゃあんっ！ 鈴美ちゃあん、もっと見せてえ」

「思い切って、脱いじゃえよお」

いつの間にか、食堂はストリップショーの小屋になっている。なんてガラの悪い奴等だ。

大体、サングラスかけたパーマって設定が古いぞ、先輩方。それと誰だ？ イモウトスキーとギマイスターを混ぜて言った奴は！

お前等、そんなに女の子同士がいいのか。だったら、見せてやるよ。お望みのものを――。

「琥珀、美鶴……。お前等、少し遊んでやれ。手加減なしでいいぞ」

「ええ、面倒だよ」

「そうですよ。今からお昼なのに」

「今度、カロラティの極上特製パフェDXおごる」

一瞬にして目を光らせた二人が、その身を翻ひるがえして宙を飛んでいた。今から始まる事に期待しているのか、男共のまたしても大騒ぎである。

「せあつ」

「とうつ」

究極の世界を堪能しやがれ、野郎共。あっちこっちから聞こえる歓声とは違う断末魔の叫び。

内容に関して、自主規制でお願いします。さすがに御飯時にはちよつときつい内容なので、そこは配慮してます。

ちよつと違う世界かも知れないが、女の子同士って事で、これもありだろう。いや、それにしてもすっかり静かになって席も空いた。

「それじゃ、俺も飯を買って——」

屍が転がる中を歩いている俺の耳に、昼休みの終了を告げるチャイムが無常にも聞こえてきた……。

第15話：俺、何をしてるんだ？（前書き）

ちよつと長いです。

第15話：俺、何をしてるんだ？

午後の授業と言うのは、睡魔との戦いである。

かの有名な心理学者もこう言ったと本に載っていると、いないとか……。

さて、本来なら睡魔に襲われて今は夢の中にいるのだが、如何せん腹が減ってそれどころではない。

鳴り響く腹の音が余計に空腹感を煽っていく。

「腹、減った……」

お腹を擦りながらばやいても、誰も返事なんてしてくれない。返事するのは、俺の腹だけ。うるさいから少し黙ってる。

「おにい、うるさい」

「そんな事言うなよ。腹減って死にそうなんだぞ」

隣で呆れ顔の我が妹は、未だに頭の上に猫を乗せている。

すっかり身体の一部となっているのか、微動だにしない猫。たまに器用に前足でおしりを掻^かいているが、本当にこいつは猫かよ。

「それにしても寒い。そして、先生がこないのは何故だ？」

「ここでするって言った。だから、着替えたの」

寒いのは、ここがグラウンドだから。今から体育の授業なのだが、肝心の先生がこない。

誰だ——初めて授業らしい事やってるなんて言ってるのは……。俺もびっくりしてるんだから、それ以上ツツコミなしでお願いします。

「足が寒い。おにい、暖めて……」

「どうやってだよ」

そして、体育と言えば体操着。

男子は上下ジャージなのに対して、なぜか女子は上だけジャージで下はブルマなのだ。

これって、完全な趣味の世界に入っていると思うは俺だけか？

寒そうに足を擦り合わせる仕草は、萌え心をくすぐってカメラ小僧達の本領を発揮させる。さっきから至るところからフラッシュが光る。その度に男共の歓喜の踊りと声が聞こえ、その後に断末魔の叫びがグラウンドに響き渡る。このクラス的女子って意外と強いな。しかし——女子達のジャージの裾からチラチラと見える魅惑のデルタゾーンは、確かに興奮ものだ。

チラリズムを極めた人が、堪能できる究極の美。なんてアホな事を考えていると、俺もクラスの女子に殺される。

「おにい、目がえっち。……ボクに興奮してる？」

「なっ、し……してないぞ」

「……妖しい。ちらちら、ほれほれ」

「ぶっ！ 何してんだよ、珊瑚っ」

何を血迷ったか、ジャージの裾を持ち上げてチラチラとブルマを全開に見せている珊瑚。

顔が赤く染まって恥ずかしそうにしているが、そんなに恥ずかしいならするな。

大体、普通に見ても面白味がない。チラリズムと言うのは見えるか見えないか、その微妙でもどかしく歯痒い感じが最高に興奮するんだよ。だから、そんなにおおぴっらに見せられても——おっと、俺とした事が語り過ぎた。

「し、しかし、先生遅いなあ。授業始まつてるぞ」

「おにい、誤魔化した。もしかして、興奮した？」

下から覗き込む珊瑚の顔は、不満そうに膨れていた。

お前は一体、何を期待しているんだ？ そして、そんなに近づくな。意外と立派なものが二つ当たってるんだよ。

「なんて羨ましい事をしているんだっ！ ギマイスター 亮っ」

「どこから、現われた……ボンクラ功治」

顔に包帯を巻いたミイラ男もどきが、ポーズを決めている。顔は分からないが長年の付き合いなので、声だけで分かる。

しかし、保健医のおばちゃんも治療が雑だな……包帯巻き過ぎだ
って、これ。

口までしっかりと塞がれているのに、普通に喋る功治がすごいな。
「ふごふごおお……もほおへら」

「……アホか、お前」

いきなり喋れない真似なんてするな。さっき普通に喋って、俺に
文句言っていただろうが。

「いや、つい口が塞がっている事を忘れて喋ってしまった。失礼つ
スチャッと手を上げている功治は、にこやかに微笑んだ。……よ
うな気がした。

「なんか、ムカツク。ところで、先生見なかったか？ 功治」

「おつ……！ そう言えば、さっき体育教師のU氏から”極秘機密
見ちゃ駄目密書”を預かったのだ」

「誰だよ、U氏って……。お前もどこに入れてんだよ」

頭に巻かれた包帯の隙間から何やら取り出して、手渡してくる功
治。

そこには、筆ペンで『秘密の密書』と書かれていた。気持が悪い
ノリだな……。だが、とりあえず中身を確認。

ロクな事を書いてないのはもらった時点で分かるが、読まないと
内容なんて分からない。もしかしたら本当に何かの極秘指令かも知
れない。いや、体育の授業に極意指令も何もあったもんじゃないと
ツツコミが聞こえてきそうだが無視。しかし、書かれていたのはた
った一言。

「は？ ……実習？」

驚く俺の手元を覗き込む功治も、
「何……自習ではなく、実習か？」

頭の上にクエスチョンマークを点滅させて唸っていた。

実習ってなんだよ？ サバイバル訓練でもしろって言うのか？
そんな装備なんてどこにもないので、結局この授業も自習なんだろ
うな。

さて、この密書をクラス委員長に渡してこよう。俺が持っていないのも仕方ないので――。

俺が手渡した密書を読みながら、眉間に怒りマークが浮かび上がっている委員長。

普段は大人しいが、怒ると手がつけられない危ない奴である。

「な、なんなのよ！ これはっ」

「俺に怒られてもするかよ」

「そ、そうね……。亮君に怒ってもしょうがないわね」

我に返って恥ずかしそうに俯く委員長だが、お前は男だ。それから、そのお姉言葉をどうにかしろ。

「仕方ないわね。なんでもいいから、するか？」

「なんでもいいって、無茶苦茶だな……。お前」

「きやつ、お前だなんて――。それじゃ、鬼ごっこでいいか？ よし、決定。やれ、決定っ」

「気色悪いし、すでに決まってるし……」

おかま口調に”地”が混ざっているぞ、委員長。

決断の早さはクラスで一番。だから委員長に任命されたのだが、たまにこうやって暴走すると誰も止められない。

こうやって暴走して皆を巻き込んでいくが、今更氣にしても意味がないのでほっておこう。

それにしても、我がクラスはまともな奴が本当に一人もいないよな……。

「それじゃ、行くわよお」

委員長の一言で、体育の授業は鬼ごっこへと変更になりました。

「なんで、お前等まで一緒のところに隠れるんだよ」

「ボクはおにいのそばがいいの。邪魔だぞ……。ボンクラ兄、ちっ」
狭い。そして暑苦しい。

冬でも閉所にこもっていれば人間の体温で室内温度が上昇し、息苦しくさを感じるものだ。

ここはグラウンドの隅に設置された体育倉庫の横にある小屋で、その室内には何故かガスボンベがあるが、どこにも繋がっていない。一体、なんの為に存在するのか分からない小屋だな。

「そんな事言っなよお。冷たい兄妹だな。しかも、さんごっち……舌打ちしたよお」

小声でいじけている功治だが、この暑い中ではうっとうしさが倍増している。そして、薬品臭い。

原因は――功治の包帯。

こいつの頭に大量に巻かれた包帯から保健室がそのまま出前してきている匂いがする。

なんとも薬品に酔ったような感じがして気持ち悪い。それに、微かだが薬品とは違う匂いがするんが、何の匂いなんだよ？

「だあ！ お前、臭いだよっ」

お前が動くとき更に匂いが拡散するから動くのをやめろ、功治！ それにしても、なんの匂いなんだよ……これって。

「臭いから出て行け、ボンクラ兄」

「ひどっ！ この包帯は桃子さん特製らしいから、文句はあの人にうごっ」

功治を外に蹴り出して、新鮮な空気を胸いっぱいに取り込む。

隣で同じように深呼吸している珊瑚がいるが、息を吸い込む度に上下する胸について視線がいつてしまう。

なんで俺は、妹に見惚れているんだよ。

「ふう……。死ぬかと思った」

「ほんと。では、移動しないと見つかるよ、おにい」

「ああ、そうだな」

先を歩き出した珊瑚の後ろをついて俺も歩く。

珊瑚の頭に乗った猫の尻尾がダラリと垂れて、歩くスピードに合わせて右へ左へと揺れている。

そして珊瑚の後姿がなんとも可愛い。なんで俺はこんな事を考えているんだ？ 猫の魔力か？

それとも、まだ薬品に酔っているのか……俺。

「……おにい」

不意に立ち止まり俺の方へと振り返る珊瑚の顔は、寒さのせいなのかほんのりと頬が赤くなっている。

柔らかい笑みを浮かべている珊瑚を、今——可愛いと思っている。俺はどこかおかしいのか？

「な、なんだよ」

「なんか、ボク……変だよ」

そのまま、身体を預けてくる珊瑚が、俺の胸に顔を埋めている。胸の中でこぼれる熱い吐息が、俺の耳に届く。

苦しそうな、それでいて悶えているような色気のある吐息。だから俺は何を考えているだよ。

「だ、大丈夫か？ どこか具合でも悪いのか？」

首だけを横に振っている珊瑚は、更に力強く腰に手を廻して抱きついてきた。

いつもと違う珊瑚の様子に戸惑ってしまうが、俺の感じている気持ちにも困ってしまう。だから、これは何なんだよ……。

俺は珊瑚に何を求めているんだよ——。

「おにい、身体が熱いの。苦しいの……」

熱っぽい視線を向けて俺を見上げる珊瑚は、俺の腰に廻していた手を首に持ってきていた。

酷く荒い息使いに、俺の心臓は激しく狂ったように鼓動を繰り返している。

静まれ……俺の心臓。落ち着けよ……俺の感情。

「お、おい……さ、さん……」

潤んでいる瞳は俺を待っている。これは夢か？ 俺は何をしているんだ？

そんな俺の考えをよそに、珊瑚はゆつくりと瞳を閉じていく。
これって——もしかしくなくてもアレだよな？　これはアレだね。
って、ちよっと待て！

「おにい……して」

その声に、俺の中で何かが切れた。

高揚した気持ち、俺を勝手に動かしている。俺は過ちを犯そう
としているのか？　俺は何をしようとしているんだ？

気付けば、俺の視界も真っ暗。俺……いつの間にか目を瞑ってる。
やる気満々ではないか。ダメだ、思考すらまともに廻ってない。

最早、俺はケダモノに——。

「うらっ！」

「ううっ」

後頭部に走る衝撃に、俺の身体は思いっきり飛んでいた。

何が起こったんだ？　今の衝撃は何だったんだ？　——なんて考
える間もなく地面に背中から叩き付けられていた。

全身を走り抜けていく衝撃に身体が悲鳴をあげて、大合唱をして
いる。

「ぐあっ、ってえ……」

「何してんだよ！　兄貴っ」

「お、おにいちゃん……だ、だいじょうぶ」

俺を見下ろす二つの影。

顔は逆光で見えないが、俺をこう呼ぶのは二人しかない。それ
にして、これは絶景だな。

中々際どいものを穿いてるではないか。ピンクのレース地に白い
肌が眩しいぞ、瑠璃。そして、ブルーのハイレグ——俺の例え古い
？　——の琥珀もナイスだぞ。

「いきなり、何すんだよっ」

「い、今！……お、お姉ちゃんに……キ、キキキ」

何を焦っているのか顔を真っ赤にして話す琥珀が、拳を握りしめて俺を睨む。いつでも臨戦体勢だな……こいつ。

まったく、今の衝撃はお前の蹴りか拳か知らないが、もう少し手加減してくれよ。珊瑚まで巻き込んだら——あれ？

「……って、あれ？ 珊瑚は」

「おにい、くるしいの」

「うおっ」

俺の上で丸まっている珊瑚は、立ち上がろうと必死にもがいているが立ち上がる事が出来ない。

それもそのはず——俺が抱きしめているから、絶対に立ち上がる事は出来ないのだ。それにしても、この騒ぎでも頭に乗ったままのクシマ口はすごい。しかも、この状態でも寝てる根性はかなりの大物の予感がする。

「おう、すまん。大丈夫か、珊瑚？」

「う、うん。でも、痛い。琥珀ちゃん、酷い」

「あ……ご、ごめんね、お姉ちゃん。でも、お兄ちゃんが、変な事——あっ」

「お兄ちゃん……？」

珊瑚が不思議そうな顔をして琥珀を見ているが、琥珀の方はすでにパニック状態で、おかしなダンスを踊っている。

「ち、ちちち、ちがうって！ あ、その……言葉のアヤって事でっ」

「お、おちおちついて……こ、こはくやん」

「お前が落ち着けて！ だから服を脱ぐな、瑠璃！」

真っ赤な顔をして力二のような見事な横歩きをしている琥珀と、勝手にパニックになっている瑠璃も横歩き。

二人揃ってやると、おかしくて笑ってしまうから止めてくれ。

微妙におかしな語尾をしている瑠璃は一気に服を脱ぎ始めたので、それを止めるのにかなりの精神を消費した。

チラチラと見えていたピンクの下着が、俺の精神を疲労させた主

な原因だが……。

「まあ、そんな事は置いて……。ボク、何してたの？」

「は……？ お前、覚えてないのかよ？」

首を捻りながら唸っている珊瑚が、不思議そうに俺に聞いて来る。だが、俺も分からないので答えられるはずがない。

そう言えば功治が、あの包帯は桃姉さん特製って言ってたけど、もしかして何かあるのか？

いや、もしかしくなくても——あの人の”もの”なら何があっても不思議はない。

「うい。あの小屋を出てから少しだけ、記憶あるけど……。その先、覚えてないの」

珊瑚の様子がおかしくなり、それから俺も段々とおかしな気持ちになってきて、そして珊瑚と——で、ところで後ろから琥珀に襲われて倒れたんだ。

そう言えば、おかしいぞ……。なんで俺がこいつに襲われるんだ？ 「なんでお前達が、”ここ”にいるんだよ？」

こいつ等に聞きたい事がある。まだ授業中だよな？ そんなに都合よく自習が続くはずもない。

きつと授業をサボってグラウンドまで来ているのだろうけど、何しているんだって話だ。

「えつと……。その、あの……。お、おお、おにいちゃんが、おねえちゃんを、おか、おかそう……と」

「誰もそんな事してないだろうが！」

俺はお前をそんな子に育てた覚えはないぞ、瑠璃。俺がそんな事をする訳が……。ないじゃないか。

ちよつと間があったのは、シャレだ。細かい事には気にするな、みな衆。

「シャレですむか、馬鹿兄貴！」

「すませろや！ 大体、お前等がいるんだよっ」

「あたし達がここにいたって問題は無いのっ」

それって、ご都合主義って奴か？ 俺の脳内会話が筒抜けなもの、ご都合主義なのか！

「と言う訳で、もう一発殴らせろ！」

「なんで、そうなるんだよっ」

「あたしの怒りが収まらないからよっ」

だから、お前の頭はどうしてそう言う結論に達するんだ。この単細胞娘が！

追い掛け回してくる琥珀から逃げ回る俺の耳に、

「それで、ボク……何してたの？」

考え込んでいた珊瑚の声が聞こえた。

だから、それは俺が一番知りたいんだって……。

第16話：皆楽しく仲良くいこう（前書き）

タイトルとほとんど内容は関係ないような…（笑）

第16話：皆楽しく仲良くいこう

——みんな、元気かいっ！

今日は、みんなが大好物の妹達をどうやって料理していくかを教えるぞ。

それでは、れつつらごおだっ！

「……アホだ」

テレビに向かって、ため息を吐きつつばやく。

俺も何が楽しくて、こんな番組を見てるんだか。ちなみに冒頭の部分は俺が考えていた事ではなく、テレビの台詞をそのまま脳内で変換しただけだ。たまたまチャンネルを変えたら、こんな番組がやっていた訳なのだが——。

『おうっ！ それは違うぞ、マイシスター。それは、萌えというもぅござあっ』

『うるさいよ、変態！ 黙って、ピーピーしてなっ』

ブラウン管の中ではマッチョなお兄さん役のマイケルが、妹の役をしているキャンベルをあの手この手でモノにしようとしているが、たこ殴りにされたり変な料理を食べさせられたりと、玉碎されていく様を描いたホームドラマ風になっている。しかも妹は相当口が悪いのか、放送禁止用語を連発している。後半なんて、ピー音だけで何を言っているのかさっぱり分からなかった。

どうやら妹萌えドラマというのはこれで終わりらしい。今度はラジオブースを思わせるセットに変わり、さっきのマイケルがタキシードを着て出来てきた。

『ヘイッ！ テレビの前で悶えているお兄ちゃん諸君。おはがきのコーナーだぞ！ では、早速一枚目……』

どこを指しているのか、にこやかに挑戦的な視線を向けるマイケ

ル。ニヒルに笑っているつもりだろうが、気持ち悪いだけだ。

『俺の憎たらしい友達には義妹が三人もいる。そんな羨ましい環境なのに、何一つしないとは兄として最低だ!』

どこかで聞いた事のある家族構成に、親近感が沸いてくる。義妹が三人つて言うのも中々珍しいと思うが、はがきの内容は無茶苦茶だぞ。

兄として言うより、妹に何かしたらまずいだろ。そんな犯罪犯す奴はいないだろう。

『少しは俺にも分けやがれ! お前だけが、いい思いしてんじゃねえぞ。ギマイスター亮!』

「ぶっ!」

感情が高ぶり、はがきを握り潰しているマイケルが、カメラに向かって吼えている。

『おうっ、なんだ! このヘタレなお兄ちゃんは——。そんな事ではいけないぞ、ギマイスター亮っ』

なんだって、その名前が出てくるんだよ! と言うか、恥ずかしいからそんなに名前を連呼するな、マイケル!

『おっと、失礼……と言う葉書を述べ100通ほど頂いております。いやあ、人気者ですな……この水上亮さんって方は』

百通? そんなに誰が送っているんだよ! ……て、本名をさっくりバラすな、マイケル!

『ほほほっ……私も欲しいぞ! 是非、ご連絡をくださいマセマセ。ギマイスターリョウサマ』

「ぶっ」

今まで流暢な日本語を話していたマイケルが、いきなり片言になり、

『ワタシモ、ギマイホシイデス。ホシイデースッ! ギマイハ、セカイノタカラデース!』

ブラウン管の中で大絶叫して、着ている服を全て破り捨てたマイケルはカメラに向かって突進していった。

——もちろん、全裸である。

即座に「暫くお待ちください」と、向日葵の映像が流れ始めた。これって生放送だったんだ……すごいTV局だな。

「アホだ……」

「お兄ちゃん、テレビ見終わった？」

後ろから聞こえてくる声に振り返ると、パジャマ姿の瑠璃が立っていた。

髪の毛をタオルで乾かしているが、瑠璃の髪は家族で一番長い。下ろすと腰までしつかりある髪を一生懸命タオルで乾かしているが、ドライヤーでやった方が絶対に早いと思うぞ。

「お風呂どうぞ。あ……少し温いから、沸かして入ってね」

「……へいへい」

そのまま瑠璃はキッチンへと歩いて行き、冷蔵庫を開けて牛乳を取り出してコップへ注いでいる。

珊瑚もだが瑠璃も牛乳をよく飲んでいる。それで”一部分”が成長しているのだろうか。

しかし腰に手を当てて飲むなよ。親父臭いぞ……瑠璃。

では、俺は風呂へ行きますかね――。

瑠璃の言う通り、温くなっていた風呂を沸かして湯加減を確認。絶妙な温度になったところで、湯船にダイブ！

「はあ……。極楽、極楽」

俺も親父だな。なんだか、無性に悲しい気持ちになってくるが、気にしない。

今日も色々とあつて疲れたが、特に珊瑚には参った。

授業が終わった後、功治を捕まえて頭に巻いている包帯について聞いたら、桃姉さんが保健室に置いていた私物らしいので、詳しい

事は分らないと言われたので、当の本人に聞きに言ったらあつさりと教えてくれた。

——惚れ薬を塗りこんだ特注品の包帯。

誰に使うつもりだったのか確認したかったが、俺を見る目が血走ってとても怖かったので考えるのをやめた。

あの目は獲物を狙う鷹の目だったよ。

「何をする気だったのか……桃姉さんは」

ため息を吐いて湯船に沈み込む。

それにしても、桃姉さんが帰ってきてから随分と賑やかになったものだ。

賑やかなのはいい事だが、色んな事があつて疲れる事の方が多い。俺の場合は、気苦労だらうけど……。

「亮ちゃあん！」

突然聞こえて来た声と同時に、勢いよく浴室の扉を開けて飛び込んできた物体。

「うぐっ」

「きゃほお、りよおちゃあーんっ」

アホみたいな奇声を上げて、俺の首に纏わりついている物体は柔らかい。

マシユマロのような柔かさでメロンのような大きさのモノが二つ。

それがぶにぶにと、顔に当たって気持ちいい。

ここはパラダイスですか？ なんて極楽——じゃなくてっ！

「何をしてんだよ！ 桃姉さんっ」

「え……？ 何って、亮ちゃんと一緒にお風呂に入ってるのよ」

艶かしい表情をして首に絡みつく桃姉さんの腕に逆らえず、視線を下げると目の前には立派な谷間がこんにちわしている。

ちよっと待て……今、俺はお風呂に入っている。つまりは裸だ。そうになると、必然的に桃姉さんも——。

「亮ちゃん、目がえっちだよ。そんなに見たいなら、ほらっ」

「え、ちょ、うわ！ 立ち上がらな——あ、あれ……？」

勢いよく俺から離れて立ち上がる桃姉さんは、悪戯っ子のような笑みを浮かべて立っている。

湯気でよく見えないが、無駄な肉を一切省いたようなスタイルのよい身体が目の前にあるのは、ある意味拷問に近い。これで見ると言われても、目に入ってくる訳で——でも、目を瞑るのはもったいなくて……俺、どうしたらいい？

「ちゃんと、水着を着けてるわよお。……肌色だけどね」

「な、なんだ……裸じゃなかったのか」

一見すると真っ裸。しかし、確かに腰のところには紐らしきものが見える。

しかし、かなり際どいラインの水着なんですが……。

「すごい水着……じゃなくて、なんでここにいるのっ」

「ん？ 遊びに来たのよん」

「遊びにつて……桃姉さん、今が何時か知ってる？」

頭の痛い事を平然と言っている桃姉さんは、必死に考えているが分からないようだ。

——時刻は午後十時過ぎ。

こんな時間に遊びに来る奴は、まずいないだろう。

「まあ、いいじゃん。それより、一緒にお風呂入っていい？」

「いや、すでに入ってるし……」

湯船に浸かり、ピンク色をした頬が妙に色っぽい桃姉さんは、俺を見て微笑んでいる。と言うか、上^{のほ}せてきた。

色んな意味で全身に血が駆け巡っている。男の本能が全開で、あ一部にも堪っているのは内緒である。

「そうだ……亮ちゃん。背中流してあげるから、出ておいで——ほらほら」

「え、いや……いい！ て、言うか今は無理っ」

そんな格好を目の前で見せられて、平気な男子がいたら俺が成敗してやる。

タオルを泡だらけにして微笑む桃姉さんに、俺の妄想が危ない境界線を一気に飛び越えそうな勢いで頭の中を駆け回る。

「何……やってるのかな？ 兄貴」

「ひゃう」

悪魔の声が聞こえてくる。そつとそちらを見ると、浴室の扉を開け放って悪魔がこちらを睨んでいた。

湯船が凍りつきそうなくらいに冷たい声を出して俺を睨んでいるが、あまりの恐怖に心臓が止まりそうだ。

「ねえ……なんで、桃姉ちゃんがいるのか教えてよ。そして、風呂に一緒に入っているわけも」

とても低い声で琥珀が唸る。本物の悪魔も逃げ出しそうな迫力とは裏腹に、その顔は真っ赤に染まっている。

「ボクも知りたい。何、えつちな事してる……ゆるさない」

「お、おおお、おにいちゃん……あの、だ、だめだよ？ こ、こんなところじゃ」

珊瑚は呪いの言葉でも呟くようにブツブツ小声で唱え、瑠璃は自分の世界で妄想全開である。

そんな二人だが、琥珀と同じように顔は真っ赤。

「亮ちゃんと一緒にお風呂に入っていると楽しいよお。琥珀ちゃんもおいでえ」

「え、ひゃっ！ ちょ、ちよつと、桃姉ちゃひゃうっ！」

「ついでに、珊瑚ちゃんと瑠璃ちゃんもっ！」

一瞬の隙をつき、琥珀の手を引いて湯船にダイブさせると、珊瑚と瑠璃を次々と湯船に投げ込んでくる。

瑠璃と珊瑚に関しては、声を上げる間も無く見事に湯船の中。俺も声を上げる事を出来ないまま、事の成り行きを見守るしかなかった。

「ぶはっ！ なんでこんな事になるのよっ」

「あう……びしょびしょ」

「ええーん、さっき入ったばかりなのに」

三人が口々に愚痴をこぼしながら湯船から上がっていくが、ずぶ濡れで服が見事に透けて下着のラインが見えている。

恨みがましい視線を向けて、桃姉さんを見ている三人だが、

「みんなで、仲良く入ろうねえ」

呑気な桃姉さんの声を聞くと、俺を睨んできた。

俺も被害者なんだけど、って言っても聞いてくれそうもない雰囲気だ……。

第17話：ノリと勢いで実習二回目（前書き）

なんですか、こんな話に…（笑）

第17話：ノリと勢いで実習二回目

教室に入って驚いたのは、何故か皆が迷彩服を着て座っているのかって思ったからだ。

そして黒板には大きな文字で『本日、実習二回目』と書かれていた。

「実習ってなんだよ。自習じゃないのかよ？」

「違うみたい……ほら」

机の上に置かれている妙な袋を持ち上げて、珊瑚は首を傾げている。いや、俺も首を傾げたい気分だ。

大体、どうしてこの状況を素直に受け入れられるのか、我がクラスメイト達に教えて欲しい。

男子は迷彩服オンリーだが、女子は男子と同じ迷彩服のタンクトップタイプと白いナース服なのだが、どちらも何故か胸元が大きく開いている。女子の皆さんは立派なものをお持ちのようで、とても眼福ですよ。

視界の端で男子数人がモデルガン片手に怪しい笑みを浮かべているが、お前等……人生誤った事をするなよ？

「で……一体、なんで実習をしなくてはいけなんだ？」

「それはだな、水上。こう言うことだ」

立ち上がったのは、クラスメイトの誰だっけ？

そんな細かい事を気にする必要もないか。だって名前すら知らないのなら大した奴ではない。

それより早く話せよ。

「何気に酷い言われ方だな……俺は、清水だ。いいか、よく聞け。

これは、桃極楽王国の大事な……」

「これ、サバイバルセットって書かれているよ、おにい。すごい……銃も入ってる」

「なるほど……て、ここで着替えようとするな、珊瑚っ」

「聞けよ、人の話をっ！」

制服に手を掛ける珊瑚は、「何故」って顔をして俺を見ている。分らないお前が素晴らしく素敵だが……こちらを凝視している野獣さんが、教室内に沢山いるからに決まっているではないか。

そして俺の耳元で喚かないで欲しいぞ、泡吹き清水君。やつと思いき出した……一昨日に泡を吹いて倒れた奴だよ。だが、お前の出番は終わりだから、着席しろ。

「見て、おにい」

「ん？ ……早っ！ いつの間に着替えたんだよっ」

「ご都合主義。おにいも早く着替える。一緒に……」

一斉に音がしてこちらに向く銃口——で、そんな危ないモノをこっちに向けるな。そして、血走った目で俺を見るな。

「はあはあ、珊瑚ちゃん萌え」って誰が言ってたんだよ。

いつもはバラバラのくせに、なんでこんな時だけ一致団結が出来るんだって。しかも、それに火に脂を注ぐのが珊瑚の着ている服。

「可愛いぞ、珊瑚ちゃん」

「びゅちふおー、珊瑚ちゃあんっ」

「珊瑚ちゃんのメイド服を冥土の土産に、ぐふっ」

「しっかりしろ、渡辺！ 衛生兵、渡辺が幸せそうな鼻血を垂らしながら負傷したっ」

こいつ等がこんなにも萌えている珊瑚の着ている服は——メイド服。しかも迷彩柄。

どこでこんなものが売っているのか。俺は知りたい。一人だけ明らかに違いすぎないか？ そして何となくだが、この騒ぎの犯人が分かってきた。

遠くから眺めている男子共は口々に勝手な妄想ばかり言って、悶えている。鼻血垂らして倒れているのはクラスメイトZの渡辺。

幸せそうな鼻血ってどんなのだよ、て思うが……たった二回の登場で名前を覚えてしまったよ。

「おにい、早く……この服、すごい変」

「分かったから、引つ張るなって」

何を急いでいるのか知らないが俺を引つ張って連れ出そうとする珊瑚は、頻りに胸元やお尻を押さえているが、それがまた男共の煩惱を刺激しているようで、また渡辺が鼻血を噴いて倒れて大騒ぎになっている。だからお前等、うるさいって言うんだよ。しかし珊瑚はそんな事にはお構いなしにモジモジと動いて、ちよつと顔が赤いのは何故だ？

「俺も行くぞお、亮」

「キモイからくるな……ボンクラ兄」

「ぐう……。いつも思うが俺って扱い酷くない？」

それは最初から決まっていた事だ、功治。そういうキャラに成り下がったと言う事で、割り切って頑張ってくれ。

「はやくう、おにい」

珊瑚に引つ張られて教室を出て行こうとした俺達の耳に、あのアロハなチャイムが聞こえ、次いで呑気な聞き覚えのある声がスピーカー越しに聞こえてきた。

『みなさあん、園長の桃子です。着替えは済みましたかあ？ まあ、済んだと言う事で話を進めますねえ』

まったくこちらの意見など無視のマイペースぶりを発揮する桃姉さんは、マイク越しに何やらしている音が聞こえる。

でも、園長ってなんだ？ ここは動物園かよ。しかも、ご機嫌なのかマイクを通して聞こえてくるのは、桃姉さんの鼻歌。それよりも、この学校授業する気ないだろ？ 特に昨日からまったく授業らしいものをしてないぞ。そして、今日に至っては教室にすれば全員、変な格好して座っているし……この学校がどこに向かっているのだろうか。

『えっと、今から行つた実習は……私が体験した某陸軍特殊部隊の演

習を私がアレンジしたものでえす」

「なっ……そんなもん、出来るかつ」

『もう、文句言わないのお。そんな事言ってたら、亮ちゃん襲っちゃうよお。もちろん、私が、う、え、か、ら……いやんっ』

「いやんじゃねえよっ！」

だから、泣きながら睨みつけて俺に銃口を向けるな——クラスメイト達よ。

あの人の世迷言を真に受けていたら、絶対に身を滅ぼすからな。それが俺が子供の頃、学んだ事だ。

『それと、いちいち説明するの面倒だから、プリント配る事にしたから取りに来てねえ』

「やる気があるのかないのか……どっちだよ」

『亮ちゃんとなら、やる気満々120%よ——きゃっ。頑張って行こうねえ』

「何をだよっ！ て……また、どこかに隠しマイクあるな」

お願いだからそれ以上変な事を言わないでくれよ。今、男子全員が血の涙を流しながら俺を睨んでいるんだから……。しかも目の前には、お子様ギャングばりにモデルガンを構えた珊瑚が、俺のこめかみに銃口をグリグリと当てて唸っている。

『それと、これはこの前やったアンケートも関係してますからねえ』

「はあ……。まったく、意味が分からん」

『この実習では、あなた達のアンケートから抽出したデータを元に、色々仕掛けがありますから大いにハッピーで、ラッキーな体験をしてね』

「うわあ、なんだか嫌な予感……」

妖しげな笑いが聞こえるスピーカーを、誰もが引きつった顔で見つめていた。

あなたは本当に何がしたいんですか？

『それでは、実習スタート。みんなあ頑張ってねえ。ちゅっ』

男子共の煩惱の雄叫びを合図に、理解不能な実習が始まってしまった――。

「……一体何すればいいんだ？」

「それをボクに聞かれて困るってもんだよ、おにい」

教室の一角に座り込んでいる俺達。円陣を組んで座っているのは、いつものメンバー。

俺の横には珊瑚、その隣に瑠璃と琥珀。更に美鶴と功治の順番で座っている。そして今は、作戦会議と言う名の雑談会を実施中。

まったく理解できないこの状況に周りからは悲鳴と怒声が響いている。よくやる連中だ。

「それにしても……なんでお前達四人だけ、服が違うんだよ？」

「そ、そそそ、それは私が知りたいよお、お兄ちゃん」

「あ、あたしだって……恥ずかしいんだから」

俺を見る目がなんと妖艶な双子の表情。

身体を自分で抱き締めるポーズは、妹でなければ劣情に流されそうだ。しかし、どうして桃姉さんはこんな冗談が好きなのか？

「すけすけのむちむち……おにい、興奮する？」

「それはもう……って、何言わせんだよっ」

「お、おおお、おにいちゃんのえっち」

「あ、あにき！ あんまりこっち見るなよ。恥ずかしいんだから」

さっきまであんなに恥ずかしそうにしていた珊瑚だが、今ではノリノリで俺の前に身を乗り出してくる始末。

大体そんなに恥ずかしいのなら、その服を着なければいいではないか。

かなり薄い素材に迷彩柄をプリントしただけのメイド服を着ているんだから、見るなと言われて目が行ってしまう。

見えそうで見えないチラリズムを十分に理解したような柄の配置

には、ただ感服いたします。

特に胸元のラインなんて最高にグツジョブ！

「お前は、戦うメイドさんだな……美鶴」

「うるさいわね、お兄ちゃん。……シメるわよ」

「いえ、すいません」

妹に思いっきり頭を下げる兄。

機関銃を功治の頭に突きつける美鶴もすごいけど、間髪いれずに土下座する功治もすごい。

美鶴が着ているのはシックな普通のメイド服。やっぱりこいつも桃姉さんに遊ばれているんだ。しかし逆に言うと、一番恥ずかしいのは美鶴かも知れない。周りは迷彩だらけで、その中では異彩を放っているのだから。メイド服と機関銃……なんか、昔の映画をパロったようなものを思い描いてしまった。ちよつと、見てみたいかもだが、この功治と美鶴の光景はなんと滑稽で寂しい図だな。同じ妹を持つ身としては、なんか悲しくて涙が出てきそうだ。

「さっぱり、目的が分からん」

「フムフム……分かりましたぞ、おにい隊長」

「何が……って、お前に何してんだよ」

どこから出したのか、妖しげなヘッドフォンみたいなのを片耳に当てて頷いている珊瑚。

……何をしているんだ、お前は。それから、そんな機械をどこで見つけた？

よくドラマとかで無線傍受に使う妖しげな機械を目の前に置いてチューニングしているが、お前がそれを使えると知らなかった。

なんでそんなものがこの学校にあるんだよ。

「現在、逃亡犯は国道108号線を北上中……。至急、現場近くにいる全車両は応援求む？」

「それは、本物の警察無線だっ」

「おかしい。桃ちゃんの無線に合わせたのに……まさか、ジャミング？」

「知らねえよ。まったく、それでどうするんだ？」

目の前に広げた校内の見取り図。これに書かれている内容は、アホのような内容だった。

この実習とは、簡単に言えば体育とレクリエーションの合作のよなもので、モデルガンを使ったサバイバルゲームを行うのがメインになっている。ルールもかなり本格的で徹底しているところは、さすがは遊びに関しては一切の手抜き無しの桃姉さんと言っべきか。

1、一チームは最大十人まで。全員、通信用インカム・ゴーグル着用。司令官の指示は絶対遂行。

2、各自着用しているサバイバルスーツには、小型震動センサーを内蔵。

ペイント弾で撃たれると衝撃をセンサーが感知して震動する。その度に、胸に表示しているライフポイントは減少。0になると失格。

3、モデルガン及びペイント弾は配布された物だけを使用。それ以外の使用は禁止。違反者は即時、失格。

4、銃火器・武器は、脱落者からの略奪を禁止する。違反者は、即時に罰則を与え失格とする。

5、ペイント弾は初期配布の100弾のみ。それ以上の補給は無し。ただし、脱落者から略奪・譲渡は有効。

6、打撃武器希望者には、センサー内蔵の武具を配布する。ただし、銃火器との併用は禁止。

7、男子は戦闘要員のみ。女子は基本非戦闘員の救護要員とするが、こちらの判断で戦闘要員にする場合もある。

非戦闘員である救護要員を銃撃してはならない。救護要員も抵抗してはならない。

8、失格者は捕虜として牢屋（体育館）に収容。ただし、上記の内容も随時変更アリ。

そして、そんな無茶苦茶なサバイバルゲームを廊下では交戦中。まったく、迷惑な話だ。

「はぁ……面倒臭い」

「そうだね。そして、報酬が『体育の単位と謎の宝（私のひ・みつ）』とだけ書かれているし……」

読み上げている琥珀も頭が痛いのか、側頭部を押さえて唸っている。まったく桃姉さんは何を考えているだよ。

多分、この『謎の宝（私のひ・みつ）』の為に男子生徒は頑張っているのだろうな。

とても分かりやすい性格の連中だ。しかし、最後に『勝手にこの実習を辞退もしくは逃亡した人は、私がお仕置きするから覚悟してね』って付け加えているあたり、桃姉さんの”S”の部分を垣間見る事が出来る。絶対に、最後の一文は俺達に対しての忠告だろう。

「とりあえず、適当にするか……」

やる気の無い俺の声に、皆は苦笑いを浮かべながら頷いていた……。

第17話：ノリと勢いで実習二回目（後書き）

はい、どうも。

毎度読んでいただきありがとうございます。

さて、いきなり始まってしまったサバイバルゲーム。

しかし、先に言っておきますが、ほとんど戦闘シーンなどありませんよ（笑）

本当にノリと勢いだけで、書いてますのでご容赦を。

第18話：それで一体、何をしろと？

廊下には赤く染まった屍が至る所に転がっていた。

まさしく戦場。そして、今も飛び交う銃弾が悲鳴を木霊させる。

「なんかすごい事になっているな……」

教室から少しだけ顔を出して廊下を覗いているが、中々出て行くタイミングを掴めない。

左右から飛んでくるペイント弾に染まって倒れていく生徒達を見ていると、なんだか哀れになってくる。

そのペイント弾は洗ったら落ちるのか、それが心配だよ。

「囲まれつつありますね。どうしましょうか？ 亮先輩」

「そうだな……脱出手段を考えないといけないな」

美鶴がドアから廊下の様子を窺いながら、俺に打診してくる。

廊下にはすでに数十人の生徒が屯しているが、何故かそいつらはお互いを攻撃をしないで誰かを捜しているように見える。

多分、こいつ等の目的は俺達。この教室を挟むようにして集まってきた連中だから、標的は明白。しかし、こちらは女の子が四人。うち、二人はこういう血生臭いものには無縁だからな。さて……どうしたものか。

「……琥珀と美鶴に任せるか」

この二人は最強タッグだから、ここは任せて俺達は見学してる方が邪魔にならないだろう。

楽だし、それに並の男子より強い。

それにしても、教室内を楽しそうに走り回っているシロマロとシクマロは無邪気がいいね。何だか癒されるよ。

「おたしは化け物かよ、兄貴！ って、現実逃避するなっ」

「いや、それは化け物に失礼してもんだろ？ シクマロ、シロマロは食べ物じゃないぞお」

「うりゃっ」

「うごっ……そんなもので殴るな」

琥珀の一撃が俺の頭に直撃する。唸りを上げて飛んできたのは、トンファーだった。だが、そのトンファーは普通のトンファーではなく、材質はスポンジでスポーツ格闘技などで使われている代物だ。しかし、その芯には迷彩服のセンサーを震動させるセンサーが入っているので意外と固い。スポンジの意味がまったくないんだよ。

「それでは少しの間、待つてくださいね。琥珀、行くよお」

「ちよっと、美鶴！ まったく、もお……しょうがない。兄貴、行つて来るよ」

「おう、頑張つてこいよ」

上機嫌な美鶴は三節根を持って駆け出して行き、その後をすこし不機嫌な琥珀が追っていく。

そんな二人を見送り、俺達は脱出する為の手段を考える。退路を確認していないと、痛い目を見る事は明らか。

特に何をするか分からない桃姉さんが相手だ。念入りに考えておかないと、いざという時に大変になってしまう。

「そ、それで……私は何をすればいいの？」

「お前は何もしなくてもいいぞ、瑠璃。……功治、お前の装備はなんだ？」

「ん？ 俺のはコルト・アナコンダって書いてるぞ。かつこいいだろ」

だから、俺に銃口を向けるなって言っているんだろうが！ どうして皆、銃火器の扱いが無茶苦茶なんだよ。

人様に銃口を向けちゃダメよって、モデルガンの箱にも注意書きで書いているんだから、それくらい読め！

「危ねえよ！ ……ったく。俺がベレッタM93Rで珊瑚がルガーP08。そして瑠璃が……水鉄砲？」

それにしても瑠璃がなんで水鉄砲なのか分からないが、似合い過

ぎているので何も言えない。

持っている姿が可愛いのは内緒である。こいつは救護要員として考えられているようだが、服は戦闘用と変わっている。

もしかして、敵の裏をかく作戦か？　だけど、桃姉さんがそんな事する訳ないし……たぶん、趣味だろう。

「で、でも……私も」

「お前は俺の後ろにいろ。危ないから、前には出てくるなよ」

ポンポンと頭を叩くと、恥ずかしそうに目を細めて俯いている。透けているメイド服は見慣れてくるとそんなに違和感がないが、近くによると普通のエロとは違う新鮮なエロさがある。

そんな表情で見ないでくれよ、瑠璃。お兄ちゃん、過ち犯しちゃうぞ？

「おにい……鼻の下が象さん」

「う、うつさいぞ。それから、珊瑚も瑠璃と一緒にだからな」

「ボクは大丈夫だよ」

「お前が一番心配だ。無茶しそудだからな」

不満そうな顔をしている珊瑚に瑠璃と同じ事をする。さすがに姉妹だけあって、よく似ている反応をする事だ。

「あう……。おにい、ボクを子ども扱いするな」

「聞き分けの無い奴は、子供だ」

「うう……。おにいのばか、ばか」

「いてっ、なんで俺を叩く！　そして蹴るんだっ、さんごっち！」
すっかり拗ねて俺から目を逸らした珊瑚は、何故か功治をいじめている。なんか、行動まで子供になっているぞ。

「わ、わたしも……」

「お前もだ。少しは、俺の言う事を聞けよ。瑠璃」

「はう……」

瑠璃は体育はいつも下の方で、未だに逆上がりも出来ない運動音痴。

そんな奴を前線に出すほど俺は馬鹿じゃない。こんな二人を出し

たら心配で気になって仕方ないからな。

「まったく、かつこいい事言っちゃって……お兄ちゃんはずらいねえ」

「うつせえよ、功治。お前だって——て、美鶴は心配いらないか」

「そうだな。逆に俺が守ってもらえそうだ」

茶化しているが心配しているのはバレバレだぞ。

さつきから落ち着きなく廊下を見ている功治は。でも、廊下から聞こえてくるのは野郎共の悲鳴だけ。

妖しげに笑う魔女の声が二人分響いているが、それが琥珀達だといふのはすぐに分かる。

まったくもって心配の欠片もいらない様子だろうな。多分、無傷だろうし……。

「さて、そろそろ終わった頃だろうから、琥珀達の所に行くか」

「そうだな。戦利品も奪うとするか」

意気揚揚と出て行く功治の後ろをついて教室から出て廊下を見ると、そこは一面が真っ赤に染まった屍の山。

その山頂に片手突き上げている二人の悪魔。さすがに俺でもこの状況は想像出来なった……。

これだけの数を相手しても、息一つ乱れた様子のないこの二人が本当に味方でよかったと思う瞬間だな。

敵に廻したら、絶対に一発でお陀仏だな……俺。

「す、すごい、ね。ひゃあ……大丈夫なのかな、この人」

「瑠璃、そんなところにしゃがむと……。て、何してんだよ！　こいつ等はっ」

「……え？　きゃっ」

真っ赤に染まり倒れている奴等は、40人くらい。

心配そうに屍達に近づきしゃがみ込んでいる瑠璃の周りにいつの間にか無数の屍が集まって、スケベ全開な顔をしていた。

「琥珀、美鶴……殺れ」

「了解つす、亮先輩隊長つ」

「ラジャー、瑠璃に何するんだあ！」

《ぎゃあー！》

再度、響き渡る悲鳴だが同情の余地無し。余計な事をするからこ
うなるんだ。

真っ赤な顔をした瑠璃は、俺の腕にしがみ付いて泣きそうな顔を
している。

まったく……こいつの優しさを踏みにじった奴等には悪魔の制裁
を――。

「これとこれをもらって……。あ、これも……で、あたし達って山
賊？」

「近いものがあるかもねえ。でも、楽しいからいいじゃん」

琥珀と美鶴は追剥ぎをやっている。珊瑚と瑠璃もやっているが、
あの二人は負けている。

ただ、ペイント弾を奪っているだけなのだが、琥珀と美鶴はそれ
はもう鬼畜外道のような諸行だと思う。

嬉々としてやっている顔は、山賊や海賊も真っ青だって……。

「そうかもね。あ……ここにもあった」

「……琥珀、それはちよつと」

思いつきり掴んでいるが、琥珀……それは違うと思うぞ？

弾倉を拾い上げている琥珀は辺りに散らかつている銃と弾を合わ
せて、どれが合っているのか確認しているが、今握っているのは弾
倉ではないぞ。違う”モノ”だと思うが……。

「きやあ！ 痴漢、変態！」

「うぎや」

美鶴も顔を覆って呆れながら十字を切っているが、その男子生徒
を助けてやれよ。青い顔をして、泡噴いて失神してしまったではな

いか。

あれは男にしか分らない苦痛。足蹴にされて股間を押さえてる姿が哀れで、俺も何故か同じように苦痛が歪んでしまう。

でも、そんな事を気にしても仕方ないので、気にしない。強く生きろよ……男子生徒。使いものにならないかも知れないけど、な。

「さて——これだけの弾があれば大丈夫だろう。しかし、俺達に指令はないのか？」

全員が俺を見て首を横に振っている。

今、目の前で倒れている男子生徒共には、指令があつたのだと思う。そうでなければ、俺達を襲ってきたりはしないだろう。

もしかしたら、ただ単に俺を狙ってきたとも考えられるが——ほとんどが二年の男子だし、クラスメイトもちろほら見えるし……。

『はろお、亮ちゃんっ』

「うわっ」

突然、鼓膜を突き破らんばかりの勢いで聞こえる大声に、インカムをもぎ取って床に叩きつける。

『投げ捨てるなんて、ひどいよお。そうやって私も捨てるんだね……亮ちゃん』

しかし、今の衝撃で壊れたかと思ったインカムからは、未だに叫び声が聞こえる。

全員がそれを見て苦笑いを浮かべて、呆れ返っていた。

「桃姉さん……もう少し、音量落としてよ」

『あ……ごめんねえ。ところで第一次関門突破おめでとっ』

「やっぱり、これ——姉さんの仕業なんだ」

『そうだよおん。これくらいは、琥珀ちゃんと美鶴ちゃん簡単だと思っただけだね』

さすが、桃姉さん。こちらの戦力を冷静に分析している。「あたし達って何？」と頷き合っている琥珀と美鶴には悪いが、お前達が

一番の戦力であり、敵にとっては一番やつかいなものだろう。

「それで、俺達に何か指令でも……？」

『亮ちゃんに指令はないわよ。あるのは、美鶴ちゃんと珊瑚ちゃん。そして、功治君と琥珀ちゃん』

「は？」

『それでは、みんなのインカムに切り替えるねえ』

そのまま俺のインカムからは声は聞こえなくなり、変わりに美鶴と珊瑚が頷いている。続いて功治と琥珀。

それぞれに何かの指令が下ったようだ。もしかして、俺達のインカムってそれぞれ周波数が違うのか？

「ちょ、桃姉さんっ。俺はどうするんだよっ」

『うるさいなあ……。そうだ！ 亮ちゃんは瑠璃ちゃんを食べちゃいなさい。ちよっと早熟だけど、おいしいわよん』

「アホな事言っくなっ！」

この声は、どうやら俺と瑠璃以外は聞こえてないようだ。一体、この人はどれだけの周波数をこのインカムにセットしているんだよ。真っ赤な顔をして俺を見ている瑠璃は、「え？ あ、あの……」って顔しているから、どうやら意味は分かるらしい。いや、分かって欲しくはなかったけど。そんな事しないから俺を真っ赤な顔で見るなよ。

「お、おお、おにいちやんが……よ、よければ」

「だあ！ そんな事を言っくなっ」

だから拳握りしめながら、俺を見つめて言うなよ。周りの連中が変な目で俺を見てるだろうが。

「どうせ、エロネタだよ」って顔してる琥珀と珊瑚、白い目の美鶴——そんなに俺は信用ないのか、お前達。

『もう、冗談よ。そんな事言っなら、私が亮ちゃんをいただくわ。亮ちゃんには——』

「冗談か本気が分からない事を言って、桃姉さんは俺に指令を下していた……」。

第18話：それで一体、何をしろと？（後書き）

なんだか分からない展開に…。

第19話：お花畑に連れてって…。（前書き）

タイトルは関係ありません（笑）

第19話：お花畑に連れてって…。

六人もいた俺の仲間が次々と倒れて、今は二人だけ。

……なんて訳もなく、さっきの指令で琥珀と功治、珊瑚と美鶴がそれぞれ指令を実行する為に方々に散っただけの事。

内容は極秘と言う事で、俺にも教えてくれなかったがあんまり乗り気ではないのは、顔を見ればすぐに分かった。

また、むちゃくちゃな事を言ったんだろう、桃姉さんは。

「さて……俺達も行くぞ」

「う、うん……。で、でも……ど、どこ行くの？ 私、知らないよ」
服の裾を掴む瑠璃は潤んだ瞳で俺を見上げている。妹ながら、その男心をくすぐる仕草に感服。

その仕草を自然に出来るとは末恐ろしいが、この性格なら大丈夫だろうと思う。

瑠璃が指令の内容を知らないのは、桃姉さんが俺だけに指令を出したからだ。しかし、瑠璃を一人にするのは危険なので、こうして一緒に

来たのだが、ちょっと失敗したかも知れない。

「それなら俺が知っているから、ちゃんと付いて来いよ」

「うん、お兄ちゃん」

廊下には俺達以外の姿はない。

さっき倒した奴らは、まとめて牢屋にぶち込んできた。と言って、ここは俺達の教室がある校舎ではない。

この学校には二棟の校舎があり、A棟に一年や二年のクラスが全てあり、そして今いるB棟には三年生のクラスがある。

その他に理科室や視聴覚室等の特殊教室がこちらにあるので、敵が隠れるにはもってこいの場所とも言える。だから、どこに隠れているのか分からないので、慎重に行動しなければ、

「きゃうっ」

と思っっている矢先から、後ろで瑠璃が転んだ。大丈夫かな……かなり幸先が思いやられるよ。

「大丈夫か？ 瑠璃」

「はう……痛いよお」

「どこ打ったんだ？」

「……ここ」

涙を浮かべて鼻を擦っている瑠璃。少し赤くなっているが、特に問題なさそうだが、相変わらずのどん臭さだ。

何も無いところで転べるのは、ある意味才能だな。

「大丈夫みたいだぞ。こうしていれば、痛くないだろ？」

「ひゃ……お、おお、おにいちゃん」

鼻頭を指で優しく撫でるようにして、おまじないをする。

子供の頃、転んで怪我をして泣いている瑠璃に何度もやったな。

無論、珊瑚や琥珀にもやったが、瑠璃が回数ではダントツに多かった。

今では滅多に転んだり怪我をしたりする事も少なくなったので、久しぶりにやったがなんだか懐かしい気持ちでいっぱいだ。

「ほら、大丈夫だろ？」

「うん……。ありがとう、お兄ちゃん」

真っ赤な顔の瑠璃は照れくさそうに應えると、ゆっくりと立ち上がる。

「ちゃんと足元見て歩けよ？ また転んでも知らないからな」

「も、もうっ……！ そ、そんなにドジじゃないもん」

「……だと、いいんだけどな」

「むう……お兄ちゃんのいじわるっ」

むすつと頬を膨らませて俺を睨みつける瑠璃だが、怖くないのは何故だ？

逆に思わず抱きしめたくなる愛玩動物系の可愛らしさがある。

腕が抱きしめたくて、ムズムズしてます！ て、妹相手に俺は何

を考えているのだ――。

「と、とりあえず、先を急ぐぞっ」

「あ、おにいちゃん、まってよお」

パタパタと後ろを付いてくる瑠璃の足音をBGMに、俺達は目的の場所へと進んでいった。

「さて――ここで、ひとまず様子を見よう」

「あ、あう……」

狭い場所だが、仕方ない。

俺達は今、廊下の突き当たりにあるゴミ箱の中にいる。ゴミの投入口が二つ在るタイプで、中はそれなりに広いが俺一人ではほとんどいっぱいの状態なのだが、そんな中に二人もいるとさすがに苦しい。決してゴミと一緒にいる訳ではなくゴミはさつき他の場所に移してきたから問題なし。でも、少し生ゴミ系の匂いがきつい……。

さて、投入口から見える廊下をウロウロとしている数人の生徒。

男子も女子も混ざっているが、あれが問題のチームって事か。

それにしても、桃姉さんも俺に面倒な事を頼むなよ。

「え、えつと……お、おおお、おにいちゃん」

足元から聞こえる瑠璃の情けない声を無視していると、今度は俺のズボンを引っ張り出した。

「なんだよ。騒ぐと見つかるだろ？」

「だってえ……」

それでも必死にズボンを引っ張る感触と泣きそうな声に下を向くと、

「ぶっ！ な、なんだっ」

「あうゝ、た、たすけて、お兄ちゃん」

なぜ、顔の前にお尻があるんだよ？ ピンクの花畑が満開でとても綺麗だな。

でも、さっきまでは確かに俺の方を向いていたはずの頭は、今は

髪の毛しか見えない。二本の尻尾のようなツインテールが、忙しく動いているのは、瑠璃が暴れているからだろう。まったく、どうやったらこんな芸当が出来るのか、教えて欲しい。

「何やってんだよ……瑠璃」

「わ、分からないけどお、いつの間にか……それよりもお兄ちゃんっ、見ちゃダメっ」

必死に隠そうとすればするほど、捲れ上がっていくスカートに、更に慌てた声が聞こえてくる。

目の前にあれば見てしまうのが、男の悲しい性と前にも自己弁護したが、まさにその通り。

大体、こんな狭い所に二人も入っているんだから、瑠璃も無理な事を言うなよ。だから俺が、「違う場所に隠れる」って何度も言ったのに、一緒がいいって駄々をこねた結果がこれだ。

「だ、だめ、見ちゃいや！」

「あがつ、蹴るな！ いた、いたた……お願いだから暴れるなっで、瑠璃っ」

暴れまわっている瑠璃の足蹴が俺の身体中に炸裂する。しかし、瑠璃の蹴りは案の定と言うか威力はなく、ポコポコと可愛い音がしそうなものだ。それでも、どう言う訳か正確に身体の急所を蹴っている辺り、琥珀と同じDNAを持っているんだな、と関心したりもする。

「大体、このゴミ箱に二人っていうのが無理があるって、最初に言っただろうが」

「あう……。だ、だって……ひ、ひとりは、さびし……い、し」

恥ずかしそうにしているが、目の前ではおしりが揺れてるだけ。俺のリビドーが暴れ出すのも時間の問題かもな。

そんな俺の葛藤を知らずに、目の前のお花畑は優雅に揺れていた……。

「しっ！……静かにしろ、瑠璃」
「ひゃうっ」

俄かに騒がしくなってきた廊下に視線を向けると、何やら一人の男子生徒と女子生徒達が集まって相談をしていた。

話の内容は聞こえないが、どうも様子がおかしい。慌ただしく走って行く男子生徒に付いていく迷彩服を着た女子生徒達。そして残ったナース服を着た女子生徒が教室の中へと入って行く。

あれで全員だろうか？ そうなると今、教室の中には救護要員だけのはず。これはチャンスかも知れないな。

「瑠璃、行くぞ」

「う、うん……。あ、あの中に捕まっている人達がいるんだね」

「そっだ……。て、早く頭をこっちに向けろって」

「あう……。だって、服が引っ掛かって、動けないのぉ」

頷いているが、やっぱりお尻が揺れているだけ。もうちょっと見ていたが――で、俺って最近エロキヤラになってないか？

「行くぞ、瑠璃」

「あゝ、ま、まってよぉ、おにいちやぁんっ」

もう無視だ。このままでは一向に進まないし、俺の精神が持ちそうにない。

『亮ちゃん、今どこ？』

「うおっ、びっくりした！――桃姉さん、いきなり通信入れてこないでよ」

『そんな事より、捕虜は確保したあ？』

「今から突入するんだよ。それより……。桃姉さん、もしかして陽動かけた？」

インカム越しに笑い声が聞こえてくるが、どうやら当たりらしい。どうやって陽動したのか聞いてみたいが、その手口を知るのは怖いな。

『それじゃ、検討を祈ってるわぁ』

「あいよ」

それつきり桃姉さんの声は聞こえなくなった。

男にとって、こう言う場面って見せ場の一つだろ？ アドレナリンが脳内を駆け回って最高に気持ちいい。

「お、おにいちちゃん……えっち」

「うおっ、る、るり！——て、どこ見てんだよっ」

いつの間にやらゴミ箱から脱出してきた瑠璃が俺の横に立っているが、視線が下の方を向いて顔を真っ赤にしている。

これはアドレナリンの副作用であって、決して変な事を想像した訳ではないぞ。

「こほん——そ、それじゃ、突入するぞっ」

「う、うん」

頷きながら銃を構えている瑠璃だが、水鉄砲では締まりが無い。

と言っより、それでは太刀打ち出来ないだろう。

張り切って頷いている瑠璃には申し訳ないが、俺一人で頑張るか……。

「……行くぞ」

教室のドアを、静かに開けた——。

第20話：俺って意外と真面目？

ドアを少し開けて覗いてみた中の様子は異様だった。

数人のナース服を着た女子生徒と捕虜らしき姿が見える。

捕虜は全員で五人。

それも一年生だけみたいだが、明らかに捕虜の様子がおかしい。
なんで顔が赤いんだ？ しかも、照れてるのかモジモジと顔を伏せたり目を背けたりしている。

「あ……あ、あれは……貴美君^{たかよし}」

「は？ ……誰だ、それ？」

「私のクラスメイトだよ。あの右端にいるのが、貴美君だよ」

「は……？」

瑠璃が教えてくれた方を見ると、確かにいた。でも、俺の見間違いでなければ、とても変なのですが……。

「瑠璃……一つ、聞いていいか？」

「な、なに？ お兄ちゃん」

「貴美君とやらは、女の子かい？」

「え？ ち、違つよお、貴美君は男の子だよ」

上から聞こえる瑠璃の声は驚いているが、俺の方が驚いた。

なんと——貴美君は男の子なんだ！

「君」と言うのだから男の子なのは分かるが、瑠璃が教えてくれた右端に座っている子は、どう見ても女の子。

世の中、俺の知らない事はまだまだあるって事か……。

「では、突入する。瑠璃は、捕虜を頼むぞ」

「う、うん」

頷く前にいい加減、俺の上から下りる。重くは無んだけど、ぷによんぽによん、とさつきから頭に当たっているんだよ。

「それじゃ——GOッ！」

勢いよくドアを開けて突入する。

不意打ちとか面倒な事は嫌いなので——正面から正々堂々、討つ。

部屋の中は混乱としていた。

いきなりの乱入者に慌てふためき、こちらに攻撃してくる人はいない。それ以前に、この教室に残っているのは救護要員だけのようなので、武器は所持していない。だから、ただこちらを見て呆然としているだけ。

全員で三人——守るにしても非戦闘員だけを残すとは、間抜けだな。

「では……先輩方には悪いけど、失格と言う事になります」

「そうみたいね……。降参よ」

長身の女子生徒が両手を上げて苦笑いを浮かべている。

同じようにして眼鏡をかけた先輩と金髪の先輩も、次々と手を上げていく。意外と素直でいい人達みたいだが、

「なんで、こんな事してるんですか？ 捕虜は体育館に連れて行くのがルールですよ」

「知っているわよ。でも、それはね……」

ゆっくりと歩いて捕虜のそばにしゃがみこむ長身の先輩が、妖しく俺を見て微笑む。

しかし、先輩の前にいる男子生徒は顔を真っ赤して、どうにも様子がおかしい。

「この子達——可愛いじゃないのぉ」

途端に猫撫で声になった長身の先輩が男子生徒の首に抱きついてる。

それに触発されたように、他の先輩達もそれぞれが男子生徒に抱きついて撫でまわしていた。

……こりゃ、一体なんだって言うんだよ？

「ありゃ——全員、捕まったんだあ」

突然の声に銃を構えて振り返るが、声の主は戦う意志はないように、銃を頭の上上げて降参していた。

この人も先輩だろう。長い髪を後ろに纏めているが結構な美人さん。しかも、女の人なのに迷彩服着てライフル持っているところを見ると、琥珀や美鶴みたいな武闘派なのかも知れない。

「もう戦う意志はないわよ。まったく……あんな陽動作戦に引っ掛かるとは思わなかったわ」

苦虫を噛み潰したような表情をしているが、桃姉さんの陽動作戦が成功したようだな。

それで一人だけ残ったので帰って来てみると、そこに俺達がいたと――。

すっかり戦意を失っている先輩は今度は爽やかに微笑んでいる。

しかし、この人達は一体何がしたかったんだ？

「折角、弟が出来ると思ったんだけどなあ……。可愛い弟君に、色々教えてあげたいじゃない？」

「はあ……」

「一人っ子って辛いだよ……。ねえ、みんな？」

ナース服を着た先輩達は無言で頷いていた。もちろん、一年の男子を撫で廻している手は止める事はない。

もみくちやにされている男子達は顔に胸が当たって恥ずかしいのか、耳まで真っ赤にして照れたているようだ。

なんだか、羨ましい光景だな……。

「その気持ちは、分かりますが……」

一人っ子の気持ちは、俺も分かるつもりだ。昔は一人だったから、どんな気持ちは分かってる。

ちよっと複雑な感じはするが、これも指令なんで勘弁してもらおう。

「でも、先輩……これはルール違反ですよ。校長の指令で来ました」

「そつか。バレてたんだ」

情けない顔をして頂垂れている先輩がちょっとかわいそうな気もするけど、これは仕方のない事だ。

ルールはちゃんと守らないと面白味がない。でも、俺ってなんでこんなにも真面目にやっているんだろう？

「それじゃ、行きましようか。先輩方も一緒にですけど」

「ええ——もう少し、一緒にこの子達といたいなあ」

駄々をこねるように一年の男子に抱きついていて迷彩服の先輩。

男子生徒の頭の上に胸が載って、凄い光景だな。

「体育館は一つですよ。別に俺はどこに連れて来いって言われてる訳ではありませんから」

「そうなの？」

「はい」

「それじゃ、一緒にいこつかあ」

嬉しそうに手を繋いで歩いて行く先輩達と恥ずかしそうだがどことなく嬉しそうな一年の男子達。

これがきっかけで、あの子達は危ない道に走らない事を祈るばかりだ。

「さて……瑠璃、俺達も——って、あれ？」

瑠璃を呼んだはずなのに、俺の前には二人分の顔があった。

「あ、あああ、あの……み、みみ、みずかみ、せ、せん……」

「お、おちついて……た、たかよし、くん」

「まず、二人共落ち着け」

頭の上に手を置いて落ち着かせようとしたら、ますますパニックになってしまった二人。しかも、何を言っているのさっぱり分らない。

なんだか瑠璃がもう一人増えたみたいだ。

俺を見上げる二人の顔は、どちらも負けず劣らず真っ赤に染まっている。

なんで顔が赤いのかは知らないが、行動や性格まで似たもの同士
って事なんだろう。

「で、なんだ……？」

真っ赤な顔で俺を見上げている男の子——えっと名前が貴美たかよしだっ
たかな？——は近くで見ると本当に女の子に見える。

アゴの辺りまでのソフトボブにダークピンクに染めた髪。丸いク
リっとした薄い茶色の瞳と、それに見合った小さな鼻と口がちよこ
んと付いている感じの顔。これで本当に男の子なのかと疑いたくな
る顔立ちをしている。

「あ、あの……水上先輩」

「ん？」

「あ、ああ、ありがとうございましたっ」

勢いよく頭を下げていく様は、まさしく男の子みたいで元気なの
だが、声はやけに高い。

まだ声変わりしてないのかと思いたくなる声で、歌を聞いてみた
いと思ってしまった。

「ああ、気にするな。それで、どうして捕まっただんだ？」

「え、えつと……その、あの」

「だ、だいじょうぶ？ た、貴美君」

落ち着きなく挙動不審な貴美を落ち着かせようとしている瑠璃だ
が、一緒に挙動不審になってどうする。

なんだ……この二人は？ 丸つきりコピーみたいな奴等だな。し
かも、また俺を見て二人は顔を真っ赤にしていた。

「い、いきなり……だ、ただだ、だきつかれて……そのまま、ここ
に」

「……無茶苦茶だな」

指を組み合わせて恥ずかしそうにしている貴美は、更に顔を真っ
赤にして俯いてしまった。

なんて初々しい反応をする奴だよ。あの先輩達もさぞかし萌えた
だろうな。

「お、おにいちちゃん」

「どうした？ 瑠璃」

「あ、あのね、お兄ちゃん。えっと、貴美君を連れて一緒におそそつていつていいいい……」

「落ち着け、瑠璃。何を言ってるか、分からないぞ」

何をパニックになっているのか知らないが、最早日本語以前に言葉になつてない瑠璃。

それを見て貴美まで何故かパニックになっている。

「一体なんだよ……これって？」

だから、その連鎖反応は一体何なんだよ？ 一人がパニックになると、もう一人もパニックになる。

この二人が揃うといつもこうなのか？ それだと、教室とかはかなり大変そうだな……一緒にクラスの奴等に同情するよ。

「すうーはあー。あ、あのね、お昼一緒に……」

「なんだ、そんな事か。別にいいぞ……それで、どこで食うんだ？」
「恥ずかしそうに言うから俺はドキドキしたではないか。でも、珍しい事もあるもんだ。」

瑠璃が男の子を誘うなんて、俺の記憶の中では初めての事かも知れない。でも、貴美にあまり”男”って雰囲気がないから平気なだけかな。それに「類は友を呼ぶ」って言うことわざもあるから、そんな細かい事は気にする必要はないか。

「い、いいい、いいんですかつ」

「うおつ、た、貴美。いきなり大声出すなよ」

「あつ……す、すいません！ つい、嬉しくて……」

目を見開いて驚いている貴美だが、我に返った様子で顔を赤くして俯いてしまった。

……どうにも、貴美の行動パターンが読めない。

女の子を相手にしている錯覚に陥るのは、この顔のせいだろうと言う事にしておこう。

『男の子とイチヤイチヤしないのよお、亮ちゃん』
「うおいつ」

インカムから突き抜けて聞こえる声に、瑠璃と貴美も驚いている。この人はいつも唐突に話し掛けてくるから心臓に悪いよ。しかし、なんで俺達の事が分かっているんだ？

「してないって！ それより何？ 桃姉さん」

『それは亮ちゃんの身体に聞けばわ、か、る、の、よ。……えっとね、お昼のお弁当があるから取りに来てねえ』

何を俺の身体に聞くのか教えて欲しいが、聞きに言ったら間違いなくアウトだろうな。

それにしても、この部屋には隠しカメラでもあるのか？ あの人以上、どこにでもカメラを仕掛けられそうな気がするが……。

「べんとう……？」

『そうよお、お昼のお弁当は、桃子姉さん特製弁当よお』

ノリノリの声がインカム越しに聞こえてくるが、こんな時になんか妖しい気がする。

あの桃姉さんがお弁当って——何か裏があるんじゃないか、と勘ぐるのは普通だろう。

『文句言わずに取りにおいでね……来ないと、亮ちゃん——分かってるわよね？』

「は、はいっ、いかせていただきますっ！」

低く唸るような桃姉さんの声に、俺の中で緊急警報が発令した。

——この声を出す時の桃姉さんは、危険だ。

そして心の奥底に染み付いている記憶が、勝手に身体を動かしていた。

これは……トラウマなんだろうか？ 無意識に敬礼している俺って、一体……。

第21話：お昼御飯は、楽しく賑やかに

桃姉さんの特製弁当に箸を付けながら、俺達は話をしていた。

あちらこちらから聞こえる楽しそうな話し声に、今までの殺伐とした雰囲気は微塵も感じない。

俺達も楽しく食事をしている訳だが、如何せん寒いぞ……ここは。なんで、中庭で昼食をしなくてはならんのだ。

寒空に吹き抜けていく風が身にしみる。

「疲れたなあ」

「そうだなあ……。でも、俺何もしてないし……」

対面に座る功治は疲れ果てた顔をして、弁当に箸をつける気力すらないようだ。しかし、何をそんなに疲れているんだ？

お前は琥珀と一緒に行ったのだから、そんなに疲れるはずはないと思うが。

「えらく疲れてるな？」

「だってさあ、琥珀ちゃんが全部片付けちゃうんだよ……。俺って役に立ってないじゃん、意味ないじゃん」

「すっかり、いじけキャラになってキモイ……ボンクラ兄」

珊瑚からのツツコミにすら、対応出来ないほどの疲労具合。

琥珀は何をしたんだ？ 功治に、ここまで追い込むとは恐ろしい事だ。

「まったく、情けないね……功治は。だから、あたしが全滅させたんじゃないの」

「……俺を殴ったのはどのどいつだよ」

「あれ……？ あたし、殴った？」

呆けている琥珀に軽く睨みを利かせている功治だが、相手にされてないと判断して項垂れている。

「一番最初にトンファー振り廻した時に――」

「ああ、あれね。一番気合入れて振り廻した時だ。アチョーって！」
「うおつ、危ないって！　こんなところで振り廻すな、琥珀っ」
目の前を掠めて行くトンファーに、瑠璃が悲鳴をあげて亀のように首を引つ込める。

俺や瑠璃、珊瑚に当たったらどうする気だ。功治は……別に当たってもなんとも思わないから、思う存分当ててくれ。

「俺ならいいのかよ……。危うく、三途の川の特別優待片道切符をもらうところだったのに」

「……もらえばよかったのに。頑張ったな、功治」

「うわ、心にもない言葉を……。亮ちゃんって、やっぱり冷血動物なのね……よよよ」

うつとうしい程に気持ち悪い奴だな。精神的苦痛と肉体的苦痛のダブルパンチを琥珀から食らったので、これだけ疲れ果てている訳だ。

……そりゃ、災難だったな。

「情けない、お兄ちゃん。私達は意外と楽だったよねえ、珊瑚ちゃん」

「そう、ボク等に負けはない」

楽しそうに力こぶを作ってみせる美鶴はちよつとかつこいい。

その力こぶは女の子には不釣り合いなぐらいに立派で、兄貴の功治とは大違いだな。

そして、口角だけ上げて笑う珊瑚は怖い。しかもピースなんてしてるから、恐怖が倍増して襲ってくる。

何をしてきたのか聞くのがとっても怖いぞ……この二人。

肉体を使って破壊する美鶴と精神的な破壊をする珊瑚。ある意味、最凶のコンビかも知れない。

「す、すごいですね」

「ん……ああ、すまん。すっかりお前の存在を忘れていた」

驚きに見開かれている瞳で俺を見ているのは貴美。

そう言えば、こいつがいた事をすっかり忘れていた。

「……なんで貴美がいるの？」

「さつき、話してじゃないの。本当に琥珀は話を聞いてないね」

今更気付いたのか、琥珀は不思議そうな顔をして貴美を見ていた。さつきも俺が経緯いきさつを説明して自己紹介までさせたんだぞ？ お前

は「瑠璃のクラスメイトだから知ってる」って、頷いていたはずだが、あれは聞いてなかったのかよ。

「うるさいわね……美鶴は」

「……やる気？」

「ちょ、ちよつと、ふ、二人共——お、落ち着いてよお」

睨み合っている琥珀と美鶴は徐おもむろに立ち上がると、一瞬で間合いをとって構える。

……喧嘩っ早い奴等だな。

そんな二人を一生懸命止めようとして右往左往している瑠璃は、今にも泣きそうな顔で俺に助けを求めてきた。

「ほつとけ、瑠璃。ちゃんと加減を知っているから、怪我はしない」

「で、でも……お兄ちゃん」

「大丈夫。あの二人は問題ないから。それより、早く御飯を食べないと昼休みが終わるぞ」

渋々とテーブルについて箸を持つ瑠璃の後ろでは、トンファーと三節根を持った二人が決闘をしていた。

昼の一時に雑技ショーが見れるとは、中々いいものだな。

「ん？ 貴美、こんな事に驚いていたら、この先付いていけないぞ」

「え……あ、はい。でも、やっぱりすごいです」

呆然とした顔で決闘をしている二人を見ていた貴美だが、興奮した様子で俺の方を向く。

こいつの性別は本当にどっちだ？

見れば見るほど、女の子にしか見えないのだが、今度服を脱がして——別に変な趣味はないからな！——確認してみたいぞ。

「ところで……たかちゃん」

「え、え？……は、はい？」

「たかちゃん。ボクの言う事は”絶対”だからね」

「え？……あ、はい」

訳も分からないとりあえず返事をしている貴美は、怯えきつていた。

その気持ちは分からなくもないが、珊瑚の言動に逐一反応していたら疲れるだけだから、相手にするな。

大体、絶対つてなんだよ？ こいつの事だから、とんでもない事を言つつもりだろうな。

鬼畜外道な所業をしなければいいが……心配だよ。

「あ、あの……水上先輩」

「はい？」

「ん？」

そう呼ばれて返事をしたのは、俺と珊瑚。

お互いに顔を見合わせて貴美を見たが、当の本人はどうしていい分からない様子で、オロオロとしてるだけだった。

「なあ……貴美」

「は、はい！ な、ななな、なんですか？ 水上先輩」

「俺は「亮」で、こつちが「珊瑚」——ここには水上が四人もいるんだ。名字で呼んでいては、誰か分からないだろ」

「え、え……ええ！」

何故、そこで驚く？ そして、顔を赤くする？ その言動と行動が俺には理解不能だぞ。

「い、いいい、いいんですか！」

「いいも何も……そうしないと俺達が分からないだろ？」

「そうだね。たかちゃん……おにいの事を「お兄様」と呼ぶ？」

「アホな事を言うな、珊瑚っ」

人さし指を立ててアホな事を言っている珊瑚の頭を叩くと、
「痛いですわ、お兄様」——で、お前が言うな！

「お、おおお、おにい……さ、ささ、あま」

「お前も変な事を真似せんでいいわ、貴美っ」

顔を真っ赤にして「お兄様」って小声で練習するな。

そんな事を真に受けなくていいんだよ。それと——瑠璃も一緒に
なつて練習しなくていい！

「大人気だな……お兄様」

「うるせえよ、功治。ここで永遠の情眠を貪りたいか？」

「いえ、滅相もございません。私……お布団の上で可愛い妹を抱き
まくらうぞ」

アホ面に命中した三節根。あの距離から功治の戯言を聞き分ける
能力は、さすがと言うべきか……美鶴よ。

そんな呆れた顔で見るのはかわいそうだぞ。

「で、なんの話だっけ？ 貴美」

「あ、えっと……その、忘れてしまいました」

真っ赤な顔で頭をかいている貴美を、何故か撫でている珊瑚。

もしかして気に入ったのか？ 「おもしろい子……みつけ。ふふふ」
って、聞こえたけど聞かなかった事にしよう。

どうか、貴幸がトラウマになりませんように、神様お願いします。

「ところで、お昼からどうなるのかな？ お兄ちゃん」

「……さあな。どうせ、午前中——むっ！」

「なんだ、亮？ え、おい……」

インカムを取り外して、無言で功治のインカムと取り替える。
不思議がっている功治と瑠璃をそのままに待つ事、数秒——。

『はろおー、亮ちゃんっ！ うばちゃちゃばんぼやーじゅ』

「うぎゃ」

やっぱり、通信入りました。

それもかなりの音量で対面にいる俺でさえ、耳を押さえないと聞
いていられなかった。

瑠璃や貴美はもちろんの事、琥珀や美鶴ですら耳を押さえている
ぐらいだ。珊瑚はどこから出したのか、耳栓して平気そうな顔をし

ている。

泡を噴いて倒れている功治を眺めながら、桃姉さんの恐ろしさを実感していた。功治、ありがとう。君の尊い犠牲のおかげで俺は助かったぞ。

『ちよつとおく。亮ちやあん、聞いているのお？』

「聞いているよ。何？ 桃姉さん」

『あのねえ……私、飽きちゃったのお』

「は……？」

功治からインカムを取り上げて聞いているが、もしかしてまた始まったのか？

『それでねえ……ちよつとルールを変更する事にしたからねえ』

やっぱりそうだ。

桃姉さんの悪い癖——それは、すぐに飽きやすい性格なのだ。

昔から遊んでいるときも、最後まで同じルールでやった記憶がないうらいに、ルール等を変更してしまう。だから、最後には何の遊びをしていたのか分からなくなっている事が多々あった。

『それでねえ——お昼からは、フラッグアタックに変更するからねえ』

どうやら、昼からも一波乱ありそうだ……。

第22話：午後は優雅に旗とりゲーム

午前中と同じように教室で円陣を組んでいる俺達は、作戦会議と言つ名の雑談をまたも繰り返していた。

しかし桃姉さんもよく考えるよ。

こんな事している暇があるのなら、少しはまともな事をしようって気はないのかね。

「さて——この旗を一番多く集めたチームが勝ちらしい」

「まったく……あいかわらずね。桃姉ちゃんは」

ため息を吐いている琥珀が俺に旗を渡してくるので振ってみると、桃の絵が描かれて中央に大きく『桃ちゃん大国』と書いてある。

このセンスはどこからくるのか、あいかわらずの頭の持ち主って事だろうな。

「でも、この旗はどこにあるんですか？ 亮先輩」

「それは、この地図に描かれてる赤いマークがあるところだ」

新しく配られた校舎の見取り図には、赤い丸印が追加されていた。「へえ……校舎全部に散らばっているんだね」

「でもさ……こう言うのって——普通、探すところから始めない？」

美鶴と琥珀は見取り図を覗き込みながら、何やら相談をしている。琥珀の言う事はもっともな意見だと思う。この赤いマークは”ここに旗がある”と言っているのだ。

こんな事されたら、全員がそこに集まって大惨事になる事は目に見えて明らかのはず。

……桃姉さん、本気で飽きてるな。

それでも続けようとするのはあの人、飽きっぽいのに中途半端が嫌い、と言う性質の悪い性格をしているからだ。

「兄貴、ルール追加で『リーダーが戦闘不能になったら失格』ってあるけど」

「それは大丈夫だろ。……って、うちのリーダーは誰だ？」

一斉にこちらを向く視線。もしかして俺がリーダーなのか？
今のルールなら間違いなく集中砲火をうけるだけだ。

「ところで……。なんで、貴美がいるの？」

「お前は本当に話を聞いてない奴だな……琥珀」

先ほどと同じ質問をしている琥珀に、簡単明瞭に説明する。

——貴美が俺達のチームに入った、と。

桃姉さんのご都合ルールが発動して勝手に決めてしまったので、
もう何も言えなかった。

「よ、ひゃう……。よ、よろしく……。お、ほねひゃいすひゃぶ」

「珊瑚……貴美で遊ぶな。何度言ったら分かるんだよ」

「おもしろいから、止められない。おにいも遊ぶ？」

貴美の口を横に引つ張り遊んでいる珊瑚は妙に楽しそうで、今に
も鼻歌を歌い出しそんな勢い。

「ひゃへへふひゃさい」

そんな珊瑚に負けじと一生懸命喋ろうとしている貴美も顔が真っ
赤で、これはこれで妙にエロい。

ちよつと変わった趣味の方には、大好評かも知れない。

「では、気を取り直して……。こひよられて」

「おにいも一緒に」

「ひゃうぎよ、ひゃみひよすすつ」

——今度は俺かよ！

後ろから俺の口を引つ張っている珊瑚から、とても楽しそうな鼻
歌が聞こえる。

それを見て馬鹿笑いしている功治は、あとで覚えてろよ。

瑠璃も琥珀も顔を伏せて笑っているし、美鶴も笑うの必死に耐え
ようとして変な顔になっている。

……こうなりや、笑いたきゃ笑えよ。

「いきなり何するんだ！珊瑚」

「おにいが無視するから……制裁？」

「せんでいいわ！」

口の周りがヨダレでベタベタする。

あの状態で叫ぶと全部垂れてきて気持ち悪いな。本当に余計な事
しかない奴だ……。

「ところで……おにい」

「なんだよ？ ああ、口の横が痛い」

「大変言い難いのですが——関節キス」

「……関節キス？」

関節キスとは、関節にキスする事か？ そんなの聞いた事がない
ぞ。

「おっ——間違えた。間接キス」

「は？ ……間接キス？」

「うい。たかちんとぶちゅーって」

「ぶっ！」

そう言うのと俺の前に真っ赤な貴美の顔を寄せてくる珊瑚。

突然の事に驚いて目を見開いていた貴美だが、次第に顔が真っ赤
になってくる。お前もそんな顔で俺を見るなよ。

それにしても——珊瑚、お前は手を拭いてないのか！

あのヨダレまみれの手で俺の口をあんなに広げて遊んだのかよ…

…勘弁してくれ。

「あう……あの、あの、りょ……せんぱい」

「おにい、男の子に欲情しちゃダメ」

「してねえよ！」

珊瑚を叩いて黙らせてから貴美を見ると、更に真っ赤な顔をして
俺を見ている。

……こいつは男なのに。

俺も変な事を考えるのは止めよう。

「さて、本当に気を取り直して——俺達はここから旗を取って来る

から、功治達はここを頼む」

「……了解。で、俺はこのメンバーで行けと？」

地図を指さしている俺に功治の不満そうな声が聞こえる。

「そうだが、問題はないだろう？」

「……素敵過ぎて、涙が出そう」

本当に泣き出した功治の後ろには、美鶴と珊瑚、そして瑠璃の三人がいる。

別におかしなメンバーではないと思うのだが……？

寧ろ、妹と一緒に嬉しいだろう。最強の妹と一緒になら俺も余計な心配はいらないからな。

マインドクラッシャー

あと、”最狂の精神破壊者”が一緒だけど、それは己の精神力次第で何とかなるから頑張れ。

「俺が殺されそうなんだか……」

「大丈夫だろう？ お前は撃たれ強いし」

「俺は弾除けかよっ」

「それすらならないかも知れないけどね……お兄ちゃんは」

最後の一言は心に痛いぞ、美鶴。まったく容赦ないね——この妹は。

だが、今のメンバーではこれで行くのがもっとも安全で確実なメンバーだと思う。

俺の方にも”瑠璃”がいるんだ。男だが……な。

「あ、あああ、あの……ぼ、ぼくもいつしよ……なんですか？ ひ

やう——さ、さんご、せん……ぱい」

「ああ、お前も一緒だ。桃姉さんが勝手に決めちまったから、仕方ない」

俺を涙目で見上げている貴美。しどろもどろになりながら困り顔の貴美を撫でまわしている珊瑚。

……楽しそうだな。

すっかり珊瑚のお気に入りのおもちゃと化している貴美。この二人を一緒にしてしまうと、先が思いやられるのであえて離れた。

「では、行くとするか。功治も頑張れよ」
「はいよ。それじゃ、また後でな」

そう言つて、俺達は二手に別れて旗を目指した。

「では、まずは様子を見て、と」

「そんな事しないで、突っ込んだ方が早いよ」

朝にも増して大乱戦になっているな……こりゃ。

「無茶言つなよ。あの状況で乗り込んで行けるほど、俺は体力馬鹿じゃないぞ」

最早、ルール無用のバトルロワイヤル状態のサバイバルゲーム――皆、正気を失い、目が血走って怖い顔をしている。

廊下には総勢30名ほどの生徒が、男女関係なく入り乱れての乱闘中。

男子生徒の上に馬乗りになってタコ殴りにしている女子生徒、あの状況で逆ナンパしようとしている女子生徒、カメラ片手に盗撮紛いの事をしている男子生徒、等々々な奴等がいる。

こういう局面で人間の本性がわかる、て言うけど本当だな。

「あのさ……琥珀」

「何さ？ 兄貴」

俺を見向きもせずに応える琥珀。横にいるから表情が分かるが、目が真剣過ぎて洒落にならない。

……ゲームなんだから、もう少し笑えよ。

現在――俺達は屋上から双眼鏡で廊下の様子を確認しているのだが、あの乱闘には参加したくない。

正直、帰りたいです。桃姉さんの飽き癖のせいで、なんだかとてもない事になっている気がするよ。

「あの乱闘に加わって、勝てるのか？」

「分からないけど……多分、負けないよ」

自信があるのか無いのか分からない事を言っているわりに、笑顔の琥珀。

「無茶苦茶だな……。しかし、やっぱりダメだ」

「なんでよ？」

よほど不満だったのか、俺を睨みつける琥珀の目には殺気がこもっている。

今にも殴りかかってきそうな勢いに思わず怯んでしまった。

「怪我でもしたらどうするんだよ。幾ら強いって言っても、お前は女の子なんだからな」

「ばっ……ば、ばかな事言わないでよ！」

「うがつ、いてえよ！」

真っ赤な顔で俺を叩いてくる琥珀は、照れているのか手加減が丸つきりなし。

……骨が折れるから首は止めてくれ。

俺の身体が壊れるのもお構いなしの琥珀が、

「も、もう！ 行くよ、兄貴っ」

妙に上機嫌に鼻歌を歌いながら立ち上がり、小走りに行ってしまった。

何を考えているのかさっぱり分からない奴だな……。

第22話：午後は優雅に旗とりゲーム（後書き）

ほとんどサバゲーしてませんね（苦笑）

第23話：俺って活躍してるのか？

さて——廊下やってきたが、随分と数が減っていた。

確認出来るのは、数人の生徒だけ。そして、ほとんどの奴がライフポイントの残りが無い。

つまり、勝機はあるわけだ。

「それでは、突っ込むぞ」

「らじゃ！」

「は、はい……」

俺の声に反応しているが、一人は拳で語るぜ的な雰囲気で、もう一人はへっぴり腰。

なんて対照的な二人だよ。

「貴美は俺の後ろに——琥珀は先に行け。援護する」

「はいよっ」

掛け声一番。颯爽と走り出して行く琥珀の後姿は、メイドなのに悪魔に見えた。

「うらっ！　せいっ、とうっ」

トンファを振り廻して憂さ晴らし——もとい、暴れている琥珀の周りには、次々と屍の山が築かれていた。

……援護の必要ないじゃん。

「あちよーっ！　せいやっ、とうっ」

一人で全部倒してしまっただし……。俺って存在感、薄くない？
いてもいなくて大して変わらない気がするよ。なんだか寂しいよ……俺の活躍の場は何処に。

「兄貴——そんなところで、いじけないだよ」

「俺なんて……別にいなくても、大して変わらないんだ」

「うわぁ、うっとうしい」

そんな事言っつなよ、マイシスター。俺だって、たまには活躍した

いんだって。

「それじゃ、旗をもらって、と。ゲットしたよっ」

まったく俺の話を聞いてないよ。せめて俺の活躍の場として、そこだけは譲ってくれてもいいではないか！

だが——こんな事で負ける俺ではないぞ。

「あ、あの……亮先輩」

「なんだ、たかちゃん」

「あ、え……？ た、たかちゃん！」

「ああ、すまん。なんとなく呼んでみただけだ。それで、なんだ？
何故に、名前を呼ばれて顔を真っ赤にするんだ？ その顔で真っ赤になつたら、本当に女の子だな。」

「え、えと……元氣出してください」

「お前はいい奴だな。我が妹とは大違いだ」

「ひゃわっ！ せ、せせせ、せんぱいつ」

「よしよし、いい子だあ」

頭を撫で廻していると、更に真っ赤になっていく貴美の顔。

ちよつと危ない道に迷い込んで、はまりそうな予感がする顔だな。
俺は決してその道には行かないと思うから心配ないか。

「何、やとんじゃ！ 兄貴っ」

「うごぶっ」

後ろからの衝撃で俺は前に飛んでしまった。とても衝撃的ですよ？
体重60ウンキロの俺が飛んだのだからね。

原因も分かっているのだけど、なんで俺は蹴られてるんだよ。

「何するんだ！ この馬妹はっ」

「誰が馬よ！ 兄貴こそ、なに少年愛に目覚めてんだよ！ す、すこしは——い、いもうとも……」

「なに？ なんか言ったか？」

「言っていないわよ。死にさせえ！」

トンファーが一直線で俺目掛けて飛んでくる。怒りに我を忘れていたので、甘いコースだ。

これくらい余裕――。

「あまい――うがつ」

「そっちこそ、あまい。これは、ブーメラントンファーよっ」

「そんなもん、あるか！」

鼻高々にトンファーを握っている琥珀。

ブーメラントンファーとは、恐れ入ったよ。後ろから戻ってくる
とは正直思わないから、避けようがなく後頭部が痛い。

「まあ、旗も取った事だし……一端戻るか」

なんだか妙に疲れたが、作戦は一応成功だろうな――。

教室に戻ると、すでに帰ってきていた功治達が、まったり寛いで
いた。

汚れなどないメイド服を着た美鶴と珊瑚が座ってお茶を飲み、瑠
璃が忙しそうに茶請けを用意している。

どこから調達したのか分からないが、のんびりムード真っ只中だ
な。一人を除いては……。

「りょお……俺は、生きていくほっ」

「……生きてるだろうな。辛うじてだけど――残り、10ポイント
のライフか」

顔中が真っ赤に染まっている功治が、泣きながら俺の足元にしが
みついてくるので、それを足蹴にして払い退ける。

胸のライフポイントは――残り10。

珊瑚達の服装がえらく綺麗なのを考えると、完全なる弾除けに使
われたな……こいつ。

「情けないね。お兄ちゃん。あれぐらいの弾幕は避けないと、軍
隊には入れないよ」

「え、えっと……あれは無理だよ、美鶴ちゃん」

「根性足りない、ボンクラ兄。弾除けすら出来ないとは」
酷い言われ様である。

瑠璃だけは功治の援護をしているようだが、珊瑚と美鶴は冷たい視線を向けている。

聞けば——三十人以上に囲まれたときに、美鶴に襟首を持たれて撃たれまくりだったとか……。

それで、よく生き残ったものだ。

「そっちはどうだったの？ お兄ちゃん」

「あ？ 大丈夫だったぞ。俺はまったく活躍してないけどな」
「まだ、言ってるよ」

琥珀からの冷たいツツコミにも、めげずに頑張ってますよ。

俺の活躍の場はいずこに！ まったく活躍出来なかったので、寂しくて無性に悲しい。

「あら——足元にシロマロとシクマロが仲良くきたわ。なんて、可愛いのかしら……」

「キシヨイ！ お姉言葉を使うなあ！」

「いつてえ……。はっ——俺は何をしていたんだ？」

延髄に衝撃が走り抜ける。何が起こったのだ？ 俺は何をしていたんだ？

「あまりの不甲斐なさに暴走してた。おにい、頭は筒抜けで口からポロポロだからね。プライバシーダダ漏れ」

それは本当ですか、珊瑚殿——俺のプライバシーはダダ漏れなんですかつ！

「キシヨイ」とか言って俺を殴っていた琥珀にも、哀れみたっぷり120%増量の視線をもらってしまった。

「話がズレてるから、戻ってくるよろし。あとちょっとでこれも終わりだから、そこでおにいが活躍すればいい」

俺の前に来て頭を撫でている珊瑚。お兄ちゃん、その気持ちが嬉しいぞ。

「おお……ありがとう、珊瑚。なんて兄思いのいい奴なんだ」

「あう、おにい。髪がくちゃくちゃになる」

やっぱり、なんだかんだ言って珊瑚はお姉ちゃんで優しい奴だな。周りからは痛い視線——特に琥珀と瑠璃からの冷たい視線は、頭から氷をぶつけられたように痛くて冷たい。

珊瑚の頭を撫でている手を止めて、とりあえず作戦会議に戻る事にした。

「それで、あとはどれくらいだ？」

「今更、マジになっても悲しいだけだぞ？ 亮うごっ」

「うっさい。お前は黙っている」

どうやら最後の力を振り絞り、俺にツッコミを入れてきた功治に、トドメに刺したようだ。

哀れなり……功治。この敵は俺がとってやるぞ。

「それで、状況は？」

「お、おれは……無視ですか？」

「おう、気にするな。安らかに眠れ」

もう一撃加えて黙らせる。永遠なれ……功治。一気に二階級特進だ。

「あと残っているのは……二つのチームです。一つは三年のサバゲークラブチーム。もう一つは——」

美鶴が先ほど見てきた事を、冷静に分析している。

一つは、三年生が主体になって集まったサバイバルゲーム推進同好研究会のチーム。

このゲームでは一番の優勝候補だろう。

だが、もう一つはどこだ？ あの午後の激戦を勝ち残れるほどの力——琥珀や美鶴クラスの戦闘力——をもっている奴は他にいないはずだ。だとすると、まだ強敵がいると言う事か？

「ふあっははははっ！ ごほごほ……。見つけたぞ、水上亮っ！」

突然、目の前が光に包まれていた――。

第23話・俺って活躍してるのか？（後書き）

第24話：結局これってなに…？

世界が真つ白だ。

突然現れた謎の襲撃者によって、視界を奪われた俺達は大ピンチ——て、そんな訳はないか。

「ぶっはあははははっ！ 久しぶりの登場だあ」

一際眩しい光を放ち、ポーピングしているハゲ。今更の紹介などいない人物。

『漢と漢の生きる道・愛と憎しみの昼下がり編』を買い、続編の『漢と漢の生きる道・欲望と情事の黄昏編』を購入した馬鹿である。
「なぜ、それを知っている！ 水上亮っ」

「俺の情報網をなめるな」

「ぐぬっ……おのれ！ こうなれば奥の手をつ」

キラリと光るハゲ頭を動かして背中到手を廻す。そしてゆっくりと引き抜く手には一本の剣——。

「って、孫の手かよっ」

「な、なに！ うおっ——いつの間に！ て、倫子何してるんだっ」

盛大なツツコミを入れてしまった。だって、手に持っているのは孫の手。

一昔前に流行っていたあの”猫の手”とは違うが、持つ者に和みの境地を見せると言う幻の名品——『猫の手も借りたいお年頃・ぷにぷに肉球』と呼ばれている最近ブームの孫の手だ。しかも、白毛ヴァージョンはマニア垂涎の一品で、一つ数万円もするらしいが……。

でも、なんで俺はこんな事を知っているんだろう？ いや、気にしないでおこっ。

俺だって、色々と博識——偏った知識ではあるが——と言う事でいいじゃないか。それにして、一人だけ目が異様に輝いている奴がいるが、どうしたものか。

「おにい、あれ欲しい」

「なんでも欲しいがるんじゃない」

「うう……。欲しいの。にゃんこ欲しいもん」

俺の服を引っ張る珊瑚が指を咬えて見上げている。

その駄々をこねる仕草は、昔から一切変わってない。しかも、その姿は一部マニアには馬鹿受けだろう。

現に、目の前でハゲが「はあはあ」と荒い息を吐いて気持ち悪い。

「あ、あの……。よ、よかったら、どうぞ」

「ハゲからはいらない。おにいからほしいの」

これまた身もフタもない事を言うものだ。そんな事を言っではハゲがかわいそう——な訳ないか。

泣いて固まっているハゲは、どう見ても地藏さん。笠でも被せてやろうかと思ってしまうほど、心が吹雪いているのだろう。

頑張っ生きて……ハゲ。そして、うとうしいから二度と俺の前に現れるな。

「いつもすいませんね。このハゲが迷惑ばかりかけて……」

「そんな事ないぞ。それを言うなら、お前も大変だろ？ 倫子」

「分かってもらえますか？ そうなんですよ——このハゲったら」

すっかりハゲ呼ばわりが定着して先輩としての威厳と言うものがまったくない。

手には本来、ハゲが持つはずだったのであろう、ライトサーベルが握られている。

どうしてそんなものがあるのか謎だが、意外と本格的だ。それにしてもハゲは光物が好きだな。

「ところで、倫子。お前達は二人か？」

「はい。このハゲの仲間になる人なんて……。私は情けです」

眼鏡をキラリと輝かせて、ため息を吐いている倫子。相当疲れて

いる様子だが、二人ならそれも領ける。

二人でこのゲームをここまですべて残っていると言う事は、それなりの力量があるのだろう。

「相変わらずね……倫子は」

「そんな事ありませんよ。私は邪魔なものを排除しただけですから」
「それが怖いって言うのよ。ガンマニア——クレイジー倫子」

倫子と琥珀の会話は恐ろしい事を、事も無げになんだかすこい事を言っている気がしたけど？

ハゲにそんな力があるわけがないから、そうすると倫子しかない
と思うていたが、まさかビンゴとは——。

倫子の着ている服は、買ったばかりの新品のように見える。一切の染み等無い、その迷彩服は逆に怖いぞ。

もしかして一番の要注意人物は、倫子なのかも知れない。

「まあ……クレイジーって。私は平和主義ですよ？」

「その平和主義が、命乞いする奴を無慈悲に撃つのがすごいわ」

「あれは指が一ミリ動いたので……。身の危険を感じましたからね」
飽きれ返っている美鶴だが、さも当たり前に戻ってくる倫子に口を塞ぐしかなかった。

誰だって、一ミリくらいは動くって。それで撃たれていては、相手もたまったものではないはず。

しかも、今の倫子はヒットマンのように鋭い眼差しをしている。
こいつを敵に廻すと、^{なぶ}廻り殺しにされそうだな。

「ところで、戦うの？」

「私はもう疲れましたよ。降参でいいです」

そう言って両手を上げている倫子は本当に疲れているのか、顔に元気がない。

「そんな事させるか！ 俺は、水上亮に勝つんだっ」

涙を流していたハゲが吼えながら、ライトサーベルを構えている。

涙ですごい事になっている顔が哀愁たつぷりで、余計に悲しいぞ。

「行くぞ、水上亮！ 愛の一撃を受けてみるっ」

「寒すぎるぞ、ハゲ！」

何が愛の一撃だ。

見る——誰もが寒くて固まっているではないか。お前は頭と一緒に、ギャグもダダすべりだな。

すべりの帝王…… フリーズ・ツルツルキングって改名したらどうだ。

「うるさいっ、俺のライトサーベル——漢の愛裸舞友アイラブユーをなめるなっ」
「変な名前つけるなっ」

そのネーミングセンスもすべっているぞ。それでも気持ち悪い笑みを浮かべているハゲは、本気のような。

ライトサーベル——絶対にあの名前は呼べない——を身構えるハゲに、悲しい同情の視線が突き刺さる。

「逃げた方がいいぞ、ハゲ」

「なにを！ 俺が貴様如きに恐れをなす訳が——」

そこまで言っただけで気付いたようだ。すぐ横に鬼がいる事に——。

「え、あ…… ちょ、ちよつと待とうね。よく、話し合おうよ…… 倫子くん」

「問答無用です。少しは大人しくしなさい」

「ぎゃあああああ！」

まさしく、問答無用に撃ちこまれ行く弾丸。どこから出したのか、倫子の手にはライフルが二丁。

乱暴と名前が良く似た人もビックリな乱射っぷりだな。「ひゃひゃひゃっ」って、奇声を上げて撃ち続ける倫子の顔は正気とは思えない。

「地獄に落ちろ、ハゲっ」

とても怖い地獄絵図を見たような気がするよ……。

まさしく鬼がいた。

あまりの事に俺は閉口して、瑠璃と貴美は抱き合って泣いていた。子供にはちよつと刺激が強いR18指定並のグロさに、自然とモザイクが掛かっているように見えるが、

「目を細めるとモザイクの向こう側が……」

「わぁ、すごい……。て、違うわ！ アホな事して遊ぶなっ」

「おにいは、こうやって深夜にテレビの前で……」

「ぐふっ——何故、そ、それをつ」

モザイク柄の板を持って遊んでいる珊瑚から、爆弾を投げ付けられてカウントダウン中に爆発したような不意打ちを喰らってしまった。

なんでこいつは、そんな事を知っているんだよ。

あれだけ細心の注意を払って、皆が寝静まった深夜にこっそりとヘッドホンまで用意したのに——。

「……兄貴」

「……亮先輩」

冷たい視線に負けないようにしよう。「最凶、最強、最狂」な妹達に射殺されそうな視線を向けられると、勝手に涙が出てきます。

「さぁ、宴の続きを始めようぜ！ ひやははははっ」

未だにライフルを構えて乱射している倫子が、叫びながら出ていった。

……キャラが完璧に変わっているぞ。

この世のものとは思えない凶悪な面構えになっていた倫子が出て行って数秒後、廊下に響き渡る悲鳴が多数。

無関係な人が巻き込まれている……南無。

「さて……これはどうしたものか」

「そのまま問題なし。それより、どうするの？ おにい」

「どうするって言ってもね。俺には無理」

無残に転がるハゲといつの間にか巻き添えを喰っていた功治が、真っ赤に染まっていた。

そして、俺にはあの鬼の形相をした倫子——裏倫子とも呼べばいいのか？——を相手にする勇氣はない。

「負けでいいじゃん。あれは——」

つまり、これ以上は無理です。頭の中で天使さんと悪魔君が、

”素直に負けましょう”

”……そうだな。痛い嫌だし、汚れるのはもつと嫌だしな”

午後の優雅なお茶会をしながら話し合いをしていると、いつものアロハなチャイムが鳴り出した。

『ちゃおっ！ 絶好調大胆不敵超絶テクの校長、もちちゃんです』

意味が分からないが、とても上機嫌な桃姉さんの声が聞こえてきた。

……超絶テクって、響きが妙にエロいぞ。

『たった今、優勝チームが決定しましたっ！』

「は……？」

『全校一万校の頂点に——』

「それは違うだろう」

きっとノリノリでマイクを振り回しているだろう、桃姉さんの姿が目に見えかぶ。

それにしても俺達の他にまだサバゲーチームが生き残っているはずだが——。

『サバゲーチームは戦闘不能の為、失格となりました。強いねえ……倫子ちゃんは』

「まじで……？」

『瞬殺よ。それもう、見事の一言ね。でも、倫子ちゃんのチームはリーダーが戦闘不能なので、失格なのよね』

「は……？」

足元には真っ赤なタコのようなハゲが寝転んでいる。胸のライフポイントは”0”となっているが、こいつがリーダーだったのか？

『——と言うわけで、亮ちゃんチームの優勝でえす』

高らかに宣言して、このサバゲーは終わっていた。なんて呆氣ないと言うか、消化不良な幕切れなんだよ。

だから、このゲームはなんだったんだよ……。

第24話：結局これってなに…？（後書き）

なんだか、わからないままにサバゲー終了（苦笑）
次からは、ぼちぼち更新していきます。
さて、何を書こうかな…。

第25話：時計選びは慎重に…。（前書き）

さて、いつの間にやらお休みです。

第25話：時計選びは慎重に…

——今日は休み。

なに？ サバゲーはどうなったかだと？ そんなものは知らなくていい。と言うより、聞かないで。

ちよっとトラウマになりそうな事が、最後の最後にあっただよ。

「それにしても、うるさいな」

「しょうがないよお、お兄ちゃん。時計屋さんなんだから」

隣でぴよこぴよこと動くツインテールが喋っている。新手の宇宙人かと思えば、瑠璃だった。

何？ このネタは始めにやっただと？ そう言えばそうだな。俺とした事が、なんたる不覚。

「しかし……なんで折角の休みに、こんなところに来なくてはいけないんだ」

「それは兄貴が目覚し時計を壊すからだよ」

瑠璃の反対側にいるアホが、冷やかな声を上げているが、それは違うぞ。

「壊したのはお前だ。クラッシャー琥珀」

「……うっ」

言葉に詰まっているようだが、事実だ。

大体、休みの日にこんな所に来るハメになったのは、琥珀のせいだ。

昨日、俺をいつものように起こしに——俺は迷惑なんだが——来た琥珀は、いつものように暴走。

そして手元にあった時計を壁に投げ付けてクラッシュ。哀れ……

その命を無くした時計さんは、天国に旅立ったのである。

「おにい、これは……？」

「おう？ って、なんだそれ？」

俺の服を引っ張ってくる感覚に、後ろを向くと変な顔と珊瑚がいた。

「可愛いでしょ？」

「いや……可愛いと言うか、なんとと言うか」

珊瑚の持っていたのは、キャラクター時計。しかし、そのキャラクターは言葉で表すのが難しい変な顔。

三角形の眉に糸目、出っ歯、青いスーツがなんとも渋いが、何を元に作ったのか分からない顔をしている。

「怒る歯科医師君。ば〜じょん2」

「……歯医者かよ。しかし、なんでスーツなんだよ？」

珊瑚は面白そうに頭についたボタンを押していた。

『おらっ、口開けんかいっ！』

て、どんな歯医者だよっ！ これまた、子供が絶対に歯医者嫌いになるような代物だな。

「ほら、可愛い。おにいの部屋にぴったち」

「いらねえ」

珊瑚がボタンを押すたびに『うひょひょひょ』とか『俺のドリルはなんでも貫くぜっ』とか、かなり物騒な事を言っている。

絶対にこんな声を朝から聞きたくはない。

「お兄ちゃん……これはどう？」

「ん？」

今度は、瑠璃のようだ。

手には白い普通の丸時計で、見た目は普通。だが、瑠璃が側面のボタンを押すと、おかしい事が起こり始めた。

「な……！」

「どう？ お兄ちゃんに、ぴったりだよ」

どうして白い丸時計が、ロボットに変形するんだよ？

普通なら時計の原形が残りそうなものだが、瑠璃の持っている時

計には面影すらない。

アニメに出てきそうなかっこいいロボットだ。これなら、普通におもちゃで売っても大もうけ出来ると思うけどな。

手に持っているビームサーベルは時計の針で、シールドは上に付いていたベル。

そこだけは、時計なんだと実感が出来た。

「もう一度押すと……」

「うおっ！」

時計が更に変形を始めた。しかし、さっきと形がまったく違い、何故か四角になっていた。

さっきは丸かったぞ？

「多重変形機能付らしいよ」

「違う意味で変形しているぞ……これ」

更に驚いたのは、白かったのに赤くなっている。どういう原理で色が変わるのか、俺にも教えて欲しい。

「兄貴、これどうよ？ 面白いよ」

「なんだよ？ うおっ」

横から呼ばれて振り返ろうとした俺の顔を何かが掠めていった。

「琥珀、危ないだろ！」

「鎖分銅付き目覚し時計『寝込み上等っ！ 必殺天誅』だって」

「あぶねえよ！」

激しく、それだけは却下する。未だにブンブンと振り回される鎖分銅は、伸びたり縮んだり。

そんなものでは、起きる前に永遠に寝てしまうだろ。これなら琥珀の鉄拳の方が数段マシだ。

「それとね、これにはオプションで鎖鎌が……」

「いらねえよ！ 死んでしまうだろうがっ」

「我が俤だね、兄貴は。それじゃ、こっちの吹き矢は？」

「もつと嫌だ。それ、起こす気ないだろ？ 永眠が目的だろ、絶対

に」

使えない時計だ。と言うより、そんなものを売ってるんじゃないよ。

誰が買っただよって——売れてるしっ！

美人のお母さんと可愛い坊やが箱を持ってるよ。待って——それではあなたの息子さんが！

——これでお母さん二つ目だよ？

——ごめんねえ、前のは壊しちゃったの。

とんでもない会話だ。しかも、この美人ママさんは壊しのかよ！
店員さんは顔が引きつって、何とも言い難い表情をしている。

この時計を壊せるとは、琥珀以上の力を持っているに違いない。
人は見かけによらないって事か……まだまだ、俺は世間を知らない
と言う事かな。

「それで、どれにするの？ おにい」

いや、どれにするって俺は普通の時計でいい。そんなデングジャラスでクレイジーな時計達は絶対にいらさない。

そして、お前達のセンスもいらさないから、俺が自分で選ぶ。

「おうっ、ギマイスター亮。何してんだよ？」

「なんだ？ グマイスターへっぽこ弾除けにもならないボンクラ功治」

「なんで増えてるんだよ。しかも、長いし……」

「泣くな、うっとうしい」

泣き崩れる功治は、迷惑な程に邪魔でどうしようもなかった。突然現れたかと思えば、こいつは何をしているんだよ。

「こんにちわ、亮先輩」

「おう、美鶴。お前もいたんだな」

「はい。今日はお兄ちゃんの目覚まし時計を買いに来たんです」
「そうか……」

多分、俺と同じ理由だろう。功治も大変だな。

そこだけは、同情してやるよ。そして美鶴が持っている時計は、琥珀の持っている時計とそっくりで、とても嫌な予感がする。

「あ……これですか？ これは『お忍び遂行 散れ、血桜満開』です」

「最早、時計の名前でならない気がするぞ。——って、ボタンを押すなっ」

ポチッとボタンを押す美鶴の顔が一瞬、悪魔に見えた。次の瞬間、複数の煌くモノが一直線に——って、俺かよ！

「うおっ！ あ、あぶねえ……」

「あ、すいません！ 亮先輩を狙うつもりは、ミジンコほどもありませんでしたのに。ほほほっ」

最後の乾いた笑いはなんだ？ しかも「ほほほっ」って、お前はどこぞのマダムか。

後を向くと、壁に突き刺さっている金属製の物体——あれは、くないのようだ。あんなモノが刺さったら、間違いなくあの世行きだぞ。

「これにはオプションで、手裏剣と毒針……あとは、火筒？」

「それは、時計じゃねえよっ！」

最早、時計の域を遥かに越えた殺戮兵器になっている。こんな物が何故、普通に時計店に売っているのだ？

間違いなく、兵器ではないか。もしくはアサシンを養成するつもりかよ。

「そうですか？ 今まで我が家ではこれを使っていたんですよ。では、失礼します」

「ははは……そうですか。それではごきげんよう」

あの時計を持って、普通にレジカウンターまで行く美鶴に、本日二度目の衝撃的な顔をしている店員さん。

……心中、察するにあまりある。

それから会計を済ませて来る美鶴は至って普通の顔をして、功治の襟首を捕まえて連れて出て行った。

功治が「俺は殺されるっ」って、泣き喚いていたが見送る事しか出来なかった。頑張れ……功治。

「それでは、ボクはこれを――」

「それじゃ、私は……これを買って」

「じゃ、あたしはこれに、このオプションを……」

おいおい……妹達よ。かなりデンジャラスな会話が聞こえるぞ？
時計如きで俺の人生を左右されるのは、勘弁して欲しいぞ。

「あ……。あれが、いいかも」

「え、あれって……。この店で一番強力なものだよ？」

「でも、あれなら兄貴も一発で起きるかも」

今度は、三人の会話が物騒なものにチェンジしていた。この店で一番強力？　今、美鶴が買ってたものより、強力なものがあるのかよ。

恐怖よりも好奇心が勝ってしまい、それとなく目で珊瑚達が見ている方を追ってみると、まさかの物体が目飛び込んできた。

黄色の下地に黒い三角形。その中に何やら妖しいマークが描かれて、一発で危険なものだと判断出来た。

「えっと、『これで世界を一発で起こしましょう！　メルトダウン五秒前』……おにい、これがいい」

「よくねえよ！　俺を殺す気か！　て、その前に世界が滅びるわっ」

俺、目覚まし時計はいらないから、平和な朝が欲しいよ……。

第25話：時計選びは慎重に…。(後書き)

おそろしや…ノープラン。

次は、何を書こうかな…(笑)

第26話：とりあえず、文化祭を…。

この学校はどうやらお祭りが好きらしい。

毎日、どんちゃん騒ぎをして楽しんでいるが、学生の本分である勉強は何処に？ と、そんな事を気にする俺様ではないが、いい加減やばいと思う今日この頃。卒業出来るのかね……。

「それでは今から文化祭の出し物を決めたいと思いまあす」

教卓の前で意気揚揚と手元にあるプリントを読んでいるのは、我がクラスの——誰だっけ？

「委員長だ！ 酷いわ、水上君」

「キシヨイわ！ そんな目で見るな……えっと、田中っ」

だからそのお姉言葉を止めるつつて言っているだろうが。

そして、しなをつくって俺を見るな。それと名前がない奴なんて、沢山いるだ。そんな奴等に名前を付けていたら、大変な事になるんだよ。って、神様さくしゃが言ってたぞ。

「取って付けたような名前は止めてよねっ！ 私の名前は……そうよ、神田よっ」

「なんだよ……今の間は？ お前、自分の名前を勝手に考えただろうがっ」

「うつさいわよ。私の名前ぐらい、ちゃんと役場に言ったらあるわよっ」

確かに生まれてもう17年だ。出生届けくらいは出しているだろう。しかし、それに名前が書いているかは疑問だ。

「市役所じゃねえんだわねえ……。役場って、しょばいなあ」

「そこにツツコミのかよ。しかも、地が混ざってキモイ。それで、文化祭ってなんだよ？」

「文化祭は、文化祭よ。水上君——もしかして、馬鹿？」

「お前に言われたくねえよ！」

冷やかな視線が委員長だけではなく、周りかも降って来る。珊瑚までそんな白い目を向けるんじゃない。

寂しいじゃないか。俺の味方はここにはいないのか！

「文化祭は先月やったばかりじゃないか」

「それはそれ、これはこれ。決めたのは、校長だよ」

「また、あの人がよ……。まったく、学校を遊び場にするなって言うんだ」

委員長は黒板に何やら書き始めて、教室内は賑やかになり始めていた。

桃姉さんは何を考えているのか知らないが、文化祭を二ヶ月続けをするのは、どういふつもりなんだろう。

多分「私も文化祭で遊びたいのよ」って言うのが、一番の理由だろうと思うけど……。

「それでは、文化祭はこれより一週間後。出し物は『兄妹丼』と決まっています」

「一週間っ！ しかも、すでに決まっているのかよ。さっき、決めるって言うてなかったか？」

「いちいち驚かないの、水上君。これぞ、ご都合主義の成せる技。それでは、説明しますねえ」

キャピキャピと喋っていく委員長をよそに、クラスメイト全員は見事にひいていた。

——桃ちゃん王国文化祭。

黒板に書かれている文字は、見間違いでもなくそう書かれていた。なんだか頭が痛い事だ。そして、出し物の『兄妹丼』は簡単に言うて喫茶店。名前だけを聞いて、危ないものを連想してしまった俺は末期だろうか？ 大体、兄妹丼と書いて「ラブラブカフェ」と誰が読めるんだよ。絶対に漢字の使い方を間違っているって。

ただ一つだけ特殊なのが、これが学年ごちゃ混ぜでやる出し物——つまり、一年から三年まで合同でやる大掛かりな出し物だって事

だ。

そして、クラスの組み合わせが恐ろしいまでに陰謀めいたものを感じさせる。

一年は瑠璃のクラス。そして、三年が鈴音先輩のいるクラス。絶対に神様が何かしたとしか、思えない組み合わせだった。

何も起きない事を祈るばかりです。

「それでは、みんなで頑張っていこう！」

高らかに拳を上げて気合の入っている委員長の声だけが、教室に響いていた。

「あたし達だけ、仲間外れだよ」

「そうだねえ……。何か寂しいねえ、琥珀」

二人で手を取り合って「ねえ」って言っている琥珀と美鶴。ちょっと百合が入っているが、二人がやると気持ち悪いな。

確かに二人は瑠璃とは違うクラスだから仕方ないと言えば、仕方がない。しかし、俺が決めたわけではないので、それを俺に文句言われてもどうしようも出来ない。

「それで、私達は何をすればいいのかな？」

「そ、そうですね。何をすれば、いいんでしょうかね……。僕達はあ」

これまた二人で手を取り合っている瑠璃と貴美。なんだか、姉妹と見ているようで微笑ましい。

それにしても、なんで皆して集まってくるのかね？　そして、いつものように授業がないこの学校は大丈夫か？

「それで、結局何すればいいの？　おにい」

「俺に聞くなよ。知る訳ないだろうが」

俺の服を掴んで引っ張ってくる珊瑚だが、俺もさっき聞いたばかり

りなので知るはずがないだろうって。

「それじゃ、役立たずなボンクラ兄。お前が調べる」

「酷っ！ 俺の役目はそれだけかっ」

「それすら出来るか心配……」

「うぐっ……ひっく」

泣いている功治は置いて、勝手に盛り上がっている教室内は、早々と文化祭の準備を始めていた。

我がクラスが担当するのは、キッチン周りと食器収集らしいが、俺達って疎外感ばっちりなんけど……。

「あ……。水上君」

「なんだ？ 神田川委員長」

「一文字多いよ！ 赤いタオルはマフラーにしないよっ」

「……微妙に間違っているぞ。そして、そのボケを思いつくお前が凄い」

そしてなんの用だ？ 俺の名前は誰でも気安く呼べるような安っぽい名前ではないぞ。

名無しの諸君よ——て、皆して俺を睨むなよ！ もしかして、本当に俺の思考はダダ漏れなのか？

「コホン……。水上君にはカフェのウェイトレスを探してもらっ、スカウトマンを任命するっ」

「は……？」

ビシッと俺を指差す委員長は、アホみたいに真面目な顔をしている。

これって本気で言っているのか？ もしかして、桃姉さんの陰謀か？

「拒否権ナッシング！ 校長の指名だし……伝言で「私も選んでねえ……って言うか、私もする」だそうですよ」

「……強制かよ。しかも、参加する気満々なのかよ……桃姉さんは」
頭が痛いぞ。俺の日常は段々と荒んでいったような気がする。

それにしても何を考えているのか、相変わらず分からない人だ…
…あの人は。

「それじゃ、頑張ってね。それとクラスからウエイトレス希望者は、あれだけよ」

「あ、え……へ？」

委員長が指をさしている方向には、我が妹達。そしてその他大勢の有象無象。

名も無きエキストラがいっぱい立っているが、要するにほとんどの女子がウエイトレスをするって事だ。

「おにい……スカウトマンって、もしかしてエロい事するの？」

「するか、アホ！ その前に俺は何をすればいいのか、さっぱり分からん」

「とりあえず、暗がりと呼んで……身体検査？」

「だから、そんな事はしないって言ってるだろうがっ」

珊瑚の暴走を止めなくては、話が進まない。どこぞのいかがわしいビデオではないのだから、そんな事するなよ。

そして、いつの間にか俺の手には、紙とバインダーとペンが握られていた。

「はぁ……とりあえず、これに名前書いてよ」

俺、いつも流されているよな。俺の人生って、これで本当にいいのか……。

第26話：とりあえず、文化祭を…。（後書き）

お久しぶりの更新です。

脳内会議の結果、ありきたりな文化祭ネタでいこうかと…。

でも、ただの文化祭のはずもなく…。

どうなるかは、私にも分かりません。

行き当たりバッタリなので、さてどうしましょう（笑）

第27話：お前等、やる気満々だな？

どんどん書き込まれ行く名前を見ながら、こんな名前があるんだと感心していた。

「金田」「田中」「斎藤」などは分かる。だが、「瀬鳥玖せとりく」「伝で子恋慈んしれんじ」など意味が分からない名前まである。

「瀬鳥玖」って、あの以外と高い国産の車なのか？そして、「伝子恋慈」に関しては最早、何も言う事はない。そんな名前があるか、て思ってしまう。本当に名前って不思議だね。

「さて……全員、書けたか？——って、誰だ……これを書いたのは？」

「それはボク。何か問題でもあり？」

「近いよ……顔が」

珊瑚の顔を避けて紙に目を落として、もう一度確認するがやっぱり変な名前がそこにはあった。

「なんで、貴美の名前を書いているんだよ」

「面白そうだからでありますよ、スカウトマン」

「いや、敬礼せんでもいいぞ。福永貴美——なんで、「たかよし」を「たかみ」と読ませる？」

「それも、面白そうだから？」

面白半分かよ。なんだか源氏名みたいだぞ？

貴美の名前を書いているって事は、あいつをウェイトレスにしようと言うのかよ。

……それは、たぶん似合い過ぎるだろうって。

下手な女の子より可愛い顔をしているからな。これで貴美が道を誤ったら、どう責任を取るつもりだろうか。

それにしても、名前を書かれた張本人がいつの間になくなっていくのだが、どこに行ったんだよ。

「貴美はどこ行っただ？」

「さつき、瑠璃と一緒に出て行っただから、教室に帰っただんじゃないの」

「そうか……。で、お前達はまだいたんだな？」

「悪い？ 兄貴」

不満そうに口を尖らせて文句を言っている琥珀は、美鶴と一緒に
になって井戸端会議をしている。

「いたっていいじゃないのねえ、美鶴」

「そうだよ。でも、そろそろ帰った方がいいかもね。何するか決
まってるかも知れないし」

頷き遭っている二人だが、ふと疑問が湧いて来た。

「お前等、何するのか知らないのか？」

「ん……。？ 知らないよ。だって、秘密だよん、て言われたからね」
「そうですよ。私達はクラスでは除け者なんですよお」

泣き真似をして抱き合っている琥珀と美鶴。

こいつ等、もしかして嫌われているのか？ それとも、ただ単に
邪魔だから排除されたのか？

あまり深く追求するのなんだかわいそうなので、この辺で止
めておこう。

「それじゃ、俺は仕事をしてくるよ」

「気をつけて、おにい。ほら、これがボクの身代わり」

「おう……。って、シロマロじゃないか。今までどこに行ってたんだ
？」

俺の頭に乗って「おみやる」と鳴いているシロマロ。朝探したと
きは姿を見せないと思ったら、珊瑚のところに行ったのか。

ちなみにシクマロはさすがに家で留守番中。こいつは未だに何の
生物が分からない物体だ。いや、生物かも妖しいけど……。

「それでは、行ってらっさい」

手を振っている珊瑚だが、俺はその態度に微妙に違和感を覚えま

すよ。

いつもなら、何が何でも付いて来たがるはずなのに、素直に留守番？ 絶対に妖しいぞ。

「……何を考えている？ 珊瑚」

「別に何も考えてませんすら。気のせいづらづら……これ、カッラ」

そう言って、近くに座っている男子生徒の頭を徐におもむろ掴み上げる——と、スポって抜けた。

宇宙人もビックリだぞ！ て、こいつカッラだったのかよ！
何が起こったか分かってないらしい男子生徒、基、渡辺が頭に手を置いて顔面蒼白になっている。

こいつ、実はハゲだったんだな。知らなかったよ……。

「違うんだよ！ 家がお寺で……お寺で——そんな目で見るなあ！」

「お、おちつくんだ！ お前のハゲはみんな知っているぞっ」

「そんなハゲなあ！」

「お、おいっ、渡辺っ！ そこは「そんな馬鹿なあ」だっ！ そして、そっちは窓——」

盛大な音をたてて、窓の外に消えていく渡辺。

割れた窓ガラスから吹き込む風に、珊瑚の持つカッラの毛が揺れていた。いや、皆ってそれはお前達、友達連中の事だろ？ 俺達ただのクラスメイトは知らなかったのだから、目が点になっている。それにしても珊瑚は、何気に酷い事をしているよな。今、一人のクラスメイトが天に召された……アーメン。

「とりあえず、俺は行ってくる。後はお前等で頑張れ」

数人のクラスメイトが、窓の下を覗き込んで騒いでる以外はとても冷静だ。

随分と冷めたクラスメイト達——俺も人の事は言えないけどな。そして、文句を言いつつスカウトマンをしようとしている俺。

……意外と俺って、真面目だな。

たぶん、子供の頃から培ってきた桃姉さんの言葉に出来ない関係が物語っていると思う。

さて、どっちのクラスから行くとするかね……。

考えて辿り着いたのが、瑠璃達のクラス。

予想以上の賑わいが廊下まで響いている。この中では一体、何が行われているんだ？

開けるのが怖い、ここは一つ、覚悟を決めて開けないと何も始まらない。

「それで、これは一体……？」

俺の周りには、女の子の群れ。アイドルコンサートの追っかけみたいな声が聞こえている。

咽返りそうな女の子特有の甘い匂いが何とも言えないが、決して変態ではありませんよ？

「なあ……瑠璃」

「な、なに、おにいちゃんっ！ きゃあ、おさないでよあ」

「おうつ！ 誰だっ、俺の身体を触っているのはっ！ そこは止めてっ」

まるで満員電車のすし詰め状態を味わっているサラリーマンの気分だが、色んなところに柔かいものがぶによん、ぽによん、ぷるんと当たって気持ちいい。

ここはハーレムですか？ うはうはパラダイスですか？

それにしても、この歓迎ぶりはちよつとビックリだな。女子に比べて、クラス内の男子共の視線が痛い事、痛い事……。

「すまんがウエイトレスを希望する人は、これに名前書いてくれ」

とりあえず落ち着かせて話を聞いてもらっ事にしたが、それでも目がキラキラした女の子達は怖かった。

『はあ〜いつ』

仲良く皆が返事をして、山羊がエサに群がるように集まってくる。

「なあ、瑠璃……」

「はあはあ……なあに？ おにいちゃん」

「お疲れ。ところで、この歓迎ぶりはなんだ？ 俺は芸能人かよ」

床にへたりこんで肩で息をしている瑠璃が、俺を見上げて涙を浮かべていた。

……泣くような事なのか！

そんな瑠璃を見つめているハイエナ共が荒い鼻息を振り撒いているが、俺がいる事を忘れるなよ。

兄の前で変な事してみろ？ お前等全員、月までぶっ飛ばしてお仕置きするぞ。

「お、おにいちゃん……って、どう言う訳か……意外と、結構なんだけど……人気あるんだよ」

「日本語がむちゃくちゃだぞ？ って、俺が人気がある？」

不思議そうな俺を見上げる瑠璃の顔が、少し赤くなっている。しかも、不満そうに頬が膨らんでフグになっている。

何を怒っているか分からないが、俺って人気あつたんだな。これは驚き以外のなにものでもない。だって、人気があるのに今まで一回も告白された事も、ラブレターをもらった事もないからな。

「わ、わたしとしては……ちょ、ちよつと、不満なだけどっ」

「なんでだよ？ 俺としては、嫌われるよりはいいぞ」

「そ、それは……わたしも、お……おにい、ちゃんが、きらわれるよりは……」

しどろもどろになりながら、必死に話している瑠璃の様子が面白い。

「だけど、これ以上は妹はいらんっ」

「え……？」

「妹はお前等だけで十分だ。これ以上に増えたら、俺の身が持たん

ぞ」

俺の言葉に呆気にとられている顔をしていた瑠璃だが、何がおかしかったのか急に笑い出した。

さすがの瑠璃の行動に俺もびっくりだ。

……とうとう壊れたか？

お腹を抱えて笑っている瑠璃を眺めながら、病院は近くにあっただろうかと考えていた。

「ふふふ……そ、そうだね。お兄ちゃんには私達がいるもんねえ」

「うおっ、ちょ……瑠璃っ」

不意に立ち上がり、俺に抱きついてきた瑠璃。

いつのも瑠璃とは違う大胆な行動に驚いて、対処できなかった。

瑠璃のも意外と柔かいんだな……。

なんて感想を持つていると、周囲からは冷たい視線が容赦なく降り注ぎ、特に男子から刺さってくる視線は言い様もない程に冷たかったが、

「お兄ちゃんには、私がいるもんねえ」

とてもご機嫌な瑠璃はまったく感じてない様子で、俺に抱きついたまま夢の世界に旅立っているようだ。

それにしても、この構図は非常にまずいですぞ。

色々と変な誤解をされてる構図とは、まさにこの事——決して、近親ななんかではないですよ！

俺達の関係は至って健全な兄と妹の関係なんですよ。それを瑠璃に説明してもらわなくてはいけないのに……。

お願いだから帰って来てくれ、瑠璃！

第28話：妖気漂う教室へ…。

酷い目にあった。

まさかの猛烈歓迎ぶりに、危うく永住権を申請しそうになったよ。それにしても、俺って意外と人気があるんだな。

「ふう……」

一年の教室から逃げるようにして出てきた俺は、廊下を歩いていった。

瑠璃の予想外な暴走のおかげで、一年男子共に氷のような視線を飛ばされたので、お返しを微笑み返してやったら泣かれてしまった。……そんなに俺の笑みは怖いのかよ。

それにしても、倫子の姿がなかったが？ それに貴美も姿が見えなかったが、どこに行っただろうか。

まあ、いなかった奴を気にしても始まらないので、ここは先に進むでしょう。

そして、俺は三年の教室の前やってきたのだが――。

中から異様な妖気を感じるのは、何故でしょうかね。中で何が行われているのか知らないが、入るのがとても嫌です。

出来れば今すぐ、回れ右をして引き返したい気分だ。と言うか、関わりたく空気を扉の向こうから、これでもか、と感じてるのだ。とりあえず、ドアを少し開けて中を確認。そして閉める。

……入りたくねえ。

正直な感想だ。

ここには近寄ってはいけない。よい子は絶対に近寄ってはいけない場所なんだ。

「何してるのぉ……亮くうん」

「ふおぶ……」

視界ゼロ。

真っ暗です。不意打ちを食らって、真っ暗で何も見えません。でも、これは手だな。

決して、ぶるるん、ぽよん、ぷにょん、なものではありませんが、気持ちいい感触だよ。

……やっぱり、人肌っていいな。

柔かくてスベスベで、女性らしい艶のある艶かしい手。手に欲情する手フェチがいるらしいが、今ならその気持ちが分かりそう。

決して男のごつい手では再現不可能なこのスベスベ感を是非——。なんて、今は考えている場合ではなかった。

「お仕事ですよ、鈴美先輩」

「そうなんだあ。じゃあ、私もお手伝いしてあげるよあ」

「はあ……。その前に、手を退けてもらえませんか？」

「あらら、ごめんねえ」

楽しそうな笑い声が聞こえて手を退いていき、後ろから回り込んできた鈴美先輩は満面の笑顔だった。

こんな事を俺にする人は、我が妹達以外にはこの人しか考えられない。それに声を聞けば、すぐに分かる。

それに今になって思い出したが、珊瑚が俺に付いて来なかった理由——唯一の弱点である鈴美先輩に会いたくなかったのだから。

俺もあまり関わりになりたい人ではなんだかね……。

「それじゃ、教室に入ろう、おお」

「え、あ……」

勢いよく開け放たれるドアから、ピンク色の妖気がねつとりと足元に絡むように流れ出てきた。

そんな事にはお構いなく入って行く鈴美先輩は、俺の方へ振り返って手招きをしている。今はあの笑みが悪魔の笑みに見えるよ。

出来れば限りなく入るのを遠慮したい気分なのだが、それは無理なんだろうな。覚悟を決めて――。

「……うわぁ。痛い……色々痛いぞ」

正直な感想だ。

頭の両側が、ズキズキと痛む。そんな光景が教室いっぱいに広がっている。

「りょおせんぱあゝいつ」

「たすけてくださあゝいつ」

幻聴も聞こえる。

少し休む必要がありそうだな……俺。保健室のベットは空いてるかな？

何故に貴美と倫子の声が聞こえてくるのでしょうか？　ここは三年の教室だから、一年生がいるはずもない。

不思議な事もあるもんだな。

「せんぱゝいつ、僕はここにいますからあ」

「私もここにいますう」

やっぱり、気のせいでも幻聴でもないようだ。

しかし、目の前で繰り広げられている妖しさ120%の変なシヨ―はなんだって言うんだよ。

「これは……一体？」

正直、なんだか分かりません。

賑やかな声と歓声。そして、賑やかな衣装。

三年の先輩男子達は、カメラ片手にシャッターを切りまくり、女子達は楽しそうにカーテンで囲まれた小部屋に消えていく。

それにしても、この衣装はどこから調達したんだろうか？

「可愛いでしょう？　演劇部とコスプレ同好会から、ちよつと拝借してきたのよんっ」

「それって……泥棒では」

きょとんとしてしている鈴美先輩は、「そうとも言つかもねえ」とお気楽な返事が返ってきた。

なるほど、だからお姫様のドレスから巫女の衣装まであるんだな。そしてチアガールからサンバの衣装までと、どう見ても普通ではないもので、なんでもござれの状態。しかし、これを文化祭で着るつもりなんだろうか？

出来れば、普通のウエイトレスの制服にしてもらえませんかね。

「はう、せんぱあゝいつ」

「りよおせんぱいつ」

「うづつ」

首と腹にモロに激痛を受けて、危うく臨死体験をしてしまった。

三途の川の常連だけは嫌だぞ。

痛む首を下げて見てみると、可愛いネコミミさんと巫女さんが俺を見上げていた。

「もすかしてえ……貴美と倫子かあ？」

何故か東北なまりになっている俺。あまりの驚きに標準語を忘れて、声が変わってしまった。

可愛い猫耳と尻尾をつけて涙目の——これは貴美か？——が、

「はう……。せんぱい、ごわがっただですう」

「な、なくなっ！ その姿で泣きすぎるなっ」

「あう……ぼくをずでないでえ」

貴美が俺の首にしがみ付いて「えぐえぐ……せんぱあい」と、泣きじゃくる。

そんな勘違いされる事を言うんじゃない！

見る——周りから好奇の視線がビンビンと飛ばされているではないか。お願いだから、写真は撮らないで！

そして白い目で俺達で見ないでください！ 決して妖しい関係では微塵もございませんから。

「……先輩。わたし、私……お嫁にいけないですう」

「お前——倫子か？」

目に涙をいっぱい溜めて頷く、倫子らしき女の子。いつものトレードマークの眼鏡と三つ編みでないので、誰だか分からなかった。

円らな瞳にストレートの髪。よく眼鏡の女の子は外すと可愛いって言うが、それは本当のようだ。

こう見ると、倫子って意外と可愛いんだな……。それにスタイルもかなりいい。

「りよおぜんばい……」

「先輩……」

これは予想外のダブルパンチだ。

貴美がこれでもか、て言うくらいに似合っている。マニアにはたまらない姿だろう。

そして、伏兵が倫子だ。

こいつの変わり様には、俺も驚いた。女の子って、色んな意味ですごいな……。貴美は男だけど。

「あらあら……。モテモテねえ、亮くん」

そんな俺に更に天使が舞い降りる。でも、この場合は悪魔だ。

一瞬にして空気が二度下がって、五度上がった。

説明すると、俺の首に後ろからしがみ付いている鈴美先輩。これはこの人のスキンシップの一つ。でも、俺以外の男にやっているところは見た事がない。先輩曰く「亮くんは、面白いから」と意味不明な答えを頂いた。

それって、俺はどういう意味で捉えたらいいのか、三日三晩悩んだ事もある。だけど答えなんて出なくて、謎のままだ。

その先輩がそうやっているの、男子共の心が固まった。氷のようにな——そこで、二度下降。そして、事の重大さに気付いた男子共の心に嫉妬の炎がバーニング——そこで、五度上昇。以上、説明

終わりです。

この人は自分がモテるという実感が、まったくないのだろう。だから、俺がこの後、どんな目に遭うかなんて知らないだろうな。

「いいなあ……私も仲間に入れてよあ」

「あ、え……いや」

そんな事を言うから、周りの温度が更に上昇してますって。

今では砂漠並みに暑いですよ。まったく、冬だと言うのになんて気温が四十度を超えているんだよ。

最早、この国で観測出来る最高温度を目下、更新中だつて。もうすぐ五十度に到達——なんて、もちろん今までの俺の脳内での話だけ。

本当にそうなっていたら、みんなとつくに干からびているよ。

「あ、あの——先輩は、何をされるんですか？」

「ん……私？ 私はねえ、秘密だよあ」

お願いですから、俺から離れてください！ 俺が本当に色々大変な事になりますから。

「知りたかったら、ちゃんと部活に来てね。りよ、う、く、ん」

「ひょうつ！」

なんで耳を噛むんですか、先輩！

その瞬間、一気に下がっていく体感温度。これは脳内温度ではなく、マジで寒い。

周りを見ると、赤い涙を流しながらこちらを睨む男子の集団。

『ぶつ殺すっ！』

綺麗なハモリが聞こえてきたところで、俺は教室からワープして廊下を疾走する。

出来れば、失踪したい。と言うか、させていたきたい。

仕事なんか、やってやれるか！

後ろから地響きを立てて迫ってくる集団が口々に、
『俺にも噛ませろっ』
なんて叫んでいるが、それだけは絶対に嫌だ！

第29話：俺の周りはやっぱり変だね

やっぱりこの学校は、アホばかりだ。色々なアホ達が馬鹿な事をやって、楽しんでいる非常識な学校。

常識人の俺には辛いです……。

「おにい……食器はこれがいい」

「却下」

即答で却下。

これ以上議論するつもりはないので、俺は珊瑚の手からソレを取り上げて元の場所に戻す。

途端に俺を見上げて泣きそうな顔で、ぽこぽこと叩いてくる珊瑚。なんだか、父親と娘みたいな光景だな。

「おにいのいじわる」

「あのなあ……。どこの世界に、文化祭の出し物にお子様ランチ用の食器を使うところがあるんだよ」

「こっ」

と、床を指しながら、頬を膨らませて俺を睨みつける。

拗ねてご機嫌斜めになってしまったようだ。

ぐりぐりと俺の制服を突いてくる珊瑚は、口を尖らせてむっと口を尖らせているが、こいつの感性がさっぱり分らない。

今——俺は、自分の教室で文化祭の出し物で使う食器選びの真っ最中である。

俺のスカウトマンの仕事は、すでに終わった。だって、あのウエイトレス参加希望用紙に名前を書いてもらうだけの簡単な仕事だったはず。

普通に考えれば、一時間もあれば終わる仕事なのに……色んな騒ぎに巻き込まれて、丸一日掛かってしまったのだ。

——だから、今日は次の日なんですよ。

すでに文化祭準備を始めて二日目なのです。なのにですよ……奥さんちよつと聞いてくださいよっ！

我がクラスは、何も進んでないのです。

一日目はあれだけ張り切ってやっていたクラスメイト達は、二日目の今日はすでに失速気味で、ダレまくり。

持続力ないね……こいつらは。

「委員長……もう少し、まともな食器は無かったのかよ？」

「仕方ないでしょ……。急いで探し回って見つけたのが、これなんだから」

俺達の前に並べられている食器達。

机を数個並べてその上にテーブルクロスを敷き、本番さながらにセツトしてみるが、如何せんバラバラの食器達ではなんともシックリこない。同じのが最高でも六個しかない現状では、どうしようも出来ないけどな。

後はほとんどが一点物の食器達で、組み合わせがまったく出来ないの、頭が痛い事だ。

「出来れば、全て同じ食器の方が見栄えがいいのだが。……かと言って紙皿は勘弁して欲しいけど」

「水上君って、意外と凝り性だね」

「……うつせえよ。俺は半端が嫌いなだけだ」

このお姉をどうにかしていいでしょうか……？ 神様。俺は、この手を真っ赤に染めてしまいそうです。

「おにい……これ」

「だから、それは——って、なんだ、そりゃ？」

俺の服をくいくいと引っ張る珊瑚が手に持っていたもの。

——これって、珈琲カップだよな？

でも、どこかで見た事あるんだけど……で、これ俺のじゃないか！
なんでこんな所にあるんだよ。

「これも、おにいのだよ」

「うおつ！　なんだ、こりゃ——って、よく見りゃ……これ全部、俺ん家の食器じゃないかつ！」

とりあえず、こっそり逃げ出そうとしている委員長の神田川容疑者を確保。

「神田だよつ、「川」はいらないだよ！　そして、離してえ……暴力はんたあいつ」

「うるせえよ。てめえ……これをどこから持ってきたんだつ」

「え、えつと……。どこからつて——ひゃあ、ごめんなさい！　こ、こうちようが、こっそり水上君の家に侵入してつ」

また……あの人かよ。

全て白状した委員長は、泣き崩れるようにして机に突っ伏した。

「出来心だったんです。家には、可愛い我が子がお腹を空かせてつ。と一人芝居をしているが、これは放置プレイしよう。とりあえず、これで事件は解決だ——って、違う！

あの人は、何考えてるんだよ。と言うか、いつの間に家の合鍵なんて作ったんだ？　そう言えば、前にも家に侵入した事があったが——。

「それは、ピッキングで……」

それは泥棒で犯罪だつて。

どこでそんなスキルを手に入れたのか、絶対に使う場所を間違えている。いや、使つてはいけないのではないか？

しかしよく見るも何も、本当に我が家の食器達だよ。俺の食器から珊瑚、瑠璃と琥珀の分まで全てある。

「……つたく。最初から、やり直しかよ」

「おにい……。これがいい」

「だから、それは家の食器だつて……」

未だに食器を選んでいる珊瑚が、手に取っては楽しそうに眺めている。

だから、それは家の食器だつて何度言ったら分かるんだよ。選んでも仕方ないんだぞ。

まったく桃姉さんも、疲れる事をしてくれる人だ。とりあえずは、これを持って帰ってもらわないと、晩御飯が食べれないではないか。

「はっはははははっ——ごほぐほごほっ！　はぁ……息が続かねえ」

突然、馬鹿笑いと咽返るアホな声が聞こえてきた。

毎度同じ登場パターンで、よく飽きない奴だな。俺なら少しは変えるぞ？

しかし、今回は笑いすぎで咽返ってしまい、名乗るチャンスを潰している。このままスルーするか……。

「ちょ、ちよつと待つてよぉ！」

「なんだよ、ハゲ」

上半身が裸で、下にはスパッツを穿いた芸人を彷彿とさせるポーズで、固まっているハゲ。

あれは、なんとか二時何分だったかな……？　忘れてしまったぞ。現れたのは、やっぱりハゲ。間違はなく、ハゲ。

「どう見ても……ハゲ」

ナイスだ、珊瑚。

その一言が、相手の心を抉り地獄のどん底に落としていくのだ。

あの泣きそうな顔を見る——あれは相当効いてますね。

ハゲに問答無用のクリティカルヒット。

それでこそ我が妹……いい子だから、頭を撫でてあげよう。

「あう……。おにい、気持ちいい」

「いい子だぞ、珊瑚」

「おにい……出来れば、違う所も」

何故に胸を突き出すんだよ。頬を染めて俺を見てもダメ。唇を舐めてもダメ。

そんな色っぽい表情をしても、ダメなものはダメ！

お兄ちゃんは例え、天地が引っくり返ってもしません。多分……

ね。

「お、おのれっ！ 変態兄貴、水上亮っ！ その手を離せっ」

「うるせよっ！ 変態が変態って言うなあ。この変態薔薇色ハゲがっ」

「ぐふっ……それを言うな。俺は、帰ってきたんだっ！ この日の当たる世界にっ」

だから、眩しいのかよ。

今日はまた一段と蓄熱式が有効活用されているようで、眩しさ倍増だ。

例によつて、俺達はサングラス着用。クラスメイト達は、すっかり目をやられて大変そうだけど知らない。

こいつ、もしかして眼鏡屋と眼科の刺客じゃないだろうか？

「さあ、勝負だっ！ 戦え、水上亮っ」

「やだ」

「へ……？」

珍しく呆気にとられた顔をしているハゲが、どうしていいのか分からずオロオロしている。

「こんなの予定にはないよ」って顔をしているが、俺はそんな事は知った事ではない。

大体、こいつと戦う理由なんて俺にはないのだから。

「お前、俺に戦いを挑むより……男を磨いてこいよ」

「う……！」

「お前の目的は俺じゃないだろう」

珊瑚の背中を押して俺の前に立たせると、真っ赤な顔をして俯いてしまったハゲ。

あれだけ酷いフラれ方をしたのに、まだ好きだとは恐れ入ったよ。こいつも本気なんだな。

「……分かった。もう一度、出直してくる」

「いや、二度と来るな」

「うるせえ。俺はお前に勝つんだよっ」

俺を指さして軽く笑みを浮かべて、教室を出て行くハゲ。

爽やかなつもりだろうが、気持ち悪いだけだぞ。そして、二度と来るなよ……俺はお前の相手は疲れただけなんだから。

「ハゲはうつとうしい……ぺっ」

お前の気持ちは、どうやら報われないようだぞ。

「おにい……」

「な、なんだよっ」

突然、俺に抱きついてきた珊瑚が俺の制服をしわくちゃにしている。

ハゲもいなくなったので、視界は良好。と言う事で、周りからは痛い視線がガンガンと飛んできます。

今は皆さん——武器を持っていますからね。ノコギリ、ハンマー、釘……とてもお近づきにはなりたくない代物を持っています。

そして、そんな目で睨まなくてくれ。俺の目から水がこぼれそうだよ。

「ボクは、ここがいいの」

その言葉が意味するところなんて分からない。

……ここってどこだよ？

俺にしがみ付いて「ここ」って、どういう意味だよ。だけど、そんな事をゆっくり考えている暇はないようだ。

『ぶっ殺すっ、ギマイスター 亮っ』

いつの間にかすっかり囲まれているよ。

その先頭で涙を流している馬鹿が一人。随分前は俺って確か尊敬されてなかったか？

それが、少しの間に犯罪者紛いの扱いだ。酷い格差があるのは、どうしてでしょうかね。

「ちくしょう……なんで、いつもお前だけがっ」

「泣きながら来るな、功治っ」

「もう、お前なんて大嫌いだあ」

子供が泣き喚くようにしてノコギリを振り回す功治の周りは、次第に赤く染まっていく。

巻き添えを喰らったクラスメイト達よ……永遠なれ。

「おのれ……よくも仲間をっ」

「お前がやっただろうがっ」

「問答無用っ！ 野郎共、やっちまえっ」

何故、時代劇風になっているんだよ。

全員「へいつ」なんて言っつて、鍬^{くわ}だの鋤^{すき}だのを持って——百姓一揆かよっ。

「待ちやがれっ、亮っ！ 少しは、俺達にもその妹パワーを分けろっ」

「何の事言ってるのか、さっぱり分からんねえよっ！」

涙を流しながら追い駆けてくる功治とクラスメイト男子共。面白半分の女子まで一緒に追い駆けてくる。

なんなんだよ、このクラスは——。

「俺が何したって言うんだよ！」

虚しく響く俺の声が、廊下を木霊していた……。

第30話：俺は大人の世界へやってきた

不思議な光景が、俺の前に繰り広げられている。

とりあえず、逃げ出していいでしょうか？　と言うか、俺をここから出してください。切実なお願いです。

それが出来なければ、俺は助からないだろう。

「どうかな……？　似合うかな？」

俺の前でくると廻っている桃色全開の頭をした怪しい人——桃姉さんが、可愛くウインクをしていた。

そして姉さんが着ているのは、ウエイトレスの制服。

この人……本気でやる気だよ。とても上機嫌で、見ているこっちが怖いぐらいの笑顔をしている。

ただ今、校長室にいます——と言うか、連れて来られた。

いきなり後頭部を何者かに殴打され、気付いたら桃姉さんの膝枕でご厄介になってました。

……簡単に言うと、この人に誘拐されて来たのね。

でも、膝枕は最高にいい仕事でした。弾力、温もり、匂い……決して変態ではない、と大声で叫んで言わせてもらう。

膝枕は男の浪漫だ！

おっと……話がズレたので元に戻すが、今は桃姉さんのストリッブ紛いのものを、かれこれ三十分も開催中。

今着ている制服で十着目。しかも色違いばかりで、目がうっかり太陽を見てしまったようにチカチカしている。

「もう少し、短い方がいいかな……。ねえ、亮ちゃんはどう思う？」

「出来れば……もう少し長い方が」

「むう、それじゃ亮ちゃんを、悩殺できないじゃんっ」

そんな事はしないでください。お願いだから、俺の平穩をこれ以

上崩さないで……。

今のスカートだって、ギリギリのラインなんだよ？

これ以上短くしたら、穿いてないのと一緒に思うが。これでは空腹の狼さんにエサをばら撒いているのと、一緒だ。

「でも……これぐらいのチラリズムが、男心を攪るのかなあ」

「ぶっ！」

こっちを向いて屈かがまないでくれよ——桃姉さん。しかも、胸の前で腕を組まないで。

胸元がかなり広く半分出ているのと変わらないのが、この制服の特徴。絶対に桃姉さん特注の品だと思う。

さすがに誰も着ないと思います……このイメクラ衣装は。布地は普通の半分以下、肌の露出は半分以上。

全裸よりエロティックで、俺も大変です。何がって？ 俺の理性とズボンが——って、何を言わせるんだ。

「むう……でも、なんか違うなあ。よし、次はこれで」

「も、もういいだろう……姉さん」

机の上に置かれている制服の山を漁っている姉さんの後姿は、狩人のようなオーラが漂って怖い。

今の内に、ここから逃げ出すとするか……それしか、生き残るチャンスはない。

そう思い、ソファから腰を浮かすと同時に、耳を劈つく電子音がいきなり鳴り響き、何かが俺に向かって飛んできた。

「うおっ！ あぶねえ」

「あ——動いたらダメだよ。亮ちゃん用の捕獲センサーが働いているからね」

「つんなもん、作るなあ！」

「だってえ……。そうしないと、亮ちゃん逃げるんだもんっ」

可愛く身体をくねらせてもダメだって。そんな危ないものは、今すぐ電源をオフしてくれ。

大体、桃姉さんが俺を強制的に連れてきたんだ。逃げるのは当たり前だって言うんだよ。

しかし――

「怖え……」

足の間に刺さっているボウガンの矢がキラリ、と光る。これが、俺を捕獲する為の武器って事かよ。

あと数センチ先には、俺の大事な――考えただけで、冷や汗が流れてくる。

……生きているって素晴らしい。

頬を膨らませている桃姉さんは、子供のように拗ねている。お願いですから、精神的に成長してよ。

「さて、次はこのスクール水着で……」

「それはウエイトレスと関係ないでしょ！」

「え……？」

ダメだ……この人。

すっかり何をしているのか、忘れているよ。ついでに俺の存在も忘れてくれると嬉しいのだが、それは無理だろうな。と言いつつ、本当にスクール水着を掴んでいる桃姉さんが嫌だ。しかも、ご丁寧に胸元に名前まで縫われている。

「つて、なんで「水上桃子」やねんっ」

「ん……？ これは亮ちゃんと結婚したら、羞恥プレイで着ようかと思ってたの――きゃっ」

真っ赤な顔をしてスクール水着を揉みくちやにしている桃姉さんは、妄想の世界に一気にダイブ。

頭が痛い……一変、死んで生まれ変わっていいでしょうか？ 今度は、平穏な人生を歩めるように、周囲の人選は自分でしたい。

一体、どんなプレイを想像して”ソレ”を用意したのか、何を期待しているのか分からないが、色々と先走り過ぎた。

「却下だ、そんなもんっ」

「むう……亮ちゃんは、スクール水着は嫌いなんだあ」

「いや、そう言う問題じゃなくて……」

「それじゃ、これはどう？ 幼稚園のお遊戯服」

「こちら、胸に名札——もちろん、「水上桃子」名義——を付けた縦縞のお遊戯服を手に持って、首を傾げている姉さんの目はマジだった。」

「それでお願いします。……なんて、言うと思ったか！

「なんでマニアックなものばかり用意しているんだよ。俺を一体、なんだと思ってるんだ。」

「それとも、定番の紺色ブルマかな？ やっぱり、男の夢で裸エプロン？ ううーん……究極の女体盛り？」

「桃姉さん……道を外し過ぎだよ。大体、俺を呼んだのは別に理由があるんでしょ？」

「目の前で服を脱ぎ出した桃姉さんを止めて、聞いてみる。」

「下着姿なのは、気にしないで。と言うより、ここで止まってくれたのが奇跡です。」

「ここまで脱ぐのに一秒も掛かってませんからね。白のレースがとても眩しい輝きを放っています。ここまで全開だと逆にエロスを感じるのは俺の感性が麻痺したんだろうか？ それとも、本当の俺はマニアックな男なのか！」

「えっと……ねえ」

「話を始める前に、お願いですから服を着てください。必要なら土下座でもなんでもします」

「ええ——この方が亮ちゃんのケダモノが暴れ出すでしょ？ やん、えっち」

「お願いですから、どうか止めてください。そして、俺に平穏な毎日をください。どうか、お願いします。」

「むう……仕方ないなあ」

「文句を言いながらも、服を掴んで腕を通す桃姉さんが着たのは——ワイシャツ。しかも、それ一枚。」

「どう？ 可愛いでしょ」

「もう……何も言えない」

前屈みにグラビアアイドルばりのポーズを決めて、上機嫌な桃姉さん。そして、頭の痛い俺。

クルリ、とその場で廻っているワイシャツの裾から覗く太ももと、白のレースがとてもエロティック。

一枚羽織るだけで先ほどまでなかったエロスを感じる。これほどまでに破壊力を増すとは、正直恐れ入った。

恐るべし……ワイシャツ効果。ちよつと俺のケダモノが、暴れ出しそう。

「やんつ、亮ちゃんたら……目がえつち」

「だったら服を着てよっ！ 下をちゃんと穿いてよっ」

「むう……これは朝の定番だよ？ 起きたら「あ、な、た……朝よ。ちゅっ」ってするのが、私の夢なのっ」

そんな夢は捨ててください。

嬉しいけど、俺で妄想するのは勘弁してください。俺の精神が色んな意味で壊れそうですから……。

「ノリが悪いなあ。まあ、いいわ——それより、えつとねえ」

後ろを向いて自分の机を何やら漁っている桃姉さん。少しは片付けたらどうなんだろう？ 散らかりすぎて、視も無残なものだ。

そして、その後姿で腰を振るのは止めて欲しい。チラチラと見える白いレースが目奥でチカチカと痛いから。しかも今まで気付かなかったけど、後ろって”T”の字になっていたのね。これはお子様には刺激が強すぎるって。

「あつたあ——えつとね、亮ちゃんにこれをやって欲しいの」

差し出された一枚の紙。

そこに書かれている文面と不思議な絵。俺に一体、何をしろと？

「亮ちゃんにしか出来ない事だよ」

「こ、これは……」

その紙書かれているのは、俺としては予想外。

絶対にしたくないが、目の前にいる人は「うんと言わないと、帰さないわよ」って顔をして俺を見ている。

多分、本気なんだろうな。

でも、少しでも抵抗をしてみる。俺のささやかな抵抗の軌跡を見
てくれ。

「無理だよ……これ」

「そんな事ないよお、亮ちゃんなら出来るよ」

潤んだ瞳で見られても俺は、絶対に「うん」なんて言わないから
な。

「無理だつて」

「むう……。そんな事言つと、服脱ぐよっ」

「つて、脅しかよっ」

ワイシャツのボタンに手を掛けて、今度は「脱ぐよ、脱ぐよ」つ
て目をして俺を見ている。

絶対に脱ぐ気満々だよ。いや、もしかたら脱ぎたくて仕方ないの
か？

それにしても、この紙に書いている内容は絶対に俺には出来ない。
小さくてもプライドはあるんだ。

「亮ちゃん……小さいの？」

「それ以上は言わないでください。色々と問題のある発言なので」

桃姉さんが余計な発言をする前に止めないと、俺が持たない。

どこがとか、何がとか、そんな事は突っ込まないくださいね？

さて、桃姉さんが暴走してしまう前に、話を進めていこう。

「……なんだよ。この、白歯の王子様つて」

紙に目を落とすと、そこには王子様のデザイン画が綺麗に描かれ
ている。

青を基調とした光沢感ばっちりのサテン生地。足は白タイツで、

キザキザのスカートみたいなやつ。これで腰に白鳥の頭があれば、コントの衣装だ。紙に全て詳細に書かれているので、読んでみた。絶対にこれだけは着たくない。と言つか着れない。

それとツツコミどころが、もう一つ——「白歯」ってなんだ？

「白馬」じゃないのかよ。

「かつこいいでしょ？」

桃姉さんの美的センスを、俺は疑うぞ。

これをつつこいいと言えるのは桃姉さんと「これは、おいしい」
と思える若手芸人ぐらいだ。

「無理、絶対に無理。俺には着れない」

「そつかあ……。折角、盛り上げようと思ったに」

「盛り上げるって、なんだよ？」

そう聞くと姉さんは、これまた一枚の紙を取り出して俺に手渡し
てきた。

——初耳だぞ、これは。

「何、これ……？」

「文化祭の最後にする予定の原案よ。これは、絶対にするかね」
紙をよく読み、俺は絶句した。

……アホだ。

痛すぎるぐらいに、アホ丸出しの内容だぞ……これ。俺は絶対に
参加しない。

「さて、頑張っていきましょうねっ」

一人やる気満々の姉さんは、ワイシャツの袖をまくり吼えていた。
だから、服を着るよ……桃姉さん。

第30話：俺は大人の世界へやってきた（後書き）

どうも、お久しぶりです。

今回は全編、ほぼエロネタで走ってしまったのです。

ストーリーなんてない話ですが、そろそろ終わりの近づいています（笑）

さて…どうやって終わらせようかな（滝汗）

第31話：地下で色々ありました

さて、怖い事になりました。何が思っているでしょうが、怖いのですよ。

俺、大ピンチっ。

「無いなあ……。これも違うし、それは足りないし」

「兄貴、どうするんだよ」

珍しく弱気な声が聞こえる。

俺の制服を掴んで、少し潤んだ目をしている琥珀が、俺を見上げて怯えている。

この光景、俺にとっては身の毛もよだつホラー映画より怖いかも知れない。

「だから、お前は どうして付いて来たんだよ」

「……だって、兄貴の姿が見えたから」

琥珀殿——制服が変な音を立てているので、引つ張るのは止めてくれませんか？

それに周りがよく見えないので、あまりくっ付かないでください。歩き難いので……。

「俺は頼まれたから、ここに来たんだ」

「うう」

だから、制服を掴むなど何度も言っているだろうが。腕をへし折ろうとするな。

さっきから色んなところで変な音がしているんだぞ。

「めしっ」とか「びりっ」とか「ごきっ」って音がしたから、そろそろ俺の身体も最後かな。

「ふう……。付いて来たものは仕方がないが、邪魔はするなよ？」

「……う、うん」

怯えきった目で何度も首を縦に振る琥珀は、俺の腕を締め上げて

いく。

——折れる、折れるって！

「しかし、まさか……お前が、暗いところを苦手だとは」

「しょ、しょがないでしょ！ あ、あたしだって、にが、にが、苦手なものくらいはあるわよっ」

怯えていても、威勢だけは十分。

今、俺達がいるのは家庭科教室備品庫。どう言っわけか、地下にあるのだ。

それも地下迷宮並に広い——訳はなく、広さは教室二つ分くらいだ。その中に古今東西のありとあらゆる食器や陶器、その他諸々の骨董品などが置かれている。教科書や美術館で見た事のあるような物も混ざっているが、本物か？ 温度の変化が少ないので地下は保存には最適だと、何かの本で読んだがなんか違う気がするんだけな。何故、俺がここにいるかと言うと、「食器が人数分揃わないので、揃えて来い」との神田川委員長の勅命を受けて仕方なく、ここに来ている訳です。

懐中電灯を渡された時は意味が分からなかったが、その意味をすぐに理解した。

……電気、点かねえ。

地下に入って電気のスイッチを何度やっても一向に点かない蛍光灯達に軽い怒りを覚えて、懐中電灯を点けたらこいつ、琥珀がいた。思わず絶叫しそうになりました。ついでにちびりそうになったのは、秘密だ。

暗がりで行きなりこんなのが現れたら、誰だって驚くってものだよ。

「しかし……こつも暗いと探し難いぞ。桃姉さんに言って、蛍光灯を換えてもらおう」

「そ、そうだね」

歩き難い。とてつもなく歩き難い。

「琥珀、そんなにくっ付くなよ」

「だ、だって……」

お願いだから、アームロックで折ろうとはしないでくれ。「みしっ」って言つてのが、とても痛いよ。

それに本来なら柔らかいもの当たりそうなものだが、腕にこりこり当たっているのでも痛い。

何故に、ぷにぷにではない？ まさか、そこまで筋肉か？

「そんな訳ないでしょうがっ」

「いだ！ ごほごほ、だから殴るな！」

顔を真っ赤にしている琥珀が、ゴンゴンと俺の胸を殴って息が出来ない。とてつもない怪力だ。

お前は一体、何万馬力だ？ 俺は妹にアイアンアームを持った覚えはないぞ。

「……お！ 食器発見」

「あ、あにき……それ、骨董品だよ」

隣から聞こえる琥珀の呆れた声に、食器を手にとって見てみると確かにそうみたいだ。

食器を置いている棚には、ご丁寧に「骨董品、触ったら殺すよ。て言つか、死ぬ」と書かれている。

思いつきり命令系な張り紙だ。でも俺、触っちゃったよ。

「殺される……のか？」

「さあ？ でも、兄貴は簡単には死にそうにないけど」

「その言葉は、そっくりお返しするぞ」

「いらないわよっ」

短気な妹だ。もう少し、カルシウムを取った方がいいぞ？ そうすれば、柔らかいものが出来るかも知れない。

なんて、非常にくだらない事を考えていたら、暗闇の中で何かが光り――

「へ？ うおっ」

「ひゃっ」

目の前を高速で打ち下ろされて行く物体が、床を挟り止っていた。

「……ギ、ギロチン？」

「そう……みたいだね」

はらりと落ちて行く俺の前髪が、風に吹かれて飛んで行く。なんて恐ろしいトラップを仕掛けているんだよ。

琥珀と顔を見合わせて、足元でギリリと音を立ててまだ動こうとしているギロチンの刃を、蹴り倒して逃げた。

絶対、どこかに白骨があるに違いない。だから、電気が点かないのか？ 隠ぺい工作なのか！

「危ない所だな……ここは」

「兄貴、ここから出ようよお」

珍しく弱気な声が聞こえるが、俺は今それどころではないのだ。何故かって……？

「琥珀、お前……動けるなら、コレをどうにかしてくれ」

「嫌だよ！ 触りたくないよっ」

俺との距離、五メートル。懐中電灯に照らされている琥珀は、泣きそうな顔をしている。

うん……俺、大ピンチだ。

俺の腕には、この場所では絶対に自然繁殖しないだろう、と思われる物体が乗っている。

——タランチュラ、マムシ、青大将、その他猛毒を持つ生物がいっぱい。

「た、たすけてくれよ！ 妹よっ」

「む、むりだって！ あ、あたし爬虫類系はまったくダメなのっ」

「なんだと！ 昔は蛇持って、俺を追いつけ回していたではないか！」

「あれは、珊瑚姉ちゃんだよっ」

おや、俺の記憶違い？

てつきり琥珀だと思っていたが、違ったのか。だが珊瑚ならありえそうだな。この星に珊瑚の怖い物は、鈴音先輩以外はいないからな。と、こんな事を考えている場合ではないぞ。

なんとか、この危機的状况から脱出する方法を考えないと、数時間後には桐の窓付きの箱に、菊の花と一緒に入っている可能性がある。

やっぱり暗がりで無闇に走るものではないと、今更ながらに後悔してます。

いきなり走り出して、弓矢トラップ、投石トラップ、色々潜り抜けて来て終わったと思ったのも束の間、天上が開いて降って来たのがこいつ等だ。

——こいつ等……濃い面^{つら}だ。

うむ、ボケも寒いぞ。まともなボケすら浮かばないとは……俺の才能は終わった。

「こうなれば……必殺——」

「な、なにをする気なの！ 兄貴っ」

身体を屈めて前傾姿勢をとり、身体を捻っていく。後ろから心配そうな声が聞こえるが、大丈夫だ。

琥珀、お前を一人にはしないぞ。

「道連れ！」

「うわ！ え、ちょ——こっちに来ないでよ！ 馬鹿兄貴っ」

ゾンビの如く歩く俺から逃げる琥珀を追いまわすのは、意外と楽しいかも知れない。半泣きで俺の前を走っている琥珀が、手当たり次第に柵から取っては投げってくるので、それを交わすのが、

「……あ」

「え？ あ、あにき？」

「……カプって、噛まれた」

「え、ええええええ！」

琥珀の大声に驚いたのか、俺の身体に纏わりついてた猛毒を持つ輩達は暗闇へと消えていった。

大皿が飛んできたので首を横にして交したが、その時首に巻きついてたマムシらしきものが噛み付いた。

「……あ、あれ？」

意識が朦朧とし始め、その場へと膝を付いて倒れて行く俺に近寄ってくる足音が聞こえる。

俺って、これで最後なのか……？

「あ、あにき大丈夫！　ねえ、しっかりしてよっ」

「ああ、大丈夫ぞよ。おや……琥珀ちゃん、いつから三つ子になったんだ？」

「全然、大丈夫じゃないよ！」

目が霞んでいるのか、琥珀がいつぱい見える。すごいな……マムシの毒は即効性なんだ、て初めて知ったぞ。

これなら俺は助からないな。心臓もうるさいくらいにロックなピートを刻んでいる。今にも張り裂けそうだ。

「ねえ……しっかりしてよ！　ねえてばあ、お兄ちゃんっ」

「あ、あれ……幻聴まで聞こえる」

「幻聴じゃないよ！　あたしだよ、琥珀だよ、お兄ちゃん！　ちょっと待ってて、すぐに助けを呼んでくるからっ」

立ち上がって行こうとする琥珀の腕を掴み、首を振る。どうせ、助からないのなら一人で死ぬのは寂しいから嫌だ。

せめて誰かも見とつてもらう方がいい。

「こはく……ありがとう」

「や、やだ……おにいちちゃん、やだよ！　あたしを一人にしないでよっ」

涙を頬を伝わせて泣き始めた琥珀の頭を撫でる。こいつが泣き虫だったとは、初めて知ったよ。

しかし、俺の意識ももう持ちそうにない。血の気が引いて行く感

覚と、飛びそうになる意識。

「……こ、はく」

震え出した手を握ってくれる優しい温もり。朦朧とする意識の中で、身体いっぱいを感じる温もりが俺を包んでいる。

そのまま、俺の意識はすっと消えていった……。

「アナタハ……カミヲシンジマスカー！ ペッ」

なんて毒を吐く神父の声——基、これはシスターと言うべきか？
だって、女性の声だから。しかも毒を吐いているのか唾を吐いているか、「ぺっ」ってなんだよ。

俺は今、自分の身体とご対面している。いわゆる、幽体離脱つてところかな？ 俺が寝ているベットを囲むようにして、瑠璃は座り込み泣きくれて、珊瑚は拳を握り、必死に我慢しているようだ。

功治の胸に隠れるように泣いている美鶴。功治も俺を睨むようにして泣いている。そんな顔をするなよ……みんな。

——つまり、俺は本当に死んだようだな。

いや、あの展開なら「冗談でした」って言うオチを期待したが、見事に裏切ってくれたよ。

しかし、このシスターはなんでマシンガンなんて持っているのでしょうか？ 一番、似合わない物を持っています。

「オ……マダ、イキテマスネ！ アクリヨウタイサンツ」

いきなり口の中に突っ込まれた硬いものから流れ込んでくる苦い液体に、俺の意識は飛んでいた。

「ぐほ！ ごほごほ……殺す気かよ！」

俺一人が叫び、誰も声を上げていない。いや、驚いて誰も声を出せないと言った感じだった。

「誰だ、俺を殺そうとした——って……桃姉さんかよ」

「りよ、りようぢゃあーん！」

「うわ、ぶっ」

いきなり抱き着いて来た桃姉さんは泣いていた。あの変なシスタは桃姉さんだったのか。

そして、あのマシンガンは注射器だったようで、あれから変な液体が出て俺の口に入るのを俺はしつかりと見ていた。

「もう、地下で倒れたって聞いたから、びっくりしたじゃないのっ」「た、たおれた……？」

俺は死んだ訳ではないのか？ それじゃ、今まで見ていたのは一体？

「そつだよ。琥珀ちゃんが連れて来てくれたんだよ」

「……そつだ！ 琥珀はっ」

俺の声に隣のベットを無言で指さす一同。

そこには泣き腫らした目をして、寝息を立てている琥珀の姿があった。さつきから姿が見えないから、気にはなっていたがそこに寝ているとは……。

「泣きながら来るから、びっくりしちゃって——もう少し、血清が遅かったら……」

「……マジで？」

「大マジよ。あのトラップは前の校長が作ったもので、私にも解除の方法が分からないのよ」

怒り心頭な顔をしている桃姉さんは拳を握りしめて、「私が全部ぶっ壊してやるわ」と言って出て行ってしまった。

「おにい、呑気過ぎ。心配して損した」

「そつだぞ、亮。俺の心配代返せ、アホっ」

珊瑚は軽く睨み、頭を一発。功治も思いつきり殴って部屋を出て行き、

「もう……お兄ちゃんの馬鹿」

「りようぜんばあい……よかったあ」

瑠璃と美鶴は、二人で抱き合って泣きながら出て行ってしまった。

「随分と好き勝手言ってくれね……あいつ等も」

苦笑いを浮かべ、隣を見ると寝息を立てている琥珀が身動きみじろをしていない。

「寝相の悪い奴だ——お、ととと」

さすがにいきなりは立つのが難しい。足がフラフラするが、隣のベットに寝ている琥珀の元へと行き、

「……ありがとうな、琥珀」

流れ落ちて行く涙を掬い、頭を撫でて行く。

優しく何度も何度も……。

第31話：地下で色々とありました（後書き）

あと数話で終わる予定が、終わるのか心配です。
これから読み返して誤字脱字を潰して行こうかな…。

それでは、次回の更新までさようならです……。

第32話：味覚と視覚の刺客は我が妹。

文化祭のウェイトレスをスカウトして、学校の地下でママシ君に毒殺されそうになり、散々な目にあってきた。

そして、あの『ママシ君毒殺未遂事件』より、二日——俺はまた、死地へ旅立とうとしています。

もう帰る事はないだろうけど、皆さん……俺の事は忘れないでください。さようなら、そして、ありがとう。

「お兄ちゃん、これ……」

ことり、と俺の前に置かれたお皿からは、とてもいい匂いがしている。

場所は家庭科調理室——そして、俺の前にお皿を置いていったのは、瑠璃。

「ど、どうぞ……お兄ちゃん」

怖々と、俺を見ている瑠璃の瞳がすでに潤んでいる。何を泣いているのか知らないが、泣きたいのは俺の方だ。

なんでこんな事になっているのか、あの時何故グーではなくパーを出さなかったのか、今頃になって後悔している。

——試食係って、聞いてないぞ。

俺と珊瑚は、桃姉さんに呼ばれて校長室に行った。用事なんてとんでない、ただの暇つぶしで俺達はその相手をさせられただけだった。その帰り道、一年の教室で琥珀や美鶴、それに功治が必死な形相で、何やら話し合っている姿が目に入って来たので、聞いてみると、あれよあれよと言う間に、ジャンケンをしよう、と言う話になり、気付いたらここにいます。

そして、衝撃の事実を聞かされて、俺は正直天国へ旅立つ覚悟を決めた次第です。

「大丈夫、だと……思う、よ?」

「なんで、そんなに間をたつぷりと開けて言うんだよ」

「え、えっと……一応、みんなで作ったんだけど、あまり腕に自信がなくて」

瑠璃の後ろに控える一年生女子——瑠璃のクラスメイトである。

こいつ等のクラスは、どう言う因果か料理担当だと言う。あの味覚クラッシャー瑠璃が作る料理は恐ろしい。

普通なら、瑠璃だけが作る訳でもなく、クラスにいる女子達で作るので俺も安心だと思っていた。

だが、その考えは甘かった。

ここにいる女子達は、この二日間間に瑠璃の料理を嫌と言うほど食べたらしく、その結果——味覚が麻痺したらしい。

つまり、味がまったく分からないのだ。ちなみに、俺の横を見ると、久しぶりの登場なのに怯えて震えているシロマロがいる。本能で怖がっているようで、これが危険なものと認識しているようだ。

「う、うむ……見た目は、カレーライスだな？」

「そうだよ。一応、カレーライスを作ったからね」

その一応って言うのはなんですか？ 瑠璃料理長殿。

貴女は、これがカレー風見——風見の「見」は見た目の「見」——のチキンライスとでも、言うのか？

「味見はしてないのか？」

「したよ？ でも、おいしかったよ？」

何故、疑問に疑問で返す？ 瑠璃様。お前は俺に何を食わそうとしているのだ。

「で、では……一口」

スプーンで掬い、口に持って行くが、おかしな事に気付いた時には遅かった。

「ぶほ！」

「お、おにいちゃん！」

口を押さえて、トイレにダッシュ。

……。

……。

いや、失礼。あまりの事に、我を忘れてしまったよ。食した瞬間に軽い記憶喪失になりました。

でも、味だけは鮮明に舌が覚えているのです。これが、味覚クラッシュー瑠璃の真骨頂なのか。

「お兄ちゃん……大丈夫？」

「おほほほ……。だ、だいじょうぶ、だ」

「よかったあ」

胸を撫で下ろしていく瑠璃と同じで、女子一同も胸を撫で下ろしていく。

この女子一同は、これを食べたから味覚が麻痺したのか……それは、とても納得出来る事だ。

「お兄ちゃん、三十人目だからね。そろそろ、まとも味になったと思うよ」

「は？ 三十人目？」

そう……俺は、このカレーライスを口に入れる瞬間に悟った。

この家庭科教室の隅に倒れこむ男子生徒の姿に気付いた時には、スプーンは口の中。

何故、今まで男子生徒が一人もない事に、気付かなかったのか？ それに気付いた時には時すでに遅く、トイレで便器とお友達になっっていた。

「やっぱり……おいしく、ない？」

「え、えつとな……おしくないと言っか、なんとか」

言葉で表すには、独創的過ぎて難しすぎる。一口食べた時は、俺を殺す暗殺者が現れたと思ったくらいだ。しかも、その道具が身近過ぎて逆にリアリティがあり、俺はちょっとした人間不信に陥るところでした。

——まさか、料理で殺されそうになるとは、思ってもみなかった。恐ろしかった。激甘カレーなんて始めて食べたよ。

普通ならカレー独特の香辛料の香りが鼻を擽り、食欲を掻き立て

ていくはずが、何故にチョコレートの香りがほのかにした。

本能が危険と言っているが、腕を止める事が出来なかった。

「瑠璃……これ、具材は何を入れた？」

「え、えつとね——」

瑠璃が教えてくれた食材を聞いて、俺は殺意を覚えた。

色が黒いのは許そう。本物のカレーだって、それぐらいのものはあるだろう。

だが、それが小倉あん——しかも、粒あん——で、具材にマシユマロにコンペイ糖は勘弁して欲しい。

原形なんて、あったものではない。それ以前にカレーの具材でもない。

他にも甘い具材のオンパレードで、俺の味覚をクラッシュしていくに十分過ぎるものだった。

「お前、俺を殺す気か？」

「そ、そんなつもりはないよ」

慌てて否定しているが、それは俺が決める事だ。お前のこの料理には明らかな殺意がある。

カレーだと思って食べた物が実は甘い饅頭でした、なんて言われても頭ではカレー食べてるつもりなんだよ。

口に入れた時のギャップが激しすぎて、脳内が驚いてクラッシュしそうだったぞ。

「こんな激甘カレーなんて、食べた事ないぞ」

「そ、そんなに甘いかな？ あんこは一キロしか、入れてないよ」

いや、そんなに不思議そうに言われて、一キロも入れれば生活習慣病になってしまうよ。

「なんで、あんこをいれた？」

「……隠し味？」

これは隠し味ではなく、全面にこれでもか、と言うくらいに押し出している。

最早、カレーライスではなく、おしること化している。これで、

お餅が入っていれば完璧だろうか。

さすが、期待を裏切らない料理を作る職人だ……瑠璃は。

味覚と視覚のギャップがこれほどまで脳にダメージを与えるとは、新発見かも知れない。

「桃姉さんに言つて、料理担当を変えてもらおう。そうしないと、病人が続出する事は明白だ」

「はう……」

泣いているところ悪いが、みんなの命が掛かっているので、そこは譲れない。

そして、後ろでは嬉しそうに泣いているクラスメイト達がいる事は、今は内緒にしておこう。

さて、これで試食が終わる事はなく、次はデザートが待っている。

一応聞いていたのが、苺のショートケーキと言つて定番の品だったが、瑠璃が作るものに騙されてはいけない。

「は、はい……どうぞ、お兄ちゃん」

「おお……見た目は、”立派”なショートケーキだ」

「はう」

立派と言つ部分をかなり強調して言つたのは、俺なりの抵抗だ。

しかし、本当に見た目だけは店で売っているものと、なんら変わりはない。とてもおいしそうなのである。だが、一度口に入ると、急変するのが瑠璃の料理。まるで魔法のようであり、一種の毒薬。

「ちなみに……味見はしたか？」

「これは大丈夫だよ。ちゃんと、甘くておいしかったから」

瑠璃の言葉に後ろに立つ女子達も頷く。どうやら、彼女達も食べたようで、味は保証されているみたいだ。

ならば、安心して食べれるというもの。

「では——お……甘く、おいしぶぼ！」

「え？ え、お、おにいちゃん！」

ちよつと失礼して、トイレに行きます。

……。
……。
……。

本当に申し訳ない。まさかの味に、俺の味覚は完全にストライキを起こしたようだ。

舌が痛い。何故かって、聞かれる前に一言。

「お前は、俺を殺す気か！」

「そ、そんな事しないよっ」

「なら、なんで辛いんだよ！ この辛さは絶対におかしいって」

「そんな事ないよお——別に、なんともないよ？」

お前の舌が絶対におかしい。このショートケーキは、絶対におかしい味だ。

確かに一口噛むと、口いっぱい広がる甘味は最高だ。しかし、二回目を噛むと異変に気付き、三回目でアウトだ。

いきなり口の中に広がる唐辛子の辛さに、思わず身体中の穴が開きそうになった。

よく考えたら、ここにいる女子達は瑠璃の料理で味覚が麻痺している奴等ばかりだったのを、すっかり忘れていた。

だから、甘いとか、辛いとか、分からないはずなのに……俺って、馬鹿だ。

「お前には、金輪際……料理はさせん。家でも禁止だ」

「なんでよお……だって、おいしいよ？」

「この激辛ショートケーキのどこが、おいしいんだよ！ お前の舌は飾りかよっ」

「むう……そんな事ないもん」

すっかり落ち込んでいる瑠璃が、いじけてテーブルの上に、”の”の字を書いている。

だが、ここで同情しては俺が、みんなが、病気になってしまふ。ここは心を鬼にしなくていけない。

「とにかくダメなものはダメ。お前はもう少し、料理の基本を覚え

てだな――」

「ふえ……ぐすつ」

このタイミングで泣き出すなよ。これでは、俺が悪者ではないか。嫁をいじめている姑ではないか。

俺が悪い訳ではないぞ？

後ろの女子達も、俺にかなりの同情的な視線を向けている。そんな視線はいらないって。

それよりも、この状況をどうにかしてくれよ。

「分かった……もっと、お勉強するね」

「お、おお、頑張れよ」

「うん……だから、協力してね」

意味が分からないぞ？ 瑠璃。俺は何を協力すれば、いいんだよ。俺は料理をするなど、言っているのだ。それに協力するのなら、喜んでしてやろう。

涙を拭い、俺を見ている瑠璃は、

「いっぱい作るから、お兄ちゃんが味見してね」

笑顔で言い切った。

途端に聞こえてくる拍手に、俺はどうしていいか分からなかった。これって、なんだよ？ もしかして、俺ってとんでもない約束をしたのか？

「とりあえず、もう一品あるから……」

俺の前に出されたのは、鍋だった。

何の鍋かは知らないが、最初から妖しい匂いがしているんだが、これはどんな鍋なんだよ。

だから、誰か止めようって気はないのか！

「これは、きつとおいしいよ。多分、食べれるよ」

「なんだよ、その疑問いっぱい言葉は！ そもそも何鍋だよ、これはっ」

「……闇鍋？」

首を傾げながら言う瑠璃は、それでも小皿に取分けて俺に渡してくる。

小皿の中には、決して食べてはいけないものが、ぷかり、と浮いていた。

誰か瑠璃を止めてくれ……俺、殺されるよ。

第32話：味覚と視覚の刺客は我が妹。（後書き）

久しぶりの更新です。

さて…そろそろ、終わりですと言ったのに、中々終わりませんが、多分本当に終わりです（笑）

さあ、最後はどうなる事やら……。

第33話：やっと二回目の文化祭当日。

義妹達に殺されそうになった、この一週間。

それはもう、色々な事がありましたよ。よく身体がもった、と自分で自分を褒め称えたい。

さて、今日は文化祭当日——賑やかな雰囲気の中、開催と相成りました。

「うわぁ……色んな意味で痛いわ」

目を開けているのも辛いので目を閉じるが、その光景が瞼の裏に焼きついている。

まさかこんな事になるとは思ってもみなかった。

教室の一角に作られた特設の厨房の中で、俺は頭を抱えて蹲っていた。

「おにい、現実から逃避しちゃダメ」

「その格好で言われたくないぞ」

目を開けて見上げた先には、真面目な顔をした珊瑚がいたが、その格好はなんだ？

頭に付いているうさぎの耳型の力チューシャ、バニーガールのような服、そして何かの動物のスリッパ。

アホを通り越して頭が痛い。

「これは、可愛い宇宙世界のマスコット……」

「それ以上は言うんじゃない！ 至る所からクレームが来るからっ」

「大丈夫……直訳したから分からないよ」

「直訳だから分かるんだ、馬鹿っ」

ノリノリで着ている珊瑚は、そのまま教室内を駆け回っている。

あれでウェイトレスなのだから、どうかしていると思う。でも、周りにはそんな訳の分からない格好をした女子生徒がいっぱい。しかも、学年関係なくいるものだから、俺達のクラスは滅茶苦茶な賑

わい——男子生徒が沢山——を見せている。

「亮くん、これ取ってえ」

「あ、はい」

俺を呼ぶ声に振り返ると、厨房の奥に巫女さんがいた。

「亮くん、早くしてよお」

「え、あ、はい」

俺に背中を向けたまま、泣きそうな声を上げているのは、鈴美先輩。

背中には、一本の紐がぶらり、と垂れ下がっているのだが、これはなんだろう？

「えっと、どれを取るんですか？」

「背中に入ったグミを取って欲しいのぉ」

「……は？ グミ？」

我が耳を疑ったが、どうやら聞き間違いではなさそうだ。

薄らと白い巫女装束から透けている下着は水色——じゃなくて、何やら丸い物体が一つ見える。と言うか、どうしてグミが背中に入るんだろう？

「なんで、グミが背中に……」

「上に投げて食べてみようとしたら、背中に入っちゃったのぉ」

悶える鈴美先輩が、身体を揺すっていく。

その度に背中に入っているグミがあつちにくるころ、こつちにくるころ、と転がって服の中で暴れている。

どうやっても背中には入らないだろう、と思うのだが、そこは鈴美先輩だ。きつと色んな事があつたんだろう。

そう言う事にしておこう……深く追求すると大変な事になりそうだからな。

「でも俺には取れませんよ。誰か呼んで来ますから、ちょっと我慢してください」

「ええ、亮くんが取ってよお」

「だから無理ですって。俺に出来る訳が——て、ちょっと鈴美先輩、脱がないで下さいよっ」

余程グミの感触が嫌なのか、服を脱ぎ始めた鈴美先輩は止まらな
い。

すでに上の服に手を掛けて、上へと上げようとしていたが、

「あ、落ちた。先輩、グミ取れましたよっ」

「え、本当？ ああ、よかったあ」

「だから、早く服を着てくださいって！」

ころり、と服の間から出てきた物体が床に転がり落ちる。

紫色をしたグミが俺を見て、なんだか悲しそうな顔をしているよ
うに見えるが、食べてもらえなくて残念だったな。

さようなら、グミよ……君の事は忘れない。

なんて現実逃避してみたが、目の前の光景に変わりがない。

水色の布地に包まれた白い肌。それに白い山が二つ、そこに鎮座
してますが、出来れば隠してもらえませんか？

「よかったあ。ありがとうねえ、亮くん」

「それじゃ、俺はこれで」

とにかく、この場を逃げるに限ると思い、踵を返して厨房を出て
行こうとしたが、

「そうだあ……亮くんにこれあげるよあ」

「え？ うぷっ」

いきなり口の中に突っ込まれたものに驚いて固まってしまった。

何が起きたのか、考える前に目の前にある鈴美先輩の顔が、物語
っている気がする。

「おいしい？ 亮くん」

小首を傾げて俺から離れて行く鈴美先輩と、白く綺麗な指。

今、俺の口にあっただのは鈴美先輩の指？ それにこの口の中にあ
るのはグミだろうか、食感が少し固いゼリーのような感じがするの
で、間違いはないだろう。

「お、おいしいです……」

「よかったあ。それじゃ、ありがとうねえ」

嬉しそうな顔をしている鈴美先輩が、そのまま厨房の奥へと消えて行った。

はぁ……俺も持ち場に戻るか――。

そんな教室の中を走り回っている珊瑚。

更に猫やら犬やら、アヒルに白鳥………仮装大会の会場かって様相だな。色々なウエイトレスがいるので、その趣味を持った人達にはパラダイスな場所だろう。役一名、注目されて恥ずかしそうにしているのがいるが――。

「……お兄ちゃん。これ恥ずかしいよお」

「そんな事言うなよ。似合っているぞ」

「笑いながら言わないでよお！」

頬を膨らませて俺の前で抗議しているが、そんな姿も似合いすぎで笑ってしまう。

「もう、脱ぎたいよお」

「だけど、お前が他ののは恥ずかしいからって言ったんだからな。それにウエイトレスを言ったのもお前だ」

「うう……こんな事ならしなければよかったよお」

もじもじ、と服の裾を掴んでいる仕草は、お前にしか出来ない芸当だ。

――幼稚園児のお遊戯服。

「これほど似合うとは思ってなかったぞ、瑠璃」

「むう、こんなの似合っても嬉しくないもんっ」

顔を真っ赤にして頬を更に膨らまして行く瑠璃が、両手を振り回して暴れている。

駄々を捏ねる子供のように……。

子供っぽくて面白いが、俺の妹に手を出したら許さんぞ――変態共。そんな妖しげな目で見るな。

「兄貴、変態丸出しだつて」

幼稚園児の後ろに、体操服を着て腕組みをしている琥珀がいた。なんだか哀れみたつぷりな視線を俺に向けてくれているが、そんなものはいらないぞ。

大体、琥珀は違うクラスなので”ここ”にいる事自体がおかしいのだが、それもご都合主義らしい。

そんなわけで、美鶴もいたりするのはご愛嬌って事で……。

「誰が変態だ。俺は至って普通だぞ」

「目が怪しい」

ジト目で俺を見るな、ボケ。

「お前の服装もどうかと思うぞ？ 体操服って、この中では普通過ぎて浮いている感じがするな」

「そうなのよ……。なんだか、服を忘れて仕方なくこれを着ているみたいで——って、馬鹿っ」

長いポケットコミをありがとう。

琥珀の着ているのは、この学校で着ている普通の体操服。それに大きくゼッケンとして背中に”琥珀”と書かれているが、それがまた浮いていたりする訳なのだが。

「頑張れ、琥珀。お前にはそれが一番お似合いだ」

「そ、そんな事言わないでよっ」

睨みながら叫ぶ琥珀だが、顔は真っ赤に染まり目はあちらこちらを見て忙しい限り。

何をそんなに恥ずかしがっているのか、今更ではないだろうって気もする。

今日一日、俺の精神が持つが心配だ……。

第33話：やっと二回目の文化祭当日。（後書き）

お久しぶりな更新です。

さて、どうやって終わらそうか、ノープランな頭を捻って考えてますが、出てきません（笑）

本気で困ってます……行き当たりばったりで終わるかも、ははははつ。

第34話：この料理って、本当に食えるのか？

アホみたいな時間は過ぎるのが遅い。

まだ、文化祭が始まって二時間を周り、もうすぐお昼になろうとしている時間帯。

時間が時間なだけに、俺達のクラスは異様な賑わい——相変わらず、男子生徒が多いが——を見せていた。

「妹セットの黒が二つ！ それと不思議ドリンク三つ——急いで、兄貴っ」

「はいはいっ！ って、俺は厨房担当じゃねえよっ」
カウンターから顔だけを覗かせている琥珀が、俺に睨みを飛ばしてくる。

なんで俺がフライパンを振るっているんだよ？ さっきまで俺はフロアでウェイターをしていたはずなのに、今はコック帽にかっぽうぎ割烹着を着ているのですが。いや、ウェイター自体も俺の仕事ではないんだけど……。

料理担当は一年の瑠璃達のクラスから鈴美先輩達、三年のクラスへと変更された。そして、鈴美先輩が厨房で一生懸命料理を作っているわけだが、これがまた意外と上手いときたもんだ。

普段の様子からすると、それほど上手い様には見えないのに、隠れた才能ってやつなのかな？ まさしく八面六臂な大活躍——実際にそれだけ腕や顔があつたら怖いけど——なのだが、あの人……サボり癖があるからな。

今も忽然と姿を消して逃亡中なので、俺が代わりに厨房にいるわけだ。理由は「仲良くし過ぎだから、気に入らない」となんとリアクションしていいか分からない事を男子全員から言われた。部活の後輩ってだけなのに……。そもそも、あの部活だって俺の意思ではなく、鈴美先輩が勝手に名前を書いたのだから、俺は被害者なんだ

って。

「へいつ！ おまちっ」

「ここは居酒屋じゃないんだから、兄貴っ」

文句を言いつつ、出された料理を持っていく琥珀。すっかりウエイトレスが馴染んでいる。

ちなみに、今注文された料理の正式名称は『朝起きたら妹が隣で寝てて、あらビックリ！ ちょっといただいてしまおうかと、邪まな思いを胸に巡らせていたら、寝返りをうつた妹から鉄拳をもらい、意識がブラックアウト』というセットメニューの一つ。他にも”妹セットの赤”とあるのだが……これは、一言で言えばブラッディなものだ。まあケチャップがかかっているだけなのだが、これがどうみてもグロい。あれを見て食欲がある奴は、絶対に瑠璃の料理も美味しい、と言うはずだ。

誰が考えたのか知らないが、絶対にふざけ過ぎだ。ドリンクの『不思議ドリンク』に関しては、作り手が目隠しで目の前に置かれている材料を適当にミキサーに入れてスイッチONするドリンクで、あの名前が付いている。

絶対に飲みたくない一品だ……。

「お兄ちゃん」

「おにい」

不意に近くで声が聞こえたのでそちらに向くと、幼稚園児とパクリキヤラがいた。

「なんだ？ 二人揃って」

「あのね、『お昼御飯を交代で食べて』って、桃子姉さんが言うてるの」

幼稚園児——瑠璃が指さす方向には、上機嫌で走り回っている変なウエイトレスがいた。

「……あの人。絶対に、捕まるよな」

「それを言ったら、ボク達も同罪だよ？」

「ごもつともな、ご意見ありがとうございます……パクリキャラ、珊瑚。」

先ほど突如現れたのは、頭のネジが百本単位でぶっ飛んでいるだろう人——桃姉さんが乱入してきた。まさか、本当に来るとは思ってなかった俺は意表を付かれ、ただ茫然とする事しか出来なく、あれよあれよ、という間に桃姉さん目当ての男子生徒共が増え始めたわけだ。この前、着ていた”あの”ウエイトレスの制服なのだが、更に布地の面積が小さくなっている。

ほとんど、水着状態——そんなわけで餓えた狼達がヨダレを垂らしながら、教室内は暑苦しくて男臭い。

「まあ……あれはほつといて、お前等二人で先に行つて来いよ。俺は後からでいいから」

「一緒に行く。おにいが一緒ではないと、面白くない」

駄々を捏ねる珊瑚が、俺の腕にすがり付いてくるが、うさぎの耳が当たっているですけど……。

反対の腕は、幼稚園児が申し訳なさそうに掴んでいるわけで、俺としては仕事が出来ないのだよ。

「今、俺が抜けたら厨房が周らないから駄目なんだって。鈴美先輩も帰ってこないしな」

「ちっ……あの《ピー》先輩め」
はなは

舌打ちしながら、放送禁止も甚だしい事を言うなよ。

「だから、お前等で行つて来い。その後は、誰に交代するかは指示に従えばいいから」

「むう……仕方ないけど、それならおにい^{はなは}は捨てて行くよ」

何気に酷い言われようだな……俺はゴミか？

「お兄ちゃん、それじゃ行つて来るね。帰つて来たら、私が交代するからね」

「それは謹んで遠慮するよ。お前はちゃんとウエイトレスとしなさい」

不満そうに口を尖らす瑠璃だが、病人を出すわけにはいかないの
で、それだけは勘弁してくれ。

そんなやり取りをして、二人は渋々とした表情のまま、厨房を出て行った。

相変わらず、お客は途切れる事もなく来るわけで、ウェイトレスはフル稼働。

どうでもいい事だけど、他のクラスって模擬店やってるのか？

まあ、そんなものはご都合主義の前には無力か。もう最近はこちらに慣れてしまったせいかな、どこで発動しても驚かなくなったよ。

……人間、慣れて怖いね。

それにしても、この訳の分からない料理を何個、いや何百個作った事か。あれはただ単に、作り置きのものに最終的な手を加えて行くだけなのだが、

「……後、少して終わりか」

大きな寸胴に入っていた得体の知れない料理は、もう底を尽きそうだった。

これが終わったら、店じまいなのかな？ そうなると、この文化祭も終わりなんだろうけど。

「あ……亮くん」

「え？ あ——鈴美ぶっ」

不意に聞こえた声に次いで、視界がブラックです。

何が起こったのか分からずに、暴れている俺に、

「ふふふ……引っ掛かったねえ」

「ふがふがつ」

耳元で聞こえる声は、確かに鈴美先輩の声だった。

何かの袋みたいなものでも頭を包まれているのですが、これは一体なんですか？

「ぷはあ……な、なんだったんだっ」

「お待たせえ、帰ってきたよ」

とりあえず袋らしきものを取って、視界を確保。目の前には、満面の笑みを浮かべた鈴美先輩。

そして――

「楽しそうな事してるわねえ……亮ちゃん」

半泣き状態の桃姉さんがいた。

なんだ……この異種格闘技のような組み合わせは。

「そんな服を持って……亮ちゃんには、もっといいものがあるわよ」

「……へ？ 服？ うおっ」

半泣きで半狂乱気味の桃姉さんが俺に詰め寄って、抱き付いてきた。

ますます分らない事になっているので、手に持っているものに目をやると、

「な、なんだ――これっ」

「それは私の制服よお」

「……は？」

恥ずかしそうに頬を染めて、悶えている鈴美先輩がいた。

一体、先輩は何がしたいんですか？　そして、なんでこんなものを……って、俺の顔を覆っていたのは、これ？

「面白そうだったから、つい、ね」

いや、そんな「出来心でやったんです」みたいな犯人風な事を言われても、俺はどうすれば？

「そ、それよりも、桃姉さん離れてよっ」

「いや、私を捨てないでっ」

「え、あ……いや、それは――て、違うっ！　変な事を言わないで、早く離れてくれって」

俺の首――抱きついていいると言うより、締め殺そうとしていると言つ表現がしっくりくるけど――から駄々を捏ねる桃姉さんを引き剥がして、落ち着かせようとしたけど無理でした。

それはもう、手の付けられない子供のような駄々の捏ね様で、来

ている服が弾け飛ぶのではないだろうか、と思うほどの暴れっぷり。俺にはもう無理です……どなたか、この三歳児のお守をお願いしたい。

「亮くん、お昼御飯食べたの？」

「いえ、まだですけど……」

指を頬に当てながら可愛く聞いてくる鈴美先輩だが、あなたがいなかったから俺は”ここ”にいる訳ですよ？

俺を本業に帰してください。

「大体、どこに行っていたんですか？」

「ん？ それは、ひ、み、つ」

つん、と俺の唇を指で突付くと、そのまま厨房の奥へと歩いていってしまう。

……えつと、俺は遊ばれているのか？

「あ——そうだ。亮くん、私の服で変な事しちゃダメよ」

くるり、と方向転換して俺の方へと向き直った鈴美先輩は、それだけを言うともた奥へと歩いて行った。

あの……それは、どういう意味で？

なんとも妖艶な笑みを俺に向けて微笑む鈴美先輩の顔が、暫く頭から離れなかった。

よく分からないまま、俺は「飯を食って来い」と神田川委員長に言われたので、校舎内を彷徨っていた。

大体、自分のところがもつと”まとも”な食べ物を出していればいいのだが、材料やら、色々な裏事情を知っていると、絶対に食べたくない。なので、こうして校舎内を彷徨いながら昼飯を探している。

ちなみに今日は食堂が休みなので、どこかで昼飯を調達しないと、空腹のまま昼からを過ごす事になってしまう。

「ふむ……何を食べようかな」

周囲の喧騒がうつとしいが、とりあえず安全そうな食べ物を探そう。

珊瑚と瑠璃に何を食べたのか聞いておくべきだったな。そう思いながら歩いていると、

「……ん？」

俺の鼻腔を擦る^{くすぐ}香りに惹きつけられるように、足がそちらへと動いていた。

第34話：この料理って、本当に食えるのか？（後書き）

随分とお久しぶりな更新です。

次回は……いつになるか分かりませんが、なるべく早く更新したい
と思っています。

第35話：クレイジー&プリティ

足の向かった先で俺は心底後悔していた。

目の前はそれはもう明るくて何を考えているのか分からない電飾煌く空間で、開いた口が塞がらなかったが。

「へい、らっしゃいっ——て、お前は水上亮っ」

「何をやっている？ ハゲタコ」

「ハゲタコ言うな！」

いや、ハチマキ巻いて口を尖らしていたら、立派なタコだろ？

「で、何してんだ？」

「見りゃ分かるだろうが……たこ焼き焼いてんだよ」

そう言いながら器用にクルクルとたこ焼きを廻していくハゲ。中々の腕前にちよつと感心してしまった。

「それで、水上亮——買うのか、買わないのか、はつきりしろ。そこにいられても邪魔だ」

「……おいしいのか？」

「失礼なヤツだな。それでもバカ売れで、追加で材料を調達したんだぞ」

得意げにうしろを指さしているハゲの頭がきらりと光る。確かにハゲのうしろ——教室の中は全ての席が埋まり、賑やかな声が廊下まで響いて聞こえている。

それにさっきから鼻をくすぐるソースの匂いに、俺の腹も食わせると催促をしているので一つ買っていくか。

「それじゃ、一つくれ」

「はい。ありがとうございます」

不意にハゲの声とは違う女の子のような声が聞こえ、そちらを向くと——

「どうしたんですか？ 亮先輩」

「いや、なんでここに倫子がいるんだ？」

「ハゲのボランテアです」

スパツと言いつける倫子は苦笑いを浮かべながらもお客の相手をしていた。なんだかんだと言って、ハゲを手伝ってやるあたり優しい倫子らしい。

「しかし、その格好は……」

「うー……あんまり、見ないでくださいよ、亮先輩」

恥ずかしそうに頬を染めて俺のしている倫子は、手をブンブンと振っていた。

今、倫子が着ている服はこの前三年の教室で着ていた巫女スタイルで、髪も三つ編みではなく眼鏡もしてない。なので男子生徒がチラチラと倫子を見ては、何やら話している姿が目に入ってくる。さすがに、この姿では風紀委員の倫子だとは分らないのかも知れないな。

「まあ、倫子も頑張れよ。俺はもう行くから」

「あ、はい。ありがとうございました」

にこりと笑みを浮かべ、少し頬を染めて小さく手を振っている倫子に俺も手を振り返したが――

「おうっ、さっさと行け！　いつかお前から珊瑚さんを奪ってやるからなっ」

倫子の隣で光る頭を真っ赤にして、アホみたいに気合の入った声で俺に中指を立て、次いで親指を上から下へ下ろしているハゲ。

だが、すぐさま倫子の腕が動いたかと思えば――

「変な事言わずに、さっさと焼いてください」

「ぐはっ、いだだだっ！」

マシンガンを構えて乱射していた。おお、クレイジー倫子の降臨だ……頑張れよ、ハゲ。

巫女装束にマシンガンなんて、とてもミスマッチな組み合わせだな。まあ、あのハゲの心配をしても仕方ないので、さっさと行くか。未だに聞こえるマシンガンの連射音と倫子の奇声を背に、俺は食べる場所を探して歩き出した。

そして辿り着いた南国——ここはパラダイス。ヤシの木とハイビスカスが一面に咲きほこる……。

「うおっ、どこだ？　ここは」

なわけもなく、中庭だった。

「うむ……　ぼーっと歩いていたら、こんな場所に行き着くとは俺も危ないヤツかも知れないな」

しかし寒い。冬のこの時期にこんな場所で昼飯を食おうと思うヤツなんて——いた。

「……寒そうだな、あの子」

中庭の隅にあるベンチに座り、寒そうに両肩を抱いて震えている女の子を発見。クラスの出し物だろうか、俺達のところとよく似た格好（簡単に言えば、コスプレ）をしているのだが、意外と可愛い子なので驚いていた。

しかし、ネコミミとシッポが妙にプリティな子だな。着ている服はオーソドックスなメイド服だが、少し赤く染まった頬がなんとも可愛い。うむ、ハグがしたい。思いつきりハグをしていただきますを言いたい。いえ、決していやらしい意味では……ないです。

「……あ」

「……ん？」

なんて考えていたら、思いつきり目があってしまった。

距離にして一〇メートルほどだが、はつきりと目があったのが分かった。もしかして、恋の始まり？　お花が咲いちゃった？　フラグが立って、ハッピーエンドへまっしぐら？

「先輩っ」

しかも、ちょっと危ない妄想を全開にしそうになった俺の方へと駆け寄ってくるではないか。

……うわ、めっちゃ可愛い！

どうしよう。ここはやっぱり抱きしめた方がいい？　でも、いき

なりだと彼女も引くよね？ いや、よく考えたら俺の方に来ているだけで、横を素通りってパターンもありえる。ドッキリでどこかで隠しカメラがあつて、それだとかかなり恥ずかしいよね？ うわ……それだけは嫌だ。

「亮先輩っ」

「うお！ と、とつと……」

頭の中でもいいシミュレーションをしていた俺の胸に思いっきり何かが飛び込んできた。一瞬何が起こったか分からなかったが、ふわりとシャンプーの香りが鼻をくすぐっていき、一気に現実へと戻された。

視線を下げた先——俺の胸にいたのは、あのネコミミメイドちゃんだった。てつきり素通りするのがオチだと思っていたのでそれよのツツコミを考えていたのに、これは予想外の出来事だ。ちよつとおいちゃん、パニックだぞ？ プチパニックで、ベリーハッピーウエディング。

「ぐすつ……亮先輩。助けてくださいよー」

「え、あ……えつと、は？ 何で俺の名前を」

俺の胸で小さく呟く声に反応したが、どうして俺の名前を知っているのだろうか？ 更に混乱してきた頭で女の子の顔をマジマジと見つめると――

「せ、せんぱい……そんなに見つめられると、恥ずかしいです」

「お、おま、お前っ！ 貴美かつ」

こくりと頷く貴美は、耳まで真っ赤に染めて俺の胸元にしなだれかつて……て、ちよつと待て！

「は、離れる！ 貴美っ」

「た、助けてくださいいよつ、先輩。僕もう疲れちゃったんです。なんでも言う事を聞きますから、なんでもしますからお願いますっ」

そんな潤んだ瞳で俺を見上げるな、貴美。おいちゃんはまだ道を踏み外す予定は今のところはない。いや、この先もないけど……。大体、こいつの格好と顔で「なんでもします」とか反則だって言う

んだよ！　というか、俺はさっきから貴美を可愛いとか思ってたわけか？　それなら、立ち直れそうにないんですけど。

「せ、せんぱい……僕を連れて逃げてください」

「変な事を言うなって！　大体、逃げるってなんだよっ」

か細い身体で必死にしがみ付いてくる貴美は、鼻声と鼻水でなんだかすごい事になっているが、こいつは何をそこまで怯えているのだろうか。別に周りには変なものはないし、誰もいない。この場には俺と貴美の二人だけ……二人だけ？　あ、いや、俺も何を考えているだ。相手は男だ——女装した男だって分かっているのに、なんでこんなにドキドキしているんだよ。もしかして、道を踏み外す準備は出来ているのか？　どこかでレールは切り替えられたのか？

「ぼ、ぼく……先輩となら、どこまでもいきます。だから、一緒に逃げてください。早くしないと、また——」

すがり付くような表情を浮かべた貴美の艶やかな唇が何かを紡ぐうとした瞬間——

「いたわよっ」

「たかくーんっ。逃げないで、お姉さんといい事して遊びましょうっ」

「あー！　誰よ、あれっ。私達のたかちゃんに抱き付いているのはっ」

なんて半分怒気を含んだような女子生徒達の声が聞こえてきた。

「きゃー！　もう来ちゃったよ。亮先輩、早く逃げましょっ」

「え、お——ちょ、ちよつと待て！」

強引に俺の腕を引っ張って走り出した貴美の後ろを付いてただ走るしかない俺。さすがは中身は男だけだってそれなりに力は強いようだ。

「どこに行くんだって、貴美っ」

「どこでもいいです。誰もいないところなら、亮先輩と二人つきりなら、生きていけます」

そんな駆け落ちするカップルみたいな事を言うな。かなり混乱し

ている様子の貴美は意味不明な事を言っているが、俺も一瞬だけそれでもいいかなって思っちゃったのは内緒だ。寒さのせいで頭がうまく廻らないからという事にしておこう。

「待って、たかくんっ」

「その変態男子生徒、たかちゃんから離れなさいよ！」

うしろからとても怖い女子生徒達の執拗な追いかけにもめげず、俺達は愛の逃避行をするカップルのように中庭を走り抜け、後者へと入っていた。

……。

……。

「ここまで来れば大丈夫だろう」

「はあはあ……」

空き教室の中、扉の隙間から廊下の様子を窺ってみるが、誰も来る気配がない。

「はあー、疲れた」

「す、すいません、先輩……」

「あ、ああ、気にするな」

荒い息を整えようとしている貴美は苦しそうに俺の方を見ているが、その顔は寒さのせいか、それとも走ったせいかわからず赤く上気して色っぽく見えた。

て、見えたらまずいでしょ、俺。こいつは男は俺の後輩だ。

「せ、せんぱい？ どうしたんですか？」

「いや、なんでもないぞ、うん」

いきなり近付いてきた貴美の顔に驚いて後退あひずりった俺は、心臓が口から飛び出しそうなほどに驚いていた。こいつは本当に男なのか？今の姿を見たら誰もが女の子と疑わないだろう。男だと知っている俺ですら、間違えそうになるくらいだからな。これなら間違いがあっても……じゃなくて、何を間違いを犯す事を前提に俺は話しているんだよ！

「そ、そうだ、貴美——たこ焼き食べるか？」

「え？ あ、はい。ちょうどお腹も空いていますし。でも、買いに行くのは……」

「大丈夫だ。買ったのがあるから」

俺は手に持っていたビニール袋を掲げると、中からたこ焼きを取り出してフタを開けた。食欲を刺激するいい香りに俺も貴美も頬が緩む。

「それじゃ、食べるか」

「はい、いただきます」

つまようじを掴み、たこ焼きを一口に含む。少し冷めたとはいえ、まだ熱いたこ焼きは口の中でその存在感を存分にアピールしていた。

「あ、あつつ」

「そうですね、でもおいしいですよ」

嬉しそうにたこ焼きを頬張る貴美だったが何を考えたのか、徐おもむろにたこ焼きを一つつまようじに刺してゆっくりと近づけてきた。

「はい、先輩……あーん」

「……へ？」

「えっと、どうぞ」

恥ずかしそうに耳まで真っ赤に染めている貴美だが、その手を引っ込める気配はない。寧ろ徐々むしに俺の口に近付いているのだが、これは食べないといけないのだろうか？ いきなりの事で頭がパニック気味だが、相手は貴美で男だ。男に”あーん”なんてしてもらう趣味は俺にはない。でも、今はメイドさんなのでこれはご奉仕？なんて考えている自分が嫌だが。

「先輩……」

甘えたような潤んだ瞳で俺を見つめる貴美。

なんて破壊力抜群な表情をしているのでしょうか！ 俺は、俺は、いざ行かん、禁断の世界へ。

「ふふっ、おいしいですか？」

「……あ、ああ」

味なんて分かるか、ボケ。

一気に頬張ったたこ焼きは随分と冷めていたので火傷はしなかったが、俺の心にちよつと火傷したぜ……色んな意味で。

「あ、先輩、動かないで下さいね……んっ」

「……」

「あ、あれ？ どうしたんですか、亮先輩」

目の前にある貴美の顔は未だに赤く、その表情はうつとりと蕩けたように見える。啜えていた指をゆつくりと離すと、ぬらつとした筋が一つ伸びて消えていった。

……今、何をされた？

ゆつくりと近付いてきた貴美の顔と指が俺の唇を滑り、そのまま貴美の口へと啜えられた——と、俺の網膜に焼きついているのだが、間違いないのか？ その記憶に間違いはないのか？

「ソースついてましたよ」

可愛らしく小首を傾げて俺を見ている貴美は、つまようじを持っていたたこ焼きを俺の口へ——

「はい、あーん」

そしてまた唇を滑り……の繰り返し。

結局、たこ焼きを食べ終わるまで間、俺はそれをされ続けたようだった。と言うのも、最初の時点で俺の脳内はショートして、そのあとの事を覚えていないのだが。

「おいしかったです、先輩。また……食べさせてください、ね」

なんて頬を赤くした貴美に恥ずかしそうに言われたが、”俺はたこ焼きを食べさせたんだ”と自己暗示をかける事にした。

お前は一体、何を食べたんだよ……教えてくれよ！

第35話：クレイジー&プリティ（後書き）

お久しぶりの更新です。

次も……いつか分かりません。

第36話：文化祭って終わりじゃないの？

昼飯に何を食べたのかと聞かれたら迷わず「たこ焼き」という自信がないのは何故でしょうか。

教えてください、神様……俺は道を踏み外そうとしているのでしょうか？ いや、決して”そんな”趣味はないです。まともに女の子が大好きです。彼女が欲しいです。でも、ちよつとメイド姿の貴美が可愛かったな……。

「おにい……鼻の下が捨てる前のトランクスみたいになってる」

「うおっ——な、なんだっ！ って、珊瑚か」

いきなり背後から声を掛けられて転びそうになったが何とか踏ん張って下を向くと、両手を突き出して重そうに俺を支えている珊瑚がいた。

「お、おにい……重い」

「おっと、すまん」

体勢を整えて珊瑚の方へ向いたが、力を入れたからだろうか薄っすらと赤く染まった顔をしていた。

「ところで、珊瑚……捨てる前のトランクスってなんだ？」

「伸び切ってること」

ああ、ゴムが伸び切ったと鼻の下が伸びてるってのがかかっているわけか……こりゃ、お兄さん一本とられた。

「はい、注文。これがラストオーダー……妹市具セット大森^{まいっチング}。決して『大盛り』の誤植ではないよ、みなさん」

今日一日で色々と慣れたが、やっぱりツツコミどころが多いメニューだよな。

それから、どこを見て話をしているのかな、珊瑚さん。俺はこっちだぞ？ そっちはあっちの世界だと思っただけだ……。

妹市具セット大森……よく分からないネーミングだが、ただの力レーライス大盛りの事だ。一番まともなメニューだが、名前のせい

であまり売れていない。考えた人の頭を覗いてみたが今はこの状況を確認するのが先決だろうな――。

「なんで、誰もいなくなっただよ……瑠璃と琥珀、それに桃姉さんや鈴美先輩、その他諸々はどこに行ったんだ？」

俺が昼飯を食べて帰ってくると、あれだけいたお客さんの姿がほとんどなく、加えて珊瑚以外のメンバーが誰一人としていなくなっている事に気づいた。いつも勝手気ままに動いている人達なので別にどうでもいいのだが、一斉にいなくなってしまうと俺の第六感が警告してくるのだ。

――危険だ、逃げろ。

そんな声が頭の中でドブラー効果ばつちりに響いていたりする。現にさっきまでの宇宙世界のマスコットをパクった格好をしていたのにいつもの制服に戻っている。

「おにい……そんなに見つめられると、想像妊娠しちゃう」

「こら、変な事言うな」

真顔でボケられても対応にとっても困るのだが。

「その前に、おにい……ちゃんと、作ってよ」

「ん？ あ……すまん」

そう言えばラストオーダーがあつたな。周りの状況に気をとられていたので、すっかり忘れていた。

……。

……。

数十分後。

「ほい、完成」

レシピ通りに作った『まいっチング妹市具セット大森』を珊瑚に手渡して俺の仕事は終わりを告げた。

……しかし、アレって本当にカレーライスか？

何を作ったのかは深く考えないようにしよう。例え遠くで悲鳴が聞こえても、聞こえなかった事にしておこう。

よく分からないがとりあえずは自分にお疲れさんって事で――。

暫くして接客が終わったのか、俺の元へやってきた珊瑚はいつもの無表情とは微妙に違う優しい笑みを浮かべて――

「お疲れ様、おにい」

ねぎらいの言葉をくれた。

何気ない一言だが何故だか心に響く声に柄にもなく心臓が早鐘のように打ち、照れ隠しに珊瑚の頭を少し乱暴に撫でた。

……珊瑚相手に何を動揺しているんだ、俺は。

しかし、それを嬉しそうに目を細めて撫でられている珊瑚は、徐おもむろに俺の身体に両手を廻して――

「それでは、一緒に行きましょう」

意味不明な事を言い出していた。

「行くつてどこに？」

不意に悪代官もびつくりもあくどい顔をして俺の腕を掴んで――ガチャリッ。

……ん？ ガチャリ？

「うおっ、珊瑚――何してんだよっ」

「おにい、確保。これより連行します」

俺の腕に手錠をはめて何食わぬ顔で敬礼をした珊瑚は徐おもむろに何かを取り出して俺に見せていた。

それは銀色に鈍く光る鍵だったが、一体何に使うものだろうか？

って、現状を考えれば答えは一つしかない。しかし、珊瑚はその鍵をしっかりと握りしめると――

「……愛は自由」

プロ野球選手も裸足で逃げ出す投球フォームで振りかぶり、窓の外に投げ捨てていた。

「え、おっ――ちょ、ちよっと待てっ」

キラキラと輝きながら消えていく物体を見つめながら、俺は一体何が起きているのか冷静に考えようとした。

が、無理だ。

この状況で冷静に考えろって言うのが無理なんだよ。手には手錠がされて、目の前に悪代官ばりの表情を浮かべた妹が一人。新手のアブノーマルプレイを実行中みたいな構図だが、決してそんな趣味はない。

「お、お前……なんて事をっ」

「愛は障害が多いほど燃えるもの。ボクはおにいに萌えるけど」

声には出さないが「ニシッ」と口が笑っているような気がする。珊瑚の顔は仄かに赤いが、くねくねと悶える姿に俺は萌えるどころか恐怖を感じる。何を考えているのか分からないが俺は今、かなりやばい状況なのは理解している。

「ど、どこに行くんだよっ」

「秘密の花園。これから本日のメインイベントが開催されるのですよ……楽しみだね」

「いやあつ、何だか知らないけど怪しい雰囲気がビンビン感じる場所だぞっ！ 行きたくねえよっ」

「おにいには拒否権はミジンコほどもないんだよ。単細胞以下……くすっ」

さらりと俺の人間性を否定してないか？ 俺はアメーバより扱いが酷いのですかっ！

「さあ、愛を確認しに行きましょう、おにい」

「あだだだっ、手錠を引っ張るなっ」

とてもご満悦な表情を浮かべ、俺の腕（手錠）を引っ張っていく珊瑚。そのうしろを涙目でついていく俺。

そんな姿を廊下を歩く生徒達は生暖かい視線で見送ってくれていた。

帰っていいでしょうか？

頭の中を廻る言葉はこれだけで、目の前の光景にこめかみがピリピリと痛い。腕も後ろ手に掛けられた手錠の上から、今度は椅子に

身体をグルグル巻きに縄で縛られているし、これでは完璧に拷問か死刑執行前ではないか。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「……………瑠璃、これは幻覚かな？ 変なものがいっぱい見えるよ」
「違うと思うよ……………うん。違うよ、きつと」

もう少し、強く否定してくれないか……………ウエイトレス姿の瑠璃さん。

「兄貴、現実逃避は身体によくないよ？ ほら、ちゃんと周りを見て」

「いや、きつと俺は夢を見ているに違いない」

「それなら、一発で起きれる魔法があるけど……………やってあげようか？」

「いえ、謹んで遠慮します」

何故に腕まくりをして振り回してますか、未だに体操服の琥珀さん。

「おにい、その席で大人しくしてるよろし」

「黙れ、エセ中国人」

「エセ中国人違う。これ、夜のお店がイメージ」

「余計に性質が悪いだろ、それはっ」

それで、いつの間にチャイナドレスに着替えたんだよ、珊瑚さん。

……………って、言うか、こいつ等何やってんだよっ！

俺が連れて来られた（強制連行？）場所は体育館で、何故かそこには全校生徒の半数以上が集結していた。

『それでは、生贄——こほんっ、本日のゲスト水上亮さんが、やつと会場に現われましたっ』

甲高い声がマイクを通して響き、体育館が大きく揺れていた。

この状況は一体、なんだ？ いや、思い当たるのは一つしかないのだが、その首謀者の姿が見えないのはどうしてだろう。

それよりも、この馬鹿は何を考えているのだ。

「何やってんだ？ 功治」

『功治、ではない！ 今の俺はナイスでिकास司会者だっ』

「マイク通して耳元で大声出すなっ」

耳元で喚き散らかす馬鹿一人。何をやっているのかは知らないが、上機嫌にマイクを振り回している功治は蝶ネクタイを手直しして俺を指差していた。

『ヘイ、ユー！ ファツキ——ふべしっ』

「放送禁止用語を堂々と口走るな」

『ア、アイム……ソーリー』

なんで片言の英語を使っているのか疑問の残る功治に、自由な足を振り上げて急所に一撃を加えて黙らせる。

『そ、それでは……いたたっ、気を取り直して——』

立ち直るの早いな、こいつ。

『人目を気にして木陰でランデブー。好きなあの子とのキスは、ちよつと苦めな胃薬の味。やってきました、男女入り混じつての大乱戦……バトルロワイヤル五対一つ！』

功治が声高に拳を突き上げて叫ぶと体育館内にいる全ての生徒が

「おおおっ！」

同じように拳を突き上げて叫んでいた。

なんだ、これは……。頭が痛いとか言う前に色々とパクリ過ぎでどこからツツコンでいいのやら分らないが、とりあえずツツコミを入れよう。

「功治、恥ずかしくないか？」

「……言うな、亮。これは原稿というものがあつて、それを読んでるだけだ。決して俺のアドリブでもなんでもないから、そんな痛い子を見るような白い目は止めてください。ほんとお願いします、心からお願いします」

「それで、一つ聞きたいのだが……バトルロワイヤルってなんだ？ 五対一つってなんだ？」

酷く落ち込んで片膝を付いて俺を見上げる功治の顔には「俺も頑

張ってんだよ」と哀愁が滲み出ていた。あまりに惨めでかわいそうな顔に同情の余地がありそうだが、まったくする気もないのでパスそれよりも、バトルロワイヤルって何ですか？　もう文化祭も終わりじゃないんですか？

「ふふふっ……」

「駄^ふが三つ」

「古いわよ、珊瑚ちゃん。じゃなくて——亮ちゃん、恋はバトル。愛はロイヤルスイートよっ」

颯爽とステージに現れて一昔前の戦隊もののヒーローの決めポーズをしている桃姉さんは、赤い軍服を着て恥ずかしがる素振りも見せずに俺の方へ歩いてくる。そのかなり大胆に開いた胸元はどう見ても反則です。

……桃姉さんも十分古いと思うよ。

しかも、この冷え切った体育館の空気をもともしない桃姉さんが素敵過ぎる。

「桃姉さん、前に見せてもらった企画書と内容が微妙に違う気がするけど？」

「一緒だよ、亮ちゃん。ちゃんと最後には白歯の王子様はするからね」

「あれはしないって言ったでしょ！」

マジである白タイツ衣装を着ろって言うのかよ。

目の前では真面目な顔をした桃姉さんが俺を見下ろして笑みを浮かべていた。この人、本気だ……本気で俺に着せる気なんだ。

「あららっ、亮君楽しそうね」

桃姉さんのうしろでにっこり微笑みながら俺に手を振っているのは鈴音先輩だった。この人まで何を考えているのか、バニーちゃんの格好をしているが一番際どいと思う。

「鈴音ちゃん、亮ちゃんは渡さないからね」

「まあ、大人の貫禄ですわね。でも、私も負けるつもりはないですから」

「言っわね……鈴音ちゃん」

何故、一触即発の状態になってますか？ 何故、背後に龍と虎が見えますか？

「愛は不滅です」

「お、お兄ちゃん……大丈夫かな」

「兄貴は、わ、渡さないっ」

そこに三姉妹まで加わり、更に事態が拗れていた。

誰かこいつ等を止めてくれ。そうしないと俺がきつと一番の被害者になるのは目に見えているからっ！

『役者も揃ったようですし——それでは今から本日のメインイベント、始まりますっ』

こちらの状況などまったく無視した功治の一言で、俺の公開処刑のようなイベントが開始された。

第36話：文化祭って終わりじゃないの？（後書き）

久しぶりの更新です。

随分と放置して本当に申し訳ありません。この話が終わったら、ちよっと肩の荷が下ります。

多分、完結した作品はこれが二作目でしょうから（苦笑）

第37話：こんな終わり方もありだろう。

どなたか、俺に介錯してください。

目の前で繰り広げられる俺を無視した暴動……いや、すでに暴動の域を遥かに越えてクーデターだな、こりゃ。

いや、自分で言っている事が意味が分からないのだが、もう考えてるのも面倒になっていた。

死屍累々と床に倒れる我が妹達は二人の猛者にやられてしまったわけだが――。

珊瑚、お前は色々と見えてるから隠せ。

琥珀、ブルマは破れてないから心配するな。

瑠璃、お前は恥かしそうに俺を上目で睨むな。

みんな、そんな顔をされても俺は助けてやる事は出来ないんだぞ。だって、手錠されて椅子に固定されているんだから。

「ふふっ……鈴音ちゃん、やるわね」

「負けませんよ。さあ……もう一勝負です」

で、一食触発な状態で猛者二人である桃姉さんと鈴音先輩は指相撲をやっていた。

……なんで指相撲？

大掛かりなセットを組んでいるのにも関わらず、ステージの上でとても小規模な戦争をしている二人に、割れんばかりの歓声が体育館内から木霊していた。

「行くわよ、鈴音ちゃんっ」

「ええっ、どんと来いですっ」

そんな応援を受けて二人の背後では虎と龍がのんびりとお茶を……って、目が合ったよ。

……え？ 今のは黙ってる？ 黙ってないと、首をちょん切るぞ？ せんべいを食べながら桃姉さんのうしろにいる虎が「やってらんねえぜ」と俺を睨み、器用に湯飲みを持って「熱っ」と舌を出して

いる鈴音先輩のうしろにいる龍が俺を睨みつつ、首の下で親指を横に動かして思いつきり下げた。

こいつ等、幻じゃないのかよ？ 俺、どうやらおかしい世界に来てしまったようだ。

「むむっ……鈴音ちゃん、さすがね」

「お姉様こそっ」

その主達は意味もなくヒートアップしてますが、お姉様って誰ですか？ キャラが変わり過ぎですよ、鈴音先輩。

「なあ、ギマイスタードン引き中の亮ちゃん」

「勝手に俺の肩書きを増やすな、グマイスタームツリスケベ最低大王の功治君」

「ぐっ……やるな。さすがは俺の——ぐっ……永遠のライバルだ」
そう言っただけで倒れた功治。

……勝った。

しかし、お前は一体何をしたかったのだ？ 鼻血を垂らして前屈みで来られても、俺としてはどう対応していいのか分からないではないか。

「おにい、この隙に愛の逃避行を」

「意味が分からん。その前にこの縄を解いてくれよ」

「その縄は愛の束縛。解いてはダメダメ」

俺のうしろに立って何やらしている珊瑚。いつの間に復活したのか知らないが、珊瑚に続いて瑠璃と琥珀の声が聞こえているが、三人揃って俺が見えないのをいい事にうしろで何をしているのだ。

……遠くでハゲがこっちを睨みつけてるんですけど！

体育館の入り口付近で光源体がこちらを睨んで今にも飛び掛つきそうな勢いなのだが、隣にいる倫子に首輪を付けられて狂犬のように吼えているだけだった。すっかり飼い犬と化したようだ……ハゲ。

だが、俺も似たような現状でハゲを馬鹿にしている場合ではない。この縄を解いて自由の身にならないと、このままここにいたら俺の

身体と精神が持たない自信がヒシヒシと感じている。

……考える、俺。

必死で普段は使わない頭脳をフル稼働させてこの場を脱出する手段を――

「おーっと、どちらもいい勝負です！」

考えないといけないのだけど――

「七、八、九――おいしい！ さあ、もう一度組みなおしたっ」

まずはこの縄を――

「指相撲大会は白熱しております！ 実況は私^{わたくし}、コージー功治がお送りしておりますっ」

解かないといけないのだが。

「やかましいわ、ボケ！ 耳元で叫ぶなっ」

「だって、誰も俺の事を相手にしてくれないだもん」

拗ねてしゃがみ込んだ功治は俺を見上げて目に涙をいっぱい浮かべていた。しかし、男の涙ほど気持ち悪いものはない。手の自由が利くのなら間違いなく殴り飛ばしているが、今の俺にはそれすら出来ないのだ。

考える、俺。考えてこの窮地を切り抜けるんだ。

と、突然俺の身体を下から上にくすぐったい感触と共に何かが這い上がってきた。

「うおっ、ちよっ――あはははっ」

「お、おにい……壊れた？」

「ち、ちがっ――ぎやはははっ、くすぐ……ははっ、うおっ」

珊瑚が何かを言っているがそれに返事をする事も出来ずに身体を這い回る感触に笑い死にしそうになっていたが、不意に首筋をなぞって抜けていった白い物体が宙で一回転して膝の上に落ちてきた。

……はっ？

それを見た珊瑚はかわいそうな人を見るように俺を見つめ、琥珀はオロオロとして瑠璃は呆れたようにため息を吐いていた。

「……シ、シロマロっ？」

驚いて膝の上にいるヤツの名前を呼ぶと呑気に「おみやる」と鳴いて擦り寄ってきた。懐いているのはいいのだがいつもどこにいいのか分からないヤツだから、俺の制服のどこかにいても分からない。だが、しかし——こいつは使えるかも知れない。

天は俺に味方してくれたのか、神は救いを与えてくれたのか、やってみる価値はあるぞ。幸い、珊瑚と琥珀は指相撲の方に注目しているので今がチャンスだ。

「なあ、シロマロ。この縄解いてくれないか？」

「お兄ちゃん……それは無理だと思うよ」

「やって見なければ分からないだろ！ ほら、瑠璃も手伝ってやるんだっ」

呆れた表情を浮かべて俺の顔を見ている瑠璃は俺の声に「はいっ」と驚いたようにシロマロを手に載せてうしろに回り込んでいた。

……やっ たっ。

こうもうまくいくとは思ってなかったが、『シロマロを使って縄を解こう大作戦』は珊瑚でも琥珀でもなく、瑠璃でなければ成功しない作戦なのだ。まあ、瑠璃の性格を逆手に取った卑怯な作戦ではあるが、この場から逃げるためには心を鬼にしなければならぬのだよ！

「お兄ちゃん、やっぱ無理だよ。シロマロちゃんには手がないんだから」

「……そうだったな」

そう言えばそうだった。

シロマロは丸いだけの未知の生き物だ。その身体でどうやって縄を解くというのだ、俺の馬鹿！ なんて思うはずもなく、そこも計算の上なのだよ。

「よし、こうしよう」

「え？ ど、どうするの」

「少しだけ瑠璃が縄が緩めるんだ。そこをシロマロが口で解いていくから」

「で、でも……それは」

「いいから早く。シロマロが疲れちゃうだろ」

嘘八百並べて適当な事を言う俺につしろから「うん」と真剣な声が返ってくる。

……ごめんよ、瑠璃。

素直で優しい瑠璃を騙すのは心が痛いんだけど、俺もいつまで大人しく捕まっているわけもなく――

「少し緩んだよ、お兄ちゃん」

瑠璃の声に腕に力を込めていた。

すると少しだが腕が動いたので更に動かしていくと、腕に自由が戻ってきた。しかし、まだ手錠が掛かったままだが、足は自由なのでとりあえずは逃げる事が出来るようになったわけだ。

「お兄ちゃん、縄が解けちゃったよ」

「いいんだよ。それより瑠璃……ここから出るから手伝ってくれ」

「え、でも……」

「お前だけが頼りなんだよ、瑠璃」

必殺、泣き落とし。

瑠璃には子供の頃からこれが一番よく効くので、すぐに俺の手助けをしてくれるいい子なのだが、そこには一つだけ問題がある。

「お兄ちゃん……私と一緒にいてくれる？」

「あ、ああっ」

ちよこんと椅子の脇にしゃがみ込み、俺を見上げる小動物を彷彿とさせる潤んだ瞳にこの言葉。瑠璃が言う『一緒にいてくれる』とは結婚してくれるの意味で、子供の頃は意味も分からずに頷いていたが、最近では微妙に言葉のニュアンスが分かるようになって危険な言葉だと再認識したばかりなのだが、この状況では文句を言っている場合ではない。

「うんっ、分かった。私、お兄ちゃんと一緒にどこまで――ひにゃっ」

「何をしているかに……」

「お、お姉ちゃ——いたたっ」

鬼の形相で妹にアイアンクローをする姉の図って言うのは恐いものだね。黒いオーラが背後で舞い踊っていますけど、見なかった事にしたのですが出来ますでしょうか、神様。

……え、無理？

そんな一言で片付けしないで俺を助けてくれ。すでに瑠璃は泣きながら実の姉に土下座しているし、その姉は俺をロックオンして睨んでいるし。

「おにい……」

「いや、まあね……ちよつとトイレに行きたいなって思っ」

「そんな嘘はダメ。ボクには全て分かるんだから……おにい、一緒に逃げるならボクにして」

これまた意味の分からない事を言っで俺の手を両手で握る珊瑚。しかし、後ろで握られてもさっぱり分からないのだが両手で包まれている温もりだけは分かる。だが、反対の手を包んでいる温もりは何だろうか？ そう思っているといきなり骨を砕くのではと思うほどの力で握りしめてきた。

「あだだだっ——だ、誰だよっ」

「抜け駆けはダメだよ、お姉ちゃん」

「ちよっ——その声は琥珀かつ？」

「兄貴は黙ってろ！」

何故か不機嫌な琥珀がうしろから怒鳴っているが、更に俺の手を雑巾を絞るように力を込めていく。

「いだだっ、ちよっ——功治、助けてくれっ」

「え？ 何だっ——ちよつと今いいところなんで無理。とりあえず頑張ってる」

うしろで俺の手を雑巾のように絞っていく姉妹……っ、気付いたら両手が痛いんですけど、どういう事ですか！

功治は指相撲をしている桃姉さんと鈴音さんの実況に夢中だし、瑠璃は未だに土下座を続けているし、シロマロは……役に立たない

し、後ろの二人は問題外だし。

観客は指相撲に一喜一憂してこちらの事などまったく見てないから誰も気付き気配なんてない。

「お前等、いい加減に——いだった、絞るなっ」

俺の声などまったく聞こえていない二人のやり取りを説明するのは面倒なので割愛するが、このままでは俺のゴールデンフィンガーが全て駄目になってしまう可能性がある。

ここはなんとしても抜け出す方法を考えないといけないのに痛みで思考がまとまらないが、この場で俺の助けになるのは己の体のみ。なんとか頑張つて逃げようとしているのだが、手錠が邪魔で腕が動かないし、指をゴリゴリされて泣きそうなほどに痛い。もう諦めて全てをこのまま委ねようかと思っていたら、一際大きな歓声が体育館の中に沸き起こっていた。

「総合商社——櫻井商事！　じゃなかった。勝者、櫻井桃子っ」

「いえーいつ、勝ったよお」

そんな俺の耳に功治の馬鹿に大きい声が聞こえ、次いで歓声と拍手が体育館内を包み込み、俺の前にすつと影が出来ていた。

「負けちゃった……亮君」

俺の前に立つ鈴美先輩は今にも泣きそうな顔で——

「私、一緒にいたかったのに」

とんでもない事を言つて抱きついて来た。

「なっ——いだったっ」

俄かに騒がしくなる体育館内。うしろでヒートアップする馬鹿二人は俺の手を更に絞り上げていた。

「い、痛いって！　こら、手を離せっ」

「おにい、鼻の下が時間が経ったラーメン」

「あだだっ、それは伸びきっているって事かっ」

「オーイエス」

素直に伸びきっているって言えよ。

「亮君……は、いつも一緒よ」

「鈴美先輩、『部活』って言葉をハッキリいましょうねっ」

「あら、言ってるわよ？ 両君には聞こえない魔法の言葉なのかしら」

言ってる意味が分かりませんけど！

微妙に暴走し始めた鈴美先輩が俺の首に抱きついて甘い声で囁き、それに呼応するように手が引き千切れんばかりに絞り上げられていく。

……ぐおっ、限界です。

すでに手首があらぬ方向に曲がっているのが分かるし、紫色に変色しているのも見なくて分かる。

だって、手の感覚がないんですもの。俺のゴールデンフィンガー

……さようなら。

「ふふふっ……」

「駄^ふが三つ」

「違うわよ、亮ちゃん。同じボケは二度使うのは漫才師としては邪道で失格よ」

そんな俺の前にまたしても人影が立ち、つい条件反射でボケとツッコミをやってしまった。

「ほら、みんな離れてっ——これより、表彰式を行ないますっ」

桃姉さんの声に反射的に立ち上がっていく瑠璃、琥珀、珊瑚の三人。さすがに子供の頃から一緒に遊んだ仲であるので、上下関係は今でも有効のようだ。そして、渋々離れていく鈴美先輩は「亮君、またね」と悪戯っ子のような笑みを浮かべ、俺の頬に軽く柔らかいものが触れていた。

「では、功治君お願いね」

名前を呼ばれ、壇上の中央に歩いていく功治が――

「ちっ、亮の分際で……あとで覚えてろ」

とマイクを通して呟き、体育館内にいる生徒の半分（主に男子生

徒）が頷いていた。

……おいつ、俺が何をした！

物騒極まりない連中の血走った目が全て俺に向いている事に気付
き、居心地の悪さ一〇〇パーセントの中、しめやかに表彰式が始ま
っていた。

が、そこで俺は気付いた。

俺を椅子に縛り付けていたロープも解けている事に。

手が自由になっっている事に。

チャンス？　もしかして、逃げ出すチャンスかも知れない。

俺は白々しく横目で表彰式を見たが、誰もが桃姉さんの勇姿を称
え、俺の方には注意が向いていない。

「優勝者の櫻井桃子さんに盛大な拍手をっ」

功治が片手を上げ、体育館内は拍手に包まれていく。

「それでは、優勝した櫻井桃子さんには優勝商品である水上亮を授
与します」

「俺かいつ」

「はい、そこっ——優勝商品が喋らないっ」

速攻で俺を制し、睨みつけてくる功治を最高の笑顔で睨み返すと、
「ごめんなさい」と蹲ってしまった。小さな声で「トラウマが増え
る」と呟いているが気にしない。

「それじゃ、亮ちゃん。愛のウイナーロードを凱旋よ」

腰に手を当てて鼻息荒い桃姉さんには微妙な間違いはツッコミ不
用らしい。

そうこうしている内に生徒の群れが二つに分かれ、体育館の入り
口まで一本の道が出来上がっていた。

……おおっ、チャンス！

今の俺を止める事が出来るのは誰もいない。さあ、自由への扉に向かつてダッシュしよう――。

「ふふふっ……」

「りよ、亮ちゃん？」

困惑した顔を向ける桃姉さん。珊瑚、琥珀、瑠璃も同じく困惑した顔で俺を見つめ、鈴美先輩は何を考えているのか分からないのほんとした顔をして珊瑚の背後に立っていた。

「はははっ――俺は自由だ！」

俺は勢いよく立ち上がり、身体を縛っていたロープを投げ捨て走り出した。

「あっ、亮ちゃん！」

驚きで上ずった桃姉さんの声。

「おーとっ、優勝商品が逃げ出したぞ！」

マイクを通して聞こえる功治の馬鹿声。

しかし、そんなもの関係なく俺は走り続ける。自由への扉まで――。

「誰でもいいから、亮ちゃんを捕まえて！ 捕まえてくれたら、いい事してあげるからっ」

が、敵もさるもの。

とんでもない事を叫んでいる桃姉さんに呼応して体育館内には雄叫びが共鳴していた。

「おにい……逃亡は前科持ちになる」

「お兄ちゃん、待ってよー」

「兄貴、逃げるなっ。男らしくないぞ！」

口々に好き勝手言っている我が妹達に――
「亮君、一緒に遊ぼうね」

爽やかな笑みを浮かべて俺と並行して走る鈴美先輩。

体育館の入り口を抜け、渡り廊下を疾走する俺に平気な顔で付いて来る鈴美先輩は鼻歌混じりで余裕だった。

「ちよつ——先輩」

「ふふつ、私以外と足は速いのよ」

「今はそんな事聞いてませんよつ」

「あら、残念。でも、早く走らないと危ないかもね」

楽しそうにうしろを振り返った鈴美先輩につられて振り返った俺に目に飛び込んできたのはとんでもない光景だった。

『おにいちゃんを捕まえろつ』

『兄貴を捕縛して血祭りにあげろつ』

『祭りじゃ、祭りじゃ』

体育館の入り口に殺到した生徒達が我先に出ようとして、殺気だった声や野太い罵声混じりの声が俺に向かって飛んでいた。

その中を抜けて出てきたヨレヨレになった四つの人影。

「亮ちゃん、逃げないでよ。一緒にいい事して遊ぼうよお」

甘えるような桃姉さんの声が聞こえ——

「おにい、一緒にいい子になるナリ」

珊瑚が意味の分からない事を言い——

「兄貴、す……すすすつ」

琥珀は顔を真っ赤にして何かを叫ぼうとし——

「お兄ちゃん、行っちゃだあつ」

何故か涙を目にいつぱい溜めている瑠璃の姿があった。

「モテモテだね、亮君。だから、私も離れられないんだけどね」

呑気な鈴美先輩の声が隣から聞こえ、俺は血の気が引いていくのが分かった。

「いやーっ、死にたくないよつ」

虚しく廊下に響く俺の声をかき消すように——

「——大好きだよっ」

五人の口が一斉に同じ言葉を紡いでいた。

妹が多いと結構大変です。

「おにい、一緒に一生を過ごすナリ」

ちよつと変わった長女、珊瑚。

「わ、私も一緒がいいっ」

天然でドジな双子の姉、瑠璃。

「ちよつと、二人して抜け駆けしないでよっ」

口は悪いが憎めない双子の妹、琥珀。

可愛い俺の妹。でも、血の繋がりなんてない。

それでも、俺の妹に変わりはない。

それに——。

「こら、三人共。亮ちゃんは私のものなんだからね」

幼なじみの無敵お姉さん、櫻井桃子。

「それは違いますよ。亮君はみんなのものですよ」

お茶目で可愛い先輩、一之宮鈴美。

俺は、お兄ちゃん、弟で、後輩で。

って、今はそんな悠著な回想に浸っている場合ではない！

「俺は俺のものだっ」

俺は力の限り叫んで走り出していた。

うしろからは口々に俺の事を呼ぶ声が聞こえ、好き勝手言っているが皆楽しそうに笑っているように感じる——

「俺だって、みんなの事が……」

そう呟いて、照れ臭い気持ちを胸に廊下を走り続けた。

第37話：こんな終わり方もありだろう。（後書き）

お久しぶりの更新になりました。

そして、一応はこの話で最後になります。エピローグを検討していますが、区切りをつけて完結とします。

最後はメチャクチャな終わり方で申し訳ありませんが、脳内妄想全開で書いた話で、ネタが尽きたところで終わりだと思っていたのですが、予想外に反響があつたのでどうしようかと思いました（苦笑）この話を最後まで読んでいただいた方には納得の出来ない終わりかも知れませんが、この先も彼等の日々は続きます。皆様の応援があったおかげで何とか完結したような話です。脳内妄想で書く事はもうないかと思いますが、彼等の人生を応援してあげてください。最後に、長い間お付き合いくださいまして本当にありがとうございます。

次の新しい話でまたお会い出来るのを楽しんでいます。

エピローグは年内には書き足す事が出来れば掲載します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312b/>

ギマイスター亮

2011年1月4日23時57分発行